

---

# 妹の暇潰し

王手

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妹の暇潰し

### 【Nコード】

N04740

### 【作者名】

王手

### 【あらすじ】

例えば から始まる主人公語りの章毎完結コメディ小説です。

主人公である僕とその妹、妹の友人などと繰り広げる会話が大部分となっています。

一章は流し読み、二章辺りから読んで下さるとありがたいです。

R15は時々エロい単語が出てくるので付けましたが、大した意味はありません。

初投稿ですので至らぬ点が多々あると思いますが宜しく御願ひします。

番号の後のPはプロローグを、Eはエピローグを表します。

更新は不定期ですが新章に入るたびにその章の間は三日以内で更新する予定です。

この物語はフィクションです。

実在の人物、団体、などには一切関係ありません。

なお、学説、法則などは本来あるものを改変してある場合が御座います。

001・P(前書き)

一章 「妹の常識潰し」です。

例えば今の僕の財布の中に、数枚の硬貨しか入っていないなくても、何ら不思議なことではない。寧ろ近郊の市立高校に在学している僕が一万円札や五千円札を所持している方が、高校生としては所持金が高過ぎていとも言える。それにうちの高校はアルバイトを全面的に禁止しているので、主な収入源は親から毎月支給されるお小遣いのみで、それも僕の毎月の収入は二千元という同年代の生徒と比較すれば平均程度の額である。故に滅多にしないが大きな買い物をする時しか僕の財布に一万円を凌ぐ程の大金は入っていないのである。

僕の財布は黒い皮風のお札を折り畳まないタイプの財布である。某デパートで売っていた二千元という安価な財布だが、僕は十分満足している。とても数千円では買えないようなものである。

しかし態々（わざわざ）自分の財布の中身を明言することは、何か理由があるのだと、読者諸君は気付いていることだろう。

まったくもってその通りである。

今朝、財布の中を見た時は諭吉さんが僕に微笑んでくれた。だが、今日という日は悲劇的に、前述した滅多にしない大きな買い物をした。正しくはする予定だった。日なのである。心から朝食を取っていた時間に戻りたいと思う。

僕は朝早くに、ある物品を購入するために貯金を崩して街に繰り出した。四日前に高校の夏季休業に入っているので、最近は家に引き籠りがちである。よって街ならぬ外に出るのが久し振りだった。

友人と遊ぶ予定だったが、その友人は定期試験の補習を学校の教室

で受講している。

僕の友人には赤点を取る人間しかいないようである。

生憎当の本人である僕は凡才ながらも、その境地には達していない。  
敢えて自分で非才と言わないところも憎いが、凡才というのも少々  
自虐的であることに違いはないだろう。しかしこの凡才という言葉  
さえ他人の受け売り。僕の語彙は結局ある程度底が知れたものなの  
だ。

だが多少無理して選んだ高校だ。

赤点を取らないだけでも十分ではないか。

結果的にはいい方だと僕は考えている。と言ってもその凡才と言う  
言葉は満更嘘でないことも確かだ。僕は赤点の一線上をギリギリ浮  
遊している事実まことに苛こまれている。簡単に言えば落ちこぼれ予備軍と  
表現できなくもない。

普段の授業を寝て過ごし、夜は遅くまで遊びに興じる。

このまま中学生のような生活をしていればその一線ともいわずれ接す  
ることだろう。

閑話休題。

店に向かう間、僕は下ばかり見ていた。

別に落ち込んでいる訳ではなく 寧ろ落ち込む前の話で

ただいつも周りを見ないで歩く習慣から、その時もそうしてい  
た。その癖を何で早く直さないで放置しておいたのかと、自分に問  
い質ただしてもどうしようもなく、ただただ後の祭りである。

いつもは雰囲気で行方から来る人を避けていたが、その時はま

さに運悪く人にぶつかってしまったのだ。

僕が住むこの街に、カツアゲを行う不良のような人種が存在するならば、カツアゲされる側の人種が必然的に存在する。

無論、それが僕だとしても例外にはならないだろう。

ぶつかって直ぐに謝ったはずだが何処からともなく、まるで虫のように仲間らしい人が沸いて出てきた時には流石に肝を冷やした。それから拒否権もなく財布から諭吉さんが誘拐されたことは言うまでもない。

まだこんな傍若無人な行為が行われていたとは驚きだ。

そもそも恐喝と言うものは犯罪行為ではなかったか。

今までに平和な日常を過ごしていた僕は、ため息混じりに思索した。

そんなことを思いながらいつの間にか僕は自宅前に居た。拳銃の果てには落ち込みすぎて自分の家を通り過ぎてしまいそうだった……。

こんなことだと夏季休業中は外出する機会を一切失くしてしまいたい、と心から思う。食糧を買い込もうと思いついたが、財布の中身を思い出して尚一層落ち込んだ。

くそっ、何で僕が……。

僕は一般的な被害者の心情を呟いて、玄関のドアを開けようとドアノブに手を掛けた。

と、突然玄関のドアの方が先に開いた。

「お帰り、兄貴」

僕の妹が顔を出した。

「もう帰ってきたの？」

「・・・いきなり開けるなよ。僕の家はいつから自動ドアを導入したかと思ったじゃないか」

「イライラしてるね、何かあったの？」

と、妹は心配する素振りそぶりをした。

心配する振り、である。

「流石さすがに鋭いな」

僕は肩を落としながらつい先ほど起こった情けない出来事を説明した。

「よく自分の妹にそんなことを話せるね。本当に情けなくはないの？」

この妹の一言には虚しくなってくる。

だが、そういうことは

「お見通しなんだろ？ どうせ」



001・P(後書き)

会話中心と謳っていますが003ページまでは会話は殆どありません。

我が妹、麻香<sup>あさか</sup>は人並み外れた頭脳を有する。この「人並み外れた」という言葉の人並みは、普通の人間が使うものとは次元が違う。

別に妹の脳の容量が平均以上なわけではない。

そもそも頭脳はそんな簡単な代物ではない。寧ろ妹は頭が小さい方で  
七頭身であるわけで  
人より脳が小さいという見解ができる。

常識だが人の脳は頭の大部分を占めている。

これでも妹が天才として僕の遙か頭上に君臨するのは妹曰く脳を使う才能にある。

どんなに大きな脳を持っていようが、一割程度しか機能しなければ平均を下回るのは至極当然。実際に人間の脳は一割程度しか有効活用されていないと過去に提唱されたらしい。まあその説はまだ科学が発展していない為の思い込みだったが。

最近では脳の大部分は有効的に活用されているといわれている。しかしそれでもあまり使われていない部分があり、脳の一部が破損など何らかの機能的障害が発生した場合にあまり使われてない部分が代わりに活用されている可能性があると考えられている。それに有効活用といっても実は60%がその限界である。80%の使用で精神的・身体的な障害が生じ、もし100%完全に使い切れれば脳細胞は焼き尽き死滅。脳が死んでしまう訳である。

因みに妹は自分の脳を過不足なく自由に使える特殊な能力があるらしい。つまり、全ての脳を100%を使用することができ、さらにその使用率を故意に調整できるということだ。どんなに脳に負荷を与えようと脳細胞はそれを留まる。

本当はもっと詳しく妹から説明されたが、これ以上は理解することができなかった。それにしてもざっくりばらんな説明で申し訳ない。言い訳だが、元々人間の脳ははつきり解明されている訳ではないだ。僕に簡単に理解できるほど科学的に、正解にできているわけではないである。

ここでもう一つ重要事項を説明したい。

妹の持つ能力ならぬ脳力だ。

脳の力を大きく分けると計算、感情、記憶、行動処理の五つに分けられる。

妹は全ての能力値が特異的な値を示すが、その中でも特に発達しているのは記憶能力である。

記憶には三種類あるとされている。

一番短い感覚記憶は、映像や音が保たれる最大1〜2秒ほどの記憶。次に短い短期記憶は、感覚記憶の10倍の約20秒間保持される記憶。

半永久とも取れる長期記憶は、忘れない限り、死ぬまで保持される記憶。人間の全ての記憶は長期記憶の貯蔵庫、長期記憶貯蔵に蓄えられる。

この記憶の忘却条件は時間の経過による老化、記憶同士に起きる干渉、検索時の糸口が消失する検索失敗と諸説ある。

妹の記憶の凄さはここにある。

妹の記憶は忘却されないのだ。

つまりどんなに時間が経とうと、記憶同士が干渉し合っても、チラツと目にした素人が書いた出来損ないの詩の一句でも、それは妹の脳から無くなる事はない。

瞬間記憶能力。

他に完全記憶能力とも言われるが妹は自分自身の能力をそう呼んでいる。

一瞬。

一瞬間。

ほんの刹那に起きた出来事でさえ、見境なく妹は記憶する。逆に言えば、悪いように言えば妹はどんなことでも忘れることはできないと言うことである。この超人的記憶能力を安易に利点かいまくと言えるかどうかは僕には皆自分からない。

妹の能力を全体的に且つ具体的に説明すると　　正確さに大きく欠けてしまうが　　妹の才能が大体分かるはずだ。

敢えて正確さに欠けると伏線を敷いたのは、僕はまだ妹の能力の全貌を知らないからである。八桁乗法の暗算も、この街の公図と全ての住民の氏名を暗記しているのも結局、生活に支障がない程度のものなのである。

例えば十桁百桁の乗法ができたとして、普段の日常でそれを使用することが何回あるだろうか。よほど特殊な職業でない限り、こんな常人離れした業は使われないだろう。と言っより他人には使えないだろう。

それに妹は女子中学生。

異常計算の使用頻度は皆無と言える。

よって妹がそれをできるかどうかなんて知らないし、知ったところで僕は今更驚くことではない。この時点で驚愕の範囲内にある妹の計算能力が、加減乗除何桁になろうと同じ驚愕の域にあることに変わりないのである。

もう一つ特化的才能が妹にはある。今までの能力とはまったくの別物だが、妹に言わせれば瞬間記憶能力のただの副産物らしい。

### 読心術。

顔の表情、筋肉の微妙な変化により相手の思念を察知するというもの。しかしこれは普通の人間でも修行すれば会得できないこともない能力である。

妹の読心術は一般なそれとは別格だ。

僕のような妹と親しい人間は、交わした会話、表情、行動を何通りも暗記されている。妹はその様々なパターンを現在の対象に对照させて相手が思案していることを推理する。（決して狙った駄洒落ではないことを弁明しておく）

それは100%ではないものの正答率は九割を超え、少なくとも僕の考えていることは妹には殆どお見通しなのである。

申し訳ないが兄の妹紹介にまだ、しばしお付き合い頂きたい。

僕が妹を（滅多にないが）自慢する時は決して頭の良さを挙げることはない。態々自分から兄より妹のほうが秀才であるという醜態を晒すのは勘弁だ。

僕が誇るべき妹の長所は、性格でも乙女らしさでもなくその容姿である。彼女の性格が長所といえは一般的な優しさが短所に分類されてしまい、彼女には乙女らしさからは遠からず距離がある。

よってその美しい顔立ちと腰近くまで伸びる黒曜石の如き漆黒の長髪、それに前述した七頭身に相応する長身。

認めたくないがそれを総合的にも一般的にも美女と言うはずだ。本当に僕の妹ならチンパンジーにチンパンジーを足して2で割ったような容姿になるはずだが、結局そういうところも常識を超越している。

妹は乙女ではないと言ったことの真意について弁明を述べてみる。

このままだと怒らないとは思いが一時間罵詈雑言を聞くことになるのは確実だ。

県内でも随一の偏差値を誇る私立撫子大学付属中学校第三学年に在学する妹はそれなりにその名が知られている。撫子大学付属中の「大和撫子」と言えば県内に知らない学生はいないほどである。定期試験では全教科満点。所属部である柔道部で全国大会で優勝した。

100回以上の告白を即答で断った。その武勇伝は数え切れないほどである。単純が故にそれらの正否は定かではないが、僕の思うに

その殆どが既成の事実だろう。

麻香の才能は、⑤囊中の錐きじとは言つよつに麻香と言つ小さな器に仕舞われる様な代物ではないのである。

漫画や小説に出てくる完璧超人は必ずと言っていいほど弱点が一つや二つある。

かの英雄アキレウスでさえ唯一の弱点として踵かかとがあるように、話を盛り上げるための弱点が用意されている。読者にとつて格好良い登場人物でもチートプレイで話を無茶苦茶してくれば流石に愛着は失くなってしまうだろう。

これを考慮してこの作品を自虐しているわけでは決してない。

無論、話の流れから分かるように妹にはウィークポイントが存在しないのだが。

妹の生きてきた人生で僕の見限り心底困ったところは一度たりとも目にしたことはないのである。

ここまで数ページを丸々使つて妹を抽象的に（・・・）解説してきたが一度話を戻すことにする。ここで説明し切れなかったことはまた折を見て知ってもらふことにしよう。

「桔梗ききょう自衛団じえいだんつて何なんだよ・・・」

狭い自室のドアを開けて僕はわざわざ声に出して今の疑問を自問した。

自問自答……ではない。

始めて聞く固有名詞に対して自答できる想像力は僕にはない。

あれから妹は僕がカツアゲされた場所を私たちの縄張りだと家を飛び出していった。そもそも妹が玄関に居たのはその為だったのかもしれない。

縄張り……って。

正確にはそれに「テリトリー」とルビを振らなくてはいけないものを僕は妹を下等哺乳類が如く扱ってやることで、耳にしたことがない組織の名称を忘れようとしていた。

チンパンジーか。

また何か不思議単語を口にすれば僕の脳内でゴリラに昇格させてやる。

僕は悪態をつきながら布団の上に寝転んだ。

今時ベッドに寝ないのは、ベッドを部屋に置くのと逆に寝る空間がなくなるからである。何次元空間にいるのかと思われるかもしれないが、単純にガラクタが部屋を埋めているのが原因である。僕は物に囲まれないと落ち着かない性格なので致し方ないのだ。

「……寝るか」

今朝はわりと早起きだったのでまだ眠気が覚めない。休日は十時ま



で寝てないともたない厄介な体なのだ。

言うほど遅くないが、僕はゆっくりと<sup>まぶた</sup>瞼を閉じた。

## 003 (前書き)

途中、無駄にシリアスな部分がありますが、嫌いという方は飛ばして読んでも問題ありません。

人の部屋に入る時はノックをしよう。

今、全国の他人の部屋に入室する際にいきなりドアノブを回す諸君に苦言を呈<sup>てい</sup>する。

というより全国探しても唯一無二の天才妹に呈したい。

ドアが開く気配で目が覚めた。                   ならまだ格好もついたが、  
ドアが開くということは狭い部屋で安眠する僕の足にドアが激突する  
という事で、勢いがついていればついていっているほど強烈な一撃が僕の  
踝<sup>くるぶし</sup>を貫くというわけで

「痛えっ!!！」

と、僕は文字通り飛び起きた。

「あ、ごめん」

いつの間にか帰宅した麻香がそこにはいた。  
時計を見ればあれから1時間近く経っている。

「っ……く……。せめてノックをしろよ……。ドアが壊れる  
か、僕の足が壊れるか勝敗に僕の体の安否が大きく関わる勝負にな  
ってるじゃないか」

見ればドアの片端下が少し凹んでいる。これは何度も何か硬い物を  
ぶつけて出来る窪<sup>くぼ</sup>みだ。誰の仕業かは言うまでもない。

「ノックなんてするわけないじゃん。兄貴が寝ていること分かってるんだもん」

「さっきごめんって言わなかったか!？」

「それは壊し損ねて謝ったんだよ」

「兄の足を軽い気持ちで壊すんじゃないやねえ！ 動機は一体何だ!？」

「物を壊すって楽しくない？」

「危ない破壊衝動を晒してんじゃないやねえよ。発泡スチロールでも折っている!」

それと兄を物呼ばわりするんじゃない!

何物なんだ、この女。

序盤から凄まじい発言だ……。

「……それで、何の用だ？」

「いや、これを渡そうと思って」

と、言ってポケットから1万円札を取り出した。

「はい、これ。取り返してきた」

「……ありがとう」

見誤った。

僕の妹はゴリラどころか聖人に昇格した。

猿から崇拜対象になるとは、誰も予想していなかっただろう。

「お礼なんていいよ」

妹は照れくさそうに微笑む。

「なんて言うかさ・・・麻香の事、見直したよ。やっぱり何かお礼をしないと・・・」

「だからお礼なんて大丈夫だって。あのお兄さん達からたつぷり頂いたから」

「やってることが不良と変わらない!？」

見誤ってなかった。

再度降格決定。

数秒の崇拜対象であった。

「まあいいでしょ、お金が返ってきたんだから。・・・また出かけるの?」

「・・・そうだな。今度は大通りを上を向いて歩くことにするよ」

「涙が零れない様に? それで二の轍を踏まれないと思っている兄貴が、私は心配でならないよ」

今度は電柱にでも激突する気?

と、僕の思いつきのボケを長々拾ってくれる妹は本当に心配になっ  
たらしい。

「私もついて行こうか? また絡まれるのも面倒だし、私もちよつ  
と買いたい物があるんだよね」

確かに麻香を連れて行けばどんな事件に巻き込まれようと

例え通り魔に襲われても 万事上手くいくだろうが、今回は

妹に頼れない事情がある。

僕は頭を横に振った。

「気持ちありがたいが駄目なんだ。買うものをお前に見られたくないんだよ」

嘘ではない、真実。

これでは読心術の正答率も多少下がってくれる。

筈だ。

「え、何、エロ本？ でもそれだったらコンビニで事足りるよね・・・」

「買ったっ！」

兄にどんな嫌疑をかけてるんだよ！？

それにしてもエロ本が真つ先に候補に挙がるのは何故だろうか。

「そつだよね。そういう本なら家にあるものね・・・そういえば兄貴、最近私のブラがいくつか無くなってるんだけど・・・？」

「何だ！？ 僕を疑っているのか！？」

謂いわれのない言いがかりは止めてくれ！

僕は青天白日の身だぞ！

「まさか兄貴が本当の変態だったなんてね・・・」

「いや待て、麻香」

ここで僕が妹の畳み掛ける話の腰を挫いた。

「ん？」

「女性の下着を欲しがることは変態の発想ではない」

変態の定義を僕は自分の解釈で話し始める。

「変態というものはだな、自分の欲求不満で他人ひとに迷惑をかける人を言うんだ」

「だから兄貴でしょ」

「少し黙れ」

敢えて否定はしない。

「健全な男のエロスを全否定する気が、貴様は」

「兄貴を全ての・・・いや健全な男子と一緒に扱いにしないで頂戴」  
「僕を健全としない理由は何だ!？」

いくら麻香でも予想外すぎる発言だ。

僕だっていつぱしの性的欲求は持ち合わせている。・・・いや寧ろ平均以上かもしれない。経験がないだけあって行為に対する憧憬どうげいは計り知れないものがある。二十歳超えるまでの経験してみたいものだ。財布に入れてあるお守りを使う日はいつ来るのだろうか。

因みに財布にコンドームを入れておくのは良くないらしい。摩擦が多く生じる財布においてゴムに穴が開いてしまう可能性が高いらしい。穴が開いてしまえば機能的に意味が失くなってしまふ。

「童貞が知ったような話をしないで」

「お前だって処女だろう!」

告白してきた人間の好意を悉く無下こたいむげにしてきたんだから。そんな機会けいは一度もないはずだ。

「まだ穢けがされてないだけ。男なんて経験があろうとなかろうと汚れ

た人種でしょうが」

「……」

微妙に的を得たことを言いやがる……。

「健全の定義が兄貴の中ではあやふやなの。元々健全という言葉の兄貴が使っている場合、意味としては『心身ともに健康で異常がない』という意味なの。兄貴は精神面に問題が大ありだから健全という言葉は当て嵌らないよ」

「僕がいつ精神面に異常をきたした!？」

「毎日。だから私の下着が無くなるの。何処に隠したの？ 早く返して下さい」

「むやみに敬語を使うな!」

僕が脅してるみたいになってるじゃないか!

これ以上に間違った敬語はない。

「ああ、私は何て可哀想な妹なんでしょう。兄に下着を奪われ、しかもそれをだし(・・・)に脅しをかけられているなんて……。私はいつ兄の魔の手にかかってもおかしくはない」

「そんな場面は一生こないわ!」

魔の手にかければ親近相姦になつてしまう。

妹萌えつてキャラじゃないだろ、お前は。

「……少しくらい乗ってくれても良かったんじゃない?」

僕の乗れない言動が不満らしい。

面倒くさい妹だ。



「どう返せばよかったんだ？」

「『ブラを返して欲しくば俺にデレろ！ 今までの人生のツンの分、俺に精一杯デレるのだ！』」

「お前、ツンデレキャラなのか!？」

今日は新しいお前に出会った気がするよ！

「あ、そういえば麻香」

不思議な方向へ脱線していた話を無理やり別の話へ変える。

軌道修正っていつか車両交換。

つーか元々線路の上を走っていたかが謎だ。

「ん？」

楽しくて仕方がない実の兄イジメを強制終了されて少々不満が残っているらしい。麻香の顔から怪訝さが見て取れる。

「ふと思ったんだけど、お前好きな奴とかいるのか？」

「いるよ」

即答。

間髪容れずに即答。

ここまで隠し気もなく答えられるとこっちも対応が困る。

結果、逆にこっちがたじろぐこととなってしまった。僕は少し唸<sup>うな</sup>って理由を言う。

「……いやちょっとした好奇心で、さ。その男とはよく話したりするの?」

「そうだね、割とよく話すよ」

「付き合おうとは思わないのか？」

「思わない」

それにさ、と妹は続ける。

「私ってさ、友達少ないんだよね。知ってると思うけど片手の指に入るぐらいしかいないんだよ。その中の本当の友達なんて一人だけだ。だって兄貴みたいにこんなに長時間本当の私と話して私のことを嫌いにならない人は滅多にいないよ。私は心を読めるから本当に私のことを好きな人って分かるんだよね」

そう、麻香は決して他人には本当の自分は見せない。

麻香は心を許した相手にしか僕と交わすようなくだらない話はしないのだ。

くだらない話をする時は妹は必ず毒舌になる。

逆に猫を被る時は全知全能の神を狂言する。

二つの人格はまったくの別物だが、本当の妹の人格を好きになる人間は今まで僕しかいなかった。

何でも知る妹を両親は避け、話が合わない同級生は妹を嫌った。

だから妹は外界で猫を被る。

誰もが抗えない神となることで、誰もが敬う対象になることで自分の居場所を確立している。

そうしていればいつも王は民の真ん中で居られる。

別に寂しくない、と麻香は言っていた。

そうしていればいつも認められるだけ。

許される。

羨ましがられる。

そして

嫉まれる。

しかしそれは自分であって本当の自分ではない。

妬み嫉まれようと、それが被っている仮面だから麻香はそれをよしとする。

何度か人を王宮みやに呼んで本当の自分を打ち明けた。

しかしそれを受け入れられることはなかった。

本来住む世界が違う王あさかが他人と打ち解けることは極めて難しいことなのだ。

僕は麻香のずっとそばに居て、僕が幼い頃から麻香を見ていた。

そのためとは言えないかもしれないが、僕は麻香を受け入れている。本当の麻香は僕の中でも本当の麻香だから。

それ故に麻香のたった一人の友人は究極に手際が良かった。

王あさかの王宮みやのバリケードを通り抜け、自分から王あさかに近付いた。

気付いていたらしい。

王あさかが寂しいということを。

「私の好きな人は栄さかえみたいに私の気持ちを理解してくれないと思う」と、麻香は僕を不思議な目で捉えて言った。

「私の力でその人と付き合ったり、結婚するぐらいは簡単に出来るけど、私を理解してくれないなら付き合う意味はないよ」

「・・・そうか」

当然、栄とは麻香の友人のことだ。

「だから兄貴、私を抱いて」

「なんで近親相姦を誘惑するんだ、貴様は!？」

「だってさ。何処の馬の骨とも分からない奴に私の初めてを渡すよ  
り、自分でやっちゃったほうが安心でしょ？」

「膨大な不安要素しか残らないわ!」

折角のしんみりとした雰囲気か台無しじゃねえか。

もう二度とこの作品でこんな場面はないかもしれないんだぞ。

「ところで兄貴、この前ニコニコ動画で・・・」

「話の方向転換の切り替えが早すぎないか!？ 話の方向性が36  
0度ぐらい変わったぞ!？」

「戻ってるよ、兄貴」

あれ? 本当だ。

一周しただけだった。

「つーかそれよりお前ニコ厨ニコ厨だったのか? 寧ろそっちの方が驚き  
だ」

「時々見るだけだよ」

「そうなのか？」

「桜ノ雨の桜吹雪は私がやったんだよ」

「僕の妹は職人だった!」

あの弾幕、感動して損した・・・。

「実は私の作詞作曲した曲の『初音ミクに歌ってもらった』が、3日で殿堂入りしたんだ」

「P名を教えてください！」

実はミリオン持ちだったりするのか!?

人の脳に直接語りかけるような音程と拍を研究でもしているのだから。脳を揺さぶり感情を高ぶらせるとか。

「失礼な、普通に作った曲よ」

普通に作ったってどういう意味よ・・・と、妹は呆れる。

「それで？　なんて曲なんだ？」

「教えるわけじゃないじゃん。恥ずかしい」

「珍しいな。お前にそんな感情が生まれるなんて」

「私は人形!?　5つか6つぐらいの感情ぐらいなら自分で作らなくても勝手に生じるよ!」

「少なくともいか!？」

単純すぎるぞ!

しかも感情を作るのか!?

「っと、お喋りが過ぎたな。もうこんな時間だ」

見ればもう正午近い。

「そうだね。兄貴のせいで時間を無駄遣いしちゃった」

「何でそこまで責められる!？」

責任転嫁に近いものがある気がするぞ・・・。

「それじゃあもう一回行ってくるよ」

僕は腰を上げた。

「いってらっしゃい。私は寝るよ、ちょっと運動して疲れたし」

「そりゃ不良と一戦すれば多少疲れるだろ」

と、妹の言葉に一切の疑問を持たず、自分の部屋に戻る妹の背中に声をかけて階段を降りた。

「麻香のお兄さん」

あれから僕は電車に乗って今朝来た駅に再び到着した。往復するのも疲れない訳ではないのだが仕方がない。

その駅に下りたところで知り合いの中学三年生女子に声を掛けられた。高校一年の僕がその年齢の人間と知り合いになるきっかけはただ一つ。同学年の妹、麻香関係の人物に他ならない。その中でも僕にここまで親しげに話しかけられるのは妹の唯一の親友にして限られた理解者の茅ヶ崎ちがき 栄さかしかいないのだった。

「ああ、茅ヶ崎……あれ？」

声が聞こえたほうを向いても茅ヶ崎の姿はない。

時間帯が時間帯で他の乗客はまばらで少ないので、人ごみに紛れて見えないということはない。

幻聴……？

自分の精神はそこまで弱っていたのか……。

「わざとやっていますね……」

丁度立っているところの足元から再度声が聞こえた。

「私の身長を身体的中傷すると麻香に告つげ口ぐちしちやいますよ」

水平の視線を下に45度下げると微妙に茶髪に染めたショートヘアの頭が目に入った。

「結局バレるんだからやっただもん勝ちだよ」

心を読まれるし。

「止めようとは思わないんですね・・・」

話しかけなきゃ良かったな、と茅ヶ崎は言う。

若干120cmのその身長はまるで中学生とは思えない。

麻香と一緒に歩けば大学生と小学生に間違えられてもしょうがない。可愛くて小さな童顔もそれを際立たせる。しいて言うなら茅ヶ崎も麻香とは違った種類の美女といえるだろう。

茅ヶ崎とは半年前ほどに麻香に紹介され、住む場所が近いだけに時々会う。そもそも僕とは話が合うので、その度に無意味な会話を楽しみお互いに相好そごうを崩すのである。

自慢じゃないが、その低い身長をイジれるのは麻香を妹に持つ僕だけなのだ。他の人間では麻香を怖がってそんなことはできない。

「そんなことを自慢しないでください」

「そんなことぐらいしか自慢できないのさ」

「悲しいことをサラッと・・・」

「その身長もまた欠点みりよくの一つだよ」

「本当は私のこと嫌いなんですか!？」

「何を言っている？俺は茅ヶ崎のこと大好きだよ。僕は決して口リコンではないが、小さい女の子が好きなんだ。僕と付き合ってくれないか？」

「もしかして私はお兄さんに自分が口リコンだと告白された挙句、



愛の告白をされましたか!？」

果たして僕がロリコンではないと念を押したはずなのになぜそうなるんだろつか。

「ところでお兄さん」

「どうした、もう一人の妹よ」

「隙を見てボケようと思わないでください!」

「すまん」

一喝された。

妹の友達に一喝された。

「ところでお兄さん」

「どうした?」

「今日はなぜ街に出てきたんですか? いつもなら家に籠こもってAAを作成してるはずなのに」

「僕はAAに命を掛けるちゃねらーじゃない」

「ええ!? 次の大作を楽しみにしてたのに・・・」

「だから違うつて言ってるだろっ!?!」

それに前の大作もねえよ!

まるでいくつも作ってるように言うな。お前は僕の何を知ってそんなことをいうのだ。というか直前、人にボケるなと言ったのは誰なんだ。

「そういえばAAで思い出しましたが、ニコニコ動画でらきすたのオープニングを文字で再現するっていうものを見ました。最初は暇人だと思っていたんですが自作ツールを使ったみたいで少しがっかりでした」

「どうでもいいわ、そんなこと！ その人もお前も最終的には暇人だろうが！」

「というか最近はやってるのかニコニコ動画！？  
組曲とか流星群とかしっかり歌えるのか！？」

「歌えますよ」

「歌えた！」

「約10分のメドレーを2つ歌えた！」

「合唱の動画にはほとんど参加しています。よっぺいさん大好きです」

「歌い手だった！」

「尊敬する！」

「あんこ入りパスタライス！」

「知ってる人が限られ過ぎている！  
マニアックなフリだ。」

「七色も覚えています」

「え？ 七色？」

「何だそりゃ？」

「初耳だ。」

「あれ？ これは知らないんですか？ 結構前に出てますよ」

「ああ、最近あまり見てないからな」

またできたのか。

万物は日々進化してるんだな……。

「おじゃ魔女どれみが混ざってます」

「何！？ あの名作の曲が入っているのか！？」

最終回の卒業の時は号泣だったほどの名作がなぜまた！？  
是非とも聞かなくては！

「……それで、何が言いたかったんだっけ？」

「そうでした。お兄さんが何故街にいるのかということですよ」

「今日は買い物に来たんだよ」

「そうでしたか。それにしても微妙な時間を選んで外出しましたね。  
丁度暑くなってくる時間帯ですよ」

そついう私はさっきまで寝てました。と、茅ヶ崎はわざとらしく片  
手を頭の裏に回して言う。

「ん……いや。ちょっとした事情が……」

僕は口籠るしかない。

「ははーん。麻香にでも捉まりましたか？」

「ん……。まあそんなところだ」

茅ヶ崎が的外れな推理をしたことで上手く誤魔化せた。

「話を戻しますがお兄さんが態々こんなところまで何を買いに来た  
んでしょうか。エロ本はコンビニで事足りるのに……。いえ

いえ冗談です、冗談。まあでも私は何と無く目的が分かっているのですが」

「多分それで合ってるよ。明日のことだ」

「やはりそうですか」

「よく分かったな。……つつてもそこまで難しい問題じゃないか」

僕が休日に一人で出掛けるなんて滅多にないからな。

茅ヶ崎はどうせ明日が何の日だという事も知ってるだろうし。

「明日は明治天皇の命日です」

「全然関係ねえ!?!」

「?」か知らねえよ!

「麻香の誕生日ですよ。私もプレゼントを買いにここまで来たのです」

「やっぱり茅ヶ崎もそうか。これはもう運命だな。結婚しないとまずくないか?」

「何故そこまで求婚するんですか。休日に偶然会っただけで婚約できるなら婚活という言葉はできなかつたと思いますよ」

「愛しているぜ、栄」

「いい加減うるさいですよ。屍のように黙っていてください」

返事をしなかつたら会話にならないだろうが。

「安心しろ。お前の体だけが目当てだ」

「むしろお兄さんの将来がとても不安です!」

「心配してくれるのか?」

「誰かに迷惑を掛けるぐらいなら本当に屍になってもらった方が良

いです。目覚める前に昇ってください」

冷静に冷酷なことを・・・。

しかし僕はめげることはない。

「なるほど。心中しろというんだな」

「私は一緒に死にませんよ。無理心中とは殺人ですからね。お兄さんはそんな残忍は犯罪を犯さないと信じています」

とか。

こういう無駄話をしているといつの間にか僕達は駅の外に出ていた。

「プレゼントは何を買おうかな・・・」

「まだ決めてないんですか？」

「毎年のこととはいえ、ああいう年頃の女子に何を贈れば良いか分からないんだよ」

「パソコンの増設メモリとかどうでしょう？　確か麻香はパソコンを持っていましたよね？」

「それは考えたけどあいつのパソコンは既にスーパーコンピュータ並みの機能を搭載しているからな」

それに夢がねえ。

なんだ、増設メモリって。リアルすぎる。

スパコン並みって言うのは、パソコンを使う時は冷却をしなきゃ室温が40　を超えるほど放熱する、と麻香から聞いたことが根拠だ。

「それはスパコンまでとは言いませんが一人の自家用パソコンのレベルを超越してますね・・・」

女子中学生が何を計算するつもりなんでしょうか。と、茅ヶ崎は呆

れる。  
悉く同感だ

動画サイトを視聴するのにどれだけのメモリの容量が必要なんだろうか……。

光通信でも追いつかないんじゃないのか。

そもそもパソコンならあいつの頭脳だろう。

「それで？ プレゼントはどうしましょう？」

「うーん。参考程度に茅ヶ崎は何を贈るのか教えてくれるか？」

「クッションです。麻香の部屋には無かったので丁度いいかと」

「それなら僕もそうしよう」

「参考程度では！？」

「分かっている。……思いつかないんだよ」

「僭越ながら助言を申し上げますと、麻香はお兄さんが選んだものなら例え苛性ソーダや塩酸でも喜ぶと思いますよ」

「何だその劇薬の贈り物は！？ 嫌がらせにしか思われないわ！」

それに残念ながら危険物取り扱い責任者の免許は持っていないんだ。

「……クッションっていうことはどこか雑貨屋に行くんだろ？ 僕もついて行っていいか？」

「別に構いませんよ」

駅の入り口の脇で立ち止まっていた僕らは茅ヶ崎に連れられて歩き出した。

適当なデパートに行くより中学生が行く雑貨屋に行く方がプレゼントも決まり易いだろう。

「ところでお兄さん」

「どうした、未来のフィアンセ」

「携帯は持っていますか？」

「ついに無視された!？」

やべえ……。

悲しいというより空しい。

迂闊にボケると大怪我する……。

「面倒ですのぞ」

「一々拾うと話の軸がぶれるからな。えつと何だったっけ？」

「携帯です。人の話を聞いてからボケてください。本当に面倒くさいです」

「ああ、勿論持つてるよ」

漫然と苛立ちを曝け出している茅ヶ崎を横目にポケットを漁る。  
ほら、と僕はポケットから携帯を取り出した。

「これがどうかしたか？」

「はい。最近携帯を買って貰ったのでお兄さんと番号を交換しようかな、と」

「それはよかったじゃないか！ 毎日メールしよう！」

「やっぱり止めます！ 思い止まります！」

「ごめん。そこまでメールしないから教えてくれ」

「曖昧に指示代名詞で誤魔化さないでください」

「週8でメールする」

「さっきより増えていますか!？」

ばれた。

音速の速さでばれた。

くそっ……毎日諦めるか。

愛する茅ヶ崎の番号を知るためだ。背に腹は変えられない。

「気持ち悪いなあ」

「……………本気で言わないでくれよ」

幸いその後僕は茅ヶ崎との携帯番号とメールアドレスの交換に成功した。

そしてまた歩き出す。

「ところでお兄さん」

「どうした、もう一人の僕」

「闇お兄さんですか!？」

「闇のゲームを始めよう!」

もう何がなんだか。

「お兄さんはどこの大学に進学するんですか？ 私の記憶が正しければ今は一年次でしたね。時期的にも文理選択もあるでしょうし、そろそろ進路を決めてある頃でしょう?」

「僕は進学しないんだ」

気楽に答える。

「え？ 確かお兄さんの高校は進学校では？ 私、入学予定なのでそうでなかったかと」

「いや確かに進学校だ。僕はそういう伝統と風習には囚われず生きていく主義なのさ」

「只の現実逃避君ですね。では就職ですか?」

「妹に食わしてもらって茅ヶ崎と結婚する」

「筋金入りのダメ人間ですね。ダメダメの実でも食べましたか?」



「それでカナヅチになってしまっならメリットなんて無いな」

食べる意味が無い。

茅ヶ崎の目が冗談はそれほどに、と語っているので僕は質問に真面目に答えた。

「進学はするよ」

「どこへでしょう？」

「一応県外に行きたいからN大学を狙ってる」

「国立大学ですか。・・・お兄さん意外と勉強できるんですね。でもどうして県外へ？」

これは単純な話だ。

ここで僕は少し話を変えた。

「僕は麻香のことが嫌いだが麻香を知っている人はもっと嫌いだ」

「私ですか？」

「うーん。そういう意味ではない」

そういう意味ではない。

言い換えれば・・・

「そう、麻香のことを知らないくせに知っているように振舞ってる奴が嫌いだ」

「県民全員ですか？」

「しいて言えば僕ら兄妹と茅ヶ崎を除く県民全員」

「知らないくせに知っている振り。・・・麻香を人として認識していない人たちですか」

それもある。

寧ろそれだけかもしれない。  
麻香を知らないくせに自分より優れ、優れすぎているだけで化物呼ばわりする馬鹿共だ。

「だから県外へ、ですか」

「そうさ。県境を跨またいじまえば限られた人ぐらいしか麻香は知られて無いだろうからな」

「ですがお兄さん」

「ん？」

柄も無く真面目な顔で話しかける。

「それはとても難しいと思います」

「えっ？ それってどういうこと・・・」

急に茅ヶ崎がはっとして立ち止まった。

「あっここです。危うく通り過ぎてしまつところでした」

見れば茅ヶ崎の指差す方向には、敢えて目立たなくしてるのではないかという様な地味な外観の店があった。本来店内が覗ける筈の大きな窓にはブラインドが架かっていてそれが叶わない。ただ暑いのか、照らし付ける太陽の光から商品を守るためか、はたまた店内を見られたくないのか見当もつかない。

茅ヶ崎のセンスをまだ良く知らないことから一抹の不安を覚えた。

ほんの少しだろうが、それが顔に出てしまっていたのか茅ヶ崎に

「大丈夫です。このお店『C7H5NO3S』は近隣の女子中高生に人気なんですよ」  
と言われた。

「えっ！？ 何だって？」

何だ、その化学式。

「店名です。確か意味はサツカリンでした」

覚えにくい名前だ。

それより女学生に人気だと言うことは客が女性ばかりなんだろう。そんな場所に僕が行くのはかなり勇気がある。いくら茅ヶ崎が同行しているにしても男子が入店するのはかなり場違いではないか。心配事がいつの間にか一抹どころか湧泉の様に湧き出てきた。

「入りますよ。お兄さん」

茅ヶ崎はもう既に扉を開けていた。

「・・・分かった」

僕は意を決して雑貨店「C7H5NO3S」に入った。  
なんて甘い店名だろう。  
サツカリンって・・・。

雑貨店「サツカリン（略称。僕はこう呼ぶことにする）」の店内は思ったより女性ばかりいる訳ではない。男性店員もいるし、カッブルで来たらしい彼氏さんも見掛けることが出来たので、大して恥ずかしい思いをすることはなかった。つまり僕の心配はまったくの杞憂だった。

僕は入店してしばらく品物を物色した。

奇怪な形をした貯金箱や不思議な模様のハンカチなど雑貨屋ならではの（？）の商品がたくさん置いてあった。他にも面白そうな物は多くあったが、誕生日に相応しそうな一番気になった物を選んだ。

驚くことに買う物を事前に決めていた茅ヶ崎の方が選ぶ時間が長かった。クッションと言ってもいくつもの種類があるのだ。茅ヶ崎は結局、チェック柄のクッションに落ち着いた。

「何だ？ クッション以外にも買うのか？」

茅ヶ崎は苦勞して選んだクッション以外にストラップを二つレジに置いていた。

「はい。実は携帯に付けていた自分のを昨日どこかに落としてしまった。折角なので麻香とお揃いにしようかと思ひまして」

店員がストラップを袋に入れて茅ヶ崎に手渡した。

「ありがとうございます」

今度は僕が品物をレジに出した。

「どんなのを落としたんだ？」

「え？・・・ああ、ストラップですか。鬼灯ほおずきが彫られたメタルア  
クセサリーです。気に入っていただけ、とても残念ですよ」

僕は代金の代わりに包装された商品を受け取る。

「ありがとうございます」

茅ヶ崎と一緒に店を出た。

「鬼灯とはまた渋いな。捜さないのか？」

「そうしたいですが無理です。昨日はいろいろな所を歩き回ったの  
で、捜すには範囲が広すぎます」

「麻香に頼めば一発だろ」

「見つかるでしょうか？　いくら頭が良くても私が知らない自分の  
情報を麻香が知っているとは思えません」

確かに茅ヶ崎の言うことはもっともだ。

友達だからこそ気付くことは何かしらあってもいいが、深入りし過  
ぎたことを知られていたらはつきり言って引いてしまう。

然し。

けれども。

「あいつは唯頭ただが良いだけじゃないんだよ」

僕は携帯を取り出し、電話帳の着信相手を見つけ発信した。

』  
』

すると驚くことにそれと同時に茅ヶ崎の携帯の着信音も鳴り始めた。着メロはまさかの『おちやめ機能』  
生粋のニコ厨のようだ。

「あ、奇遇ですね、私の携帯も同時に鳴るなんて。すみません、失礼します」

と、言つて茅ヶ崎は後ろを向き電話に出た。

「もしもし？」

「なかなか良い曲を着信音に設定しているな」

茅ヶ崎の携帯から聞こえてくるのは聞き覚えのある男声だった。聞き覚えがあるというか、紛れもない僕の声だった。

「・・・」

茅ヶ崎は黙つて通話終了を押す。

「・・・」

「・・・」

「・・・間違えた！」

敢えて見え透いた嘘を吐いてみた。

「嘘を吐かないでください！ 次やったら着信拒否に登録します！」  
「最近減ってしまったがこの日本には各地に公衆電話が点在していることを知っているか？」

「私は番号をお兄さんに教えるという人生最大の失敗を犯してしまいました！」

茅ヶ崎は嘆く。

「個人情報の扱いは気を付けろよ。気付く頃には大変な人に漏洩ろうえいする事があるからな」

「もう少し早く言ってほしかったです！」

「初対面の時とか？」

「初対面でそんなことを言われたら、二度とお兄さんの前には現れないことになったと思います」

言わなくてよかった！

結婚できねえじゃん。

「婚約前提で話をしないでください。この件はさくだりっきしましたので、読者も飽きてます」

「事実を言っただけだ」

「事実無根です。根も葉もありません」

「事実婚です？ エゴではありません？ 珍しく積極的だな」

自分で言うのもなんだがなんて都合の良い解釈だろう。

空耳も甚だしい。

僕は気を取り直して麻香の携帯に電話を掛けた。

「兄貴、何の用？」

ワンコールもしないうちに麻香は電話に出た。僕が電話を掛けることを予知していたらしい。

ワン切りならぬワン受け。

僕がそのワン受けにすぐに返事が出来なかったのは今迄にそんなこととは無かったからである。

今回は茅ヶ崎が関わっているからなのだろうか。

僕の時は必ず5コールは待つのに……。

「栄がどうかしたんでしょ？」

「お前、今近くにいいのか!？」

僕は周りを見回すが、当然妹の姿はない。

「今は家。けど私には千里眼がある」

「千里眼!？ お前は天狗か仙人か!？」

「後者よ」

「僕の妹は仙術マスターだった!」

「蓬萊山ほうらいさんで修行したの」

「中国の神山だろ、それ!」

日本も富士山などが呼ばれる想像上の山だ。

まったく僕が無知だからって適当なこと言いやがる。

「それで？」

麻香はくだらない話を雲散霧消した。

お前から振ってきたのに……。

「ああ、昨日茅ヶ崎が失くしたストラップは何処にあるのかな、と」

「まるで私が知っているような言い回し。もしかして兄貴の渾身のボケだったのかな。それだったら拾うのが難しい振りだね」



「知らないのか？」

それを聞いて茅ヶ崎がほら、と僕に声を出さずに言った。

「当たり前でしょ。私が知っているのは栄がストラップを落としたであろう可能性があるいくつかの場所だけ」

「ほぼ知っているのも同然!？」

既に推理していたのか。

「違うよ。今兄貴が『昨日茅ヶ崎の失くしたストラップ』と発言したことから推理し始めたの」

「何秒前だ、それは・・・」

分かってはいたが途轍とてつもない計算スピードだな。

「計算って言うより演算」

麻香は僕の使った言葉を直す。

「私が知る限りの栄の行動パターン、癖、運動量、基本思考、昨日の気候及び街の地形を独自の公式に代入すれば直ぐに分かる。条件が少ないだけに正誤の差は激しいから候補が多数出てくるけど」

麻香は学会に発表すれば少なからず賞が貰える様なことを簡単に口に出した。

「・・・それで何処にあるんだ？」

一々詳しく聞いていれば日は暮れまた昇りそうだったので話を早め

た。

「兄貴今何処にいる？」

僕は再度周りを見渡す。

目印になるのはこの雑貨屋が一番か。

「サツカリンの前だ」

「サツカリン？・・・C7H5NO3Sのこと？」

「すぐにそんな長い化学式に脳内変換できるって何の専門家だ？」

少しぐらいは迷えよ。

「そんなの普通でしょ。それより足元に罅割れた点字ブロックがある筈だけで見つかる？」

僕は麻香の異常発言を無視して足元を見る。

暫く見つめて点字ブロックが連なる中に罅割れた箇所を見つけた。

こんな細かい事、何で知ってるんだ・・・。

相変わらず麻香の瞬間記憶能力には驚かされる。

「あつたぞ」

「北を向いてその上に立って。そこから案内を始めてあげる」

「了解した」

どうやらカーナビの様に道案内をしてくれるらしい。麻香にはGPS機能が搭載しているのかもしれない。

僕は言われた通り罅割れた点字ブロックの上におよそ北だろう方向を向いて直立した。

「あ、あの・・・お兄さん？」

見れば茅ヶ崎が僕に疑念の目を向けていた。

二度も周りを見渡し、点字ブロックを眺めた拳句そのブロックの上  
に乗り始める。茅ヶ崎も戸惑う様な不審な行為を続けていた訳だか  
ら当然といえはそうなる。

「麻香が案内してくれるらしいぞ」

「えっ？ 麻香は私がストラップを落とした場所を知っているんで  
すか？」

単純な疑問にして最大の疑問、そのままだ。

「既知って言うより推理したらしい。可能性がある候補地がいくつ  
かあると言ってた」

茅ヶ崎は少し思案し僕に訊いた。

「・・・・・・・・電話、少し替わってもらえますか？」

僕は快諾し携帯を手渡す。

茅ヶ崎は麻香となにやら話し出した。

物搜しという私事を友達とはいえ態々やらせるのだ。親しき仲にも  
礼儀あり、とそんな謝意を示しているのだろう。

「それじゃ、また替わるね」

茅ヶ崎はお礼を言って僕に携帯を差し出す。

僕が携帯を耳に付けると麻香の命令口調の声が聞こえた。

「兄貴、今すぐに栄の番号を電話帳から削除しなさい」

「告げ口されてた！」

「想像を遙かに超える展開だ。」

茅ヶ崎には隙が無かった。

「さあ早く消しなさい」

麻香は急かす。

「残念だがそれは無意味だ」

「どういうこと？」

「既に暗記しているんだよ。茅ヶ崎の携帯番号なら11桁どころか  
円周率並みの桁であったとしても暗記してやるさ」

「掛算8の段が出来ない兄貴が電話番号!? 信じられない!」

「掛算ぐらいはできるわ!」

「それじゃあ栄の電話番号の下3桁を二乗して・・・」

「それより円周率を突っ込んでくれ!」

「僕のポケ放置かよ。」

茅ヶ崎に続いて麻香までそんな非情な事をするなんて、兄は悲しい。

「もういい。今から遠隔操作で携帯のデータを兄貴の記憶と共に消  
去するから」

「僕の記憶はお前のパソコンによって管理されていたのか!？」

「最も濃い記憶が動画ファイルに変換されていていつでも視聴可能だよ」

「何たる羞恥!」

「プライバシーもあつたもんじゃねえ!」

「最新の動画は『妹の下着の匂いを嗅ぐ兄』だよ」  
「冤罪だ！」

人の記憶を編集するな！

その話は朝で終わったはずだろうが！

「それより案内を頼むよ」

僕は物捜しの依頼の実行を促した。

「まずは南を向いて約400m歩い」

「なぜ北を向かせた！？」

僕が北を向いて出発しようとしていたから茅ヶ崎も隣で同じ方向を向いて待機していた。

「<sup>煩い</sup>なあ。言われた通りにしてよ」

「・・・分かった。400mだな」

僕は体を反転して歩き出した。案の定、茅ヶ崎は後ろに歩き出した僕に慌ててついて来る。

「つつても麻香。400mってどれ位だ？ 僕には正確な距離感覚は無いぞ」

「知ってるよ。兄貴がどれ位歩いたかなんて音と時間で分かるからその都度指令を出すよ」

「・・・了解」

僕は携帯を顔から話して受話口を抑えて隣を歩く茅ヶ崎に話しかけ

る。

「何者なんだ、こいつは？」

「麻香はお兄さんの妹でしょ」

「・・・そりゃそうだ」

僕は携帯を耳に戻し気になっていることを麻香に訊いた。

「どの位掛かるんだ？」

「まずは直ぐその公園よ。大した距離じゃない。・・・この道を右よ」

麻香の言う通りそこには右折路があつた。

僕が茅ヶ崎に声をかけて一行は右折する。

「そのまま道なりに行けば公園があるよ」

「道なりだな。了解した」

曲がつたそこは普通の市街地だつた。特徴的な建物も無く人も歩いていない。ただ連立する無地で地味な民家は普通と言うより平凡と言ひ換えた方が良いのかもしれない。

「昨日この辺まで来たか？」

僕はする事が無くなつた道案内係が黙つたので、茅ヶ崎に話を振つた。話を振られた本人はそろそろ話しかけられるかと思つていたよ。うで突然話しかけられた事に驚くことなく返答した。

「はい。この辺一体は歩き回りました」

「何をしてたんだ？」

態々電車に乗ってくるような用事でもあったのだろうか？

「散歩です」

「散歩？」

散歩って、気晴らしや健康のためにブラブラ歩くことか？

「当然、私は前者です」

茅ヶ崎は言う。

「私は基本的に随時誰かと遊んでいるんですが、毎月数回必ず一日中完全なフリーな日を作るんです。誰に誘われても断って」

「お、おい。そんなカミングアウトしなくてもいいんだぞ」

最初の発言内容は聞き流せないが、何か大切なことを話し出そうとしているような気がして僕はつい茅ヶ崎の話を遮った。

「い、いえ大丈夫ですよ。シリアスな話をしようとしている訳ではないですから」

茅ヶ崎も慌てて首を横に振る。

「そうか。じゃあ続けてくれ」

「そういう日は一日中一人で散歩をすることにしてるんです。同じコースを、同じ時間に」

僕は携帯を見れば通話中になっていることに気がつき一度電話を切るのかと思っただが、どうせ麻香はこの事実を知っているだろうと思いき直しそのままにした。

「いつても月に数回です。一回一回の間に時間が空くのでこんな閑散とした住宅街を歩くにも色々な変化があって面白いんですよ」

茅ヶ崎は前方斜め左の住宅を指差し言う。

「あの家の庭は春になると桜が満開になります。こっちのマンションのあの部屋では女性が一人暮らしなのですが時々男性の方がベランダでタバコを吸っています」

と、今度は指差した家の反対側にあるマンションの一室を指差しして言った。

「それは意味深だな・・・」

そりゃもうあれしかないだろう。

「その変化を見るために電車でこの辺まで来て楽しみながら一日かけて帰宅するんですよ」

聞いているだけで面白そうな話だ。

「友達と来ないのは話していて周りの変化に気が付かなくなることが嫌なだけです」

僕は普通の人には思いつきそうも無いこの世界の楽しみ方に感心する前にまったく違うことに感心していた。

紛れもない茅ヶ崎の観察力に、だ。



そりゃ麻香に比べれば劣るが（ほぼ全人類が劣るだろう）、一般的に見れば優秀だと思う。  
桜は兎も角、マンシヨンの一室に誰が何人住んでいるかなど普通知ることがないからだ。

「洗濯物から推測しました」と言う茅ヶ崎の推理は知りたいたいと思えば簡単に郵便受けや人の出入りから推測できるが、ただ散歩をしている茅ヶ崎が通りすぎるだけでそれを読み取ると言うことはそう簡単に出来ることではない。この女性も少なからず麻香に近いところがあるのかもしれない。

いや、少なからず彼女にはその才能が残ってる筈だ。

だから、か。

と言う憶測は結局僕の思い違いだろう。  
簡略的で軽率。

僕は安易に自分の想像だけで妹の友情をそれに無理矢理結びつけたことを後悔した。

「兄貴、そこら辺」

突然黙りこくっていた麻香から声が掛かり少し体を緊張させた。

いやここは素直に麻香の唐突に話し掛けるという悪戯で驚いたというべきか。

「驚かせるなよ」

「それじゃあ驚くなよ」

ええ・・・？

無茶苦茶だ……。

「その辺に公園があるでしょう?」

この話については広げる気はないらしい。

「ああ、ここか」

そこは公園と言えるかギリギリのスペースしかない、滑り台とベンチだけの簡単な場所だった。一応雑草などは処理されていて粗末な公園ではなかったが、この辺一体の住宅街に似合う平凡な公園といえるだろう。唯一の遊具である滑り台には目立つ汚れも無く最近作られたような印象がある。ベンチは逆に木でできた背凭れ<sup>もた</sup>部分を支える金具は錆びて、木自体も腐食しカビが小さな茸の様なもので生えている始末だった。

「この公園、元々は私有地として立ち入り禁止となっていたのですが地主がベンチを置いて開放したんです。そこから近所周りの主婦の要望で最近市が滑り台を設置したんですよ」

茅ヶ崎は公園を観察していた僕に当意即妙の説明した。

「奥様方が少し図々しくないか……?」

開放したとて地主の土地だろうに。

「それには市も考慮して買い取ったと思います」  
なるほど。

それなら税金が誰かに喰われるよりの良い使い道か。敢えて誰かは

明記しないが。

「兄貴、そのベンチの下に落ちてない？」

麻香はまるでその場にいないかのように自然に言った。

僕は身を屈めベンチの下を覗き込む。

行き届かない雑草処理で雑草が伸び放題となったベンチの下に僕はキラリと光る金属片の様な物を発見した。僕は手を伸ばしその紐の付いた金属片を取り出した。

「茅ヶ崎、これか？」

「！ それです！」

茅ヶ崎は嬉しそうに両手で鬼灯の実が彫られたメタルアクセサリを受け取った。

・・・それにしても渋い。

どこでこんな物売られているのだろうか・・・。

「ありがとうございます！」

茅ヶ崎は勢い良く頭を下げお辞儀をした。

「いや、やっぱりお礼は麻香にな」

と、僕は電話の向こう側にいる麻香を指差して言った。

「麻香？ あったぞ」

「聞いてたよ。予想通りと言うか計算通りね」

「ご苦労さん。・・・茅ヶ崎が替わりたがってるから替わるぞ」

「分かった」

携帯を渡すと茅ヶ崎は麻香に感謝の気持ちを述べた。そして訊く。

「どうして分かったの？ ベンチには毎回座ってるけどそんなこと麻香に言っただけ？」

その様子だと散歩は麻香には言っているようだ。

これで一件落着。

円転滑脱。

変に大事な事件に発展しないよかった。

さつさと家に帰ってゆっくりしよう。

落とした場所が特定できる計算公式を説明されているだろう茅ヶ崎を見て、そう思った。

その後僕は茅ヶ崎と別れ、帰路に発った。

「おい、お前」と、唐突に声を掛けられた。

と思う。

呼称が「お前」という代名詞だったこともあるので僕が呼ばれたかどうかは瞬時の理解に難い<sup>かた</sup>。

結果、返事をしないで黙って振り向くことになった。

そこには知った顔が数人立っていた。

その内の一人が僕に呼び掛ける。

「お前、あの『大和撫子』の弟だった？」

「・・・これでも兄だ」

ここで麻香とは関係ないと白を切ることも出来たが、つい弟と言われた怒りで言い返してしまった訳である。

最悪だ。

てつきり麻香が骨の二、三本でも押し折ったのかと思っていた。

多少乱暴な言い方だが読者諸君には勘弁してほしい。

そこに立っている男達は今朝僕から無条件に金を巻き上げた不良達だった。

麻香は僕のことを浅学やら非才やら変態と侮辱<sup>むじやく</sup>するがケジメは付ける。

僕が弱かったと言う理由で損をすれば。

僕に非が無いのに被害を被れば。

誰かが理由無くして僕を傷付ければ麻香は何かしらの行動を起こす。恐らく僕じゃなくても茅ヶ崎にも当て嵌はまめることだ。

妹に過保護されている(……)というとんでもなく情けない関係だが、それが麻香が僕を自分の玩具おもちゃとして認識している事から及ぶものだからしょうがない。兄を私物化しているところは叱るべきだが、僕に及ぶ迷惑は麻香による暴力と侮辱程度なので、それくらいの見返りは貰っても誰も咎とがめはしないだろう。

ドメスティック・バイオレンス  
DVは一般的に男性から女性に加えられる暴力だが、兄妹に於おいての妹じよせいから兄だんせいに対する暴力もその定義に加えて貰いたい。

きつとよく使うだろうから。

僕が不良に絡まれることは初めてなので 最初で最後だろう  
と思っていた 妹が出した結果は予想することができなかつた。

ここでほんの少しの昔話。

僕が小学校高学年の頃、学年で一人一つずつのチューリップを植えることになった。高学年でチューリップを育てると言う幼稚な学校教育だが別に嫌いではないのでそれに甘んじた。

僕は頑張つてチューリップの球根が蓄になるまで育てた。しかしあ

る朝、自分の鉢を見たらチューリップが根元から折られていた。僕は悲壮に沈んだことを鮮明に覚えている。

しかしそこからは妹の武勇伝。

その事件を聞いた麻香はすぐに犯人を見つけた。

麻香のことだからそういう推理とかいう才能は既に小学校低学年の頃から使いこなしていたわけだ。ならば犯人を見つけ出すことなく造作もないことだっただろう。

犯人を見つけて麻香が問い詰めてみると、本当は悪戯で面白半分に行った事実を、ボール遊びをしてぶつかってしまったと麻香に嘘をついたらしい。

顔の筋肉の微量な変化にまで気付く麻香に嘘など通用しない。

「盗人にも三分の理」も糞も無いその言い訳に妹は怒りを爆発させた。

麻香は犯人に脳内操作で自分のことを忘れさせ、今度は催眠術をかけたらしい（本当だろうか・・・）

最終的にその犯人は全裸でグラウンドを走った。という結末でこの事件は解決したのだった。

因みにこのことを麻香に後で聞くまでに僕は真相を知ることにはなかった。

当然突っ込みを相当入れたが。

そんな経験談から考えれば骨折ぐらいはさせたかと思っていたわけである。

麻香が帰宅して「疲れた」と言ったのも根拠の一つである。あの運動神経抜群の麻香が不良如きと手合わせして 例え相手が複数人いたとしても 疲れを感じる妹ではないはずだ。何度もボコられた僕が言うんだから間違いは無い。

特に麻香は骨を折る程度に力を加減しなくてはならないのでそういう意味では多少は疲れる。でもそれなら逆に折れてないとおかしくないか？

奴らの骨が。

それほど強力な手練てだれなのか。

いやそんな筈は無い。

こんな郊外県に麻香を疲労させる程の人間が存在するわけが無い。

そもそも日本にいるのかどうかも怪しい。

「妹と戦わなかったか？」

「ああ？ 戦ったぜ。有無を言わず瞬殺だったよ。全員一瞬で気絶だった」

「・・・」

それは戦うとはいわない。

「しかし目を覚ましてみればどうだ？ どこも怪我してない。天下無双で殆どの武術に精通していると聞いたが・・・。気絶させるぐらいスタンガンでできる。大和撫子も大したことがないんだな」



こいつは馬鹿か。

僕は直感した。

人を気絶させることがどんなに難しいことか知らないからそんなことが言える。

不良と言っても群れて粹いきがってるだけか。

今度はさっきまで話していた男の隣にいる男が口を開いた。

「と言う訳でお前には責任とってサンドバックになってもらいまーす」

一体どういう訳だ!?

脈絡も何もあつたもんじゃねえ!

荒唐無稽とはこの事か!

と心の中で突っ込んでいるうちに不良たちが迫ってくる。

畜生!

こんなことなら麻香と一緒に来ればよかった!

「通りは人がいるから裏に入るぜ」

恐らくリーダー格の男が全員に呼び掛ける。

止むを得ん!

僕は「サツカリン」に入ったときと同じくらいの勇気を振り絞り反対方向に駆け出した。

「おいつ待て!!」

不良たちも走り出す。

待てと言われて誰が待つか!

ああ!

現実でこの台詞を言うことができ感動した!  
良い記念になったぜ!  
生きてきて良かった!

足の速さには自慢出来るほど速くないが、自信はある。友人の中では(.....)定評がある。  
不良との距離は離れないが、狭まれることも無い。

しかしこのまま駅に行っても捕まるだけだろう。

取り敢えずデパートかどこかに入って撒くことに.....まずいい!

次の信号の青が点滅して赤に変わった。

ここで信号待ちすれば確実に捕まる。

道の向こうにデパートがあるのだが、ここは諦めるしかない。

この信号を左に

と僕の体は突如宙に浮いた。

トラックに轆ひかれたわけではない。その点に関しては読者諸君に要らぬ心配をかけて申し訳ない。

眞実は左肩と右の服の裾を握られ、すぐ左にある、言われないと気付かない様な路地に素っ飛ばされた。

というか投げられた。

敢えて言うつと変型背負い投げ。

僕は柔道なんて習った事が無いので受身なんて取れる筈が無い。

必然的に僕の体はコンクリートの地面に叩きつけられた。

「ぐあつ!?!」

通りのほうを見れば追いついてきた不良たちが驚いたように路地を覗き込んでいる。

視線の先は僕ではなく、こっちからは逆光で影ってシルエットしか分からない女性だった。

倒れている僕のすぐ目の前で仁王立ちで手を組んでるその姿の正体は直ぐに分かった。

僕を投げたのはお前か。この野郎。

「麻香？」

「私の兄貴が貴様等のような愚民共に無礼なめられる理由は二つ。妹よりも低い身長と争いを好まない平和愛主義的思想」

突然麻香が不良たちに向かって言った。

何を言っているんだ、こいつは。

不良たちも虚を衝かれたようで呆気に取られている。

「ただ私の後ろにいて光を浴びることが無いから、兄貴は本当は強いのに弱者と間違えられる」

麻香の稀に使う男性口調が珍しく饒舌だ。

余りに急すぎて内容が頭に入っていない。

何？ 本当は強い？

「貴様等のような屑共から今まで兄貴が逃走していたのは、貴様等に怪我をさせないようにしていたのよ」

「どつという意味だ！？」

不良の一人が我慢が出来ずに訊いた。

「こんなに丁寧に説明しても理解が出来ないのか。頭蓋骨を粉碎したら中身が無いっていう特殊構造は意外とあるのかもしれないな。・・・そう。判り易く言つと今から私の兄貴が貴様等ゴミ虫を駆除するって言うことよ」

男性口調が最後になっていつもの麻香に戻った。

ええ！？

そんな馬鹿な!?

僕にそんな圧倒的な戦闘スキルは無いぞ!

こんな大人数を相手にしてそう簡単に勝てるわけないだろうが!  
それこそ麻香じゃあるまい。

麻香が後ろを振り向き屈かがんで僕の耳元で囁ささいた。

「いつまで寝てるの? さつさと皆殺しにして来て」

「おい、麻香! 何を考えている? 僕なんかがあいつらに勝てる  
とでも思ってるのか!」

僕は小さな声で叫ぶという偉業を成し遂げた。

「大丈夫。勝算はあるわ。昨夜のうちに私が兄貴からだの身体を改造して  
おいたから」

「人の身体を勝手に改造するな!」

サイボーグなのか、僕は!?

「懐かしい漫画ね。個人的には絶望よりも改造のほうが好きだった  
わ」

「んなもんでもいい! この剣ヶ峰けんがみねで余計なことを言う暇など  
無い!」

麻香がいるのに僕は何故剣ヶ峰にいるのだ!

「いいから。さつさと片付けてきて」

麻香は僕の胸倉を掴み上げて僕の身体を無理矢理立たせた。

「弟、大和撫子はお前を助けてくれないみたいだぜ」

不良たちが迫ってくる。

だから兄だつて言ってるだろうが！

足が震え竦む。

不良の中の一人が前に出てきた。

ニヤニヤと僕の顔を覗き込み、次の瞬間僕の鳩尾みぞおちに右アッパーが炸裂れっした。

「がはあっ!?!」

僕は二歩下がりがりながらも辛うじてその攻撃を受け止めた。

何が改造だ！

滅茶苦茶痛えじゃねえか！

胸の痛みを堪え体勢を立て直す。

「ざけんなあ!?!」

今度は僕の右ストレートが相手の右胸を捉える。

すると、驚いたことにその不良は胸を押さえその場に倒れこんだ。

何だ？

何が起きた？

本当に僕の身体が強化されたのか？

それにしても割りとは普通に殴ったのだが。

一人が一撃で倒されて驚いていた不良たちは我を取り戻し一斉に飛び掛ってきた。

当然囲まれ、全員から報復を受けた。

頬、肩、腕、腹、背中、股、膝。

新他のほぼ全ての箇所が殴られたり蹴られている感覚だ。倒れることも許されない。

遂にその痛みに耐えられなくなり、正面から陣取り正拳を繰り返すリーダー格の男に蹴りを入れた。幸いその弱い蹴りが腹に入る。

するとさっきと同じことが起こった。

男は腹を抑え苦鳴と共にその場に倒れ込んだ。

どういうことだ？

僕の蹴りが強力なわけがない。

もし本当に麻香によって改造されていたら脚力自体の能力が向上されるはずだ。それなら走るスピードも一緒に向上してもおかしくは無い。しかしその変化が無いことは今しがたの鬼ごっこで証明されている。

改造されていないわけだ。（そもそも人体改造って一晩で出来るのか？）

僕の身体は変化なし。

僕の身体は………！

脳に閃くものがあつた。

麻香！

そつだ麻香だ！

頭の疑問符が一つに繋がつた。

虫食い状態のパズルが今、完成した。

どうしようも無く無理矢理なこじ付けだが麻香はそんな常軌を逸（じょうま）することを簡単に遣（わ）つて退ける。

麻香は確か不良達を気絶させて帰ってきた後「疲れた」と言つていた。

それはこれだつたのだ！

材料の下拵（したし）えと言つたら分かり易いか。

信じられないことだが信じるしかないのだ。

麻香は不良達を気絶させて来たのではなく、次に誰かに殴られた時に発動する怪我を仕掛けてきたのだ。



つまり麻香は彼らの体内に「爆弾」を置いてきたのである。

この想像は限りなく妄言だが、こうすれば全てに辻褃が合う。

まったく麻香の奴。

先に言っておけよ。

ああ。

全身が痛い。悲鳴を上げている。

しかしそうと分かれれば話が早い。ことの真意は後で麻香に訊くことにして取り敢えずこの状況をどうにかしなくては。

リーダー格がやられて不良たちの動きが止まった今がチャンスだ。

僕は迷うことなく左右二人の胸元に両手裏拳を食らわした。想像通り、二人は苦鳴を洩らしそこに倒れ込む。そして次に後にいる相手の横っ腹に中段蹴りを与え、残り二人には順番にフックを加えた。

不良たちを次々と倒していく。

まるでヒーローにでもなった錯覚だ。

最後の一人が倒れた。

終わった。

僕は不良たちよろしくその場に倒れた。

力尽きたと言ったほうが正しいか。

「大丈夫？ 兄貴」

僕が袋叩きに合っているのを壁に凭もたれて冷静に眺めていた奴が何を言うか。

いつの間にか顔の近くに麻香がしゃがんでいた。

「これが大丈夫に見えるか？」

「うん」

「網膜がどうかしてるな」

もしくは神経系が虹彩が故障してる。

「・・・流石に動けないぞ」

妹を見上げる。

「よく頑張ったね。いつ気付くかと思ってたよ」

「こういうことなら先に言ってくれよ」

「それじゃあ詰まんないじゃん。自力で頑張れよ」

「丸投げか！？」

せめてもう少しヒントが欲しかった。

「そもそもどうしてこんなことを仕掛けた？」

「兄貴が一人で不良達を倒して骨折までさせたっていう事実が必要だったの」

「なぜだ？」

「自分を風評で守るって大切でしょ？ 兄貴を知らないから皆は兄

貴を蔑むんだよ」

「これからは僕は不良に絡まれないって言うのか？　こんなことで解決するようには思えないが」

大丈夫だよ、と麻香は言う。

「それに、それ以外は私が守るから」

体が重い。

つーか動かない。

全身麻酔をしているかのようだ。

しかし全身麻酔をしていないことは明白である。全身を刺すような痛みが覆っている。

瞼を開けることすら辛い。

断片的な記憶が少しずつ戻ってきた。

えっと？

不良と喧嘩したんだっけ。

確か全員倒したような気がする。

ん？ 待てよ。

それは麻香があらかじめ……。

「おいつ麻香！！」

開けるのが辛いはずの瞼を開けて、叫んだ。

「何？ 喧やかしいから大声出さないで」

麻香がこちらを覗き込む。

上から。

自分が仰向けに寝てるから上から覗き込まれるのは当たり前だ。  
しかし問題はそこじゃない。

「お、おい……」

「サービスサービス」

「次回予告で誤魔化すな」

どうやら僕はどこかのベンチで麻香に膝枕をしてもらっているらしい。生まれてこのかた、こんな奇跡は一度もない。

「よく似た別人かと思ったじゃないか……」

まさか麻香が、と言う固定概念から。

「アナタ、アミーゴ」

「別人だった！」

しかも外人！

「ココ、ジャルダンピュブリック」

「まだ続くのか！？」

しかもフランス語！

外国語を統一しろよ！

「ちなみに公園っていう意味よ」

「だから空が見えるんだな」

空が暗く星が瞬いているところから夜も更けてそれなりに時間が経った様だ。

「近所の公園か？」

「そうだよ。家の近くのヨセミテ国立公園だよ」

「僕の自宅はカリフォルニアにあるのか！？」

どんな設定だよ。

せめて日本にしてくれよ。

「僕を負ぶってきてくれたのか？」

家の近くの公園ということは僕を連れて電車に乗らなくてはならない。

起きているならまだしも気絶した兄を背負って電車に乗るとか、僕には絶対出来ない。いや、起きていても背負って乗るのは嫌だ。

「歩いてきた」

「何kmだと思ってる！？」

「20kmちよい。どうせこの時間にならないと起きないって分かってたから時間潰しにね」

「20kmの道程を兄を背負いながら歩いてきたのかよ」

「引きずって来た」

「それは拷問だ」

中世ローマの帝王か、貴様は。

明らかに暴君だろ。

クーデタでも起これよ。

「あいつらはどうした？」

忘れていたけど僕は不良たちを全滅させてきたんだよな……。  
骨折もしてるし、あのままじゃ不味いだろ。

「放置プレイ。どうせ病院ぐらい自分で行けるでしょう」

「鬼か」

鬼畜過ぎる。

「いいのいいの。最近調子乗ってたし。そろそろ恐怖を刻み込もう  
と思ってたところだったからタイミングが良かったよね」

「僕とあいつらにとっては不幸以外の何者でもないな」

そもそもどうして僕までこんな状態にならなくちゃならないんだよ。

「それはゴメン。お兄ちゃんならもっと早く気付くと思ってた」

「はっ！？ お前どうした！？」

今、何て言った！？

お兄ちゃんって、しかも自然に言ったか！？

「言った」

「本当にどうした？ どこか頭でも打ったか？」

「いいじゃん。そもそも初期設定ではお兄ちゃんをお兄ちゃんって呼ぶ時は私が悪いことを企んでいる、みたいな感じだったじゃん」

「そんなもん忘れる。この話が第一話っていうことにしよう」

「適当……」

今の設定では「お兄ちゃん」は言われることは絶対無い呼称ということになっている。

「まあ取り敢えず聞いて」

麻香は僕の目を真つ直ぐ見て言った。

「本当ならお兄ちゃんが一回殴られた時にキレると思ったの。我を忘れて相手全員に殴りかかる。そっちの確率が高かった。でもお兄ちゃんは一撃で相手を一人鎮めたときに、何かがおかしいことに気付いて考え始めた」

そこははつきり言って予想外だったよ、と麻香は続ける。

「しかも私のしたことに気付いた」

「……」

「後でネタ晴らしをしようと思ってたけど、先に気付かれるなんて……。私としてもお兄ちゃんだからかな。油断してた」

言い訳だけだね。

「お前が疲れるなんて滅多にないからな」

「そう失言だった。生まれて初めての」

あーあ、と僕を小突く。

「もう一個のネタ晴らし、してあげようか」

「まだあるのか？」

聞かなくてもいいのだが。

聞かないほうが幸せだろ。

「朝、私の好きな人がどうとかって話したよね」

「なんだ？ もしかして僕か？」

考えたくない冗談だな。

「そっだよ」

「っ！」

「私、お兄ちゃんのが好き。付き合いたい。抱かれない。結婚したい」

そして麻香は言う。

「愛されたい」

もう一つのパズルが完成したようだった。

まあ、確かに伏線はあった。

『そっだね、割とよく話すよ』

とか、もろだろ。

わりと話すどころではないほどよく話す。

「兄妹愛とかじゃなくて一人の女としてお兄ちゃんの事が好き」

「その呼称は関係してるのか？」



「デレてみました」

「お前、ツンデレキャラなのか!？」

今日は新しいお前に……………ってあれ？

「今日は新しいお前に会ったよ」

「それで？ 返事は？」

「僕が受け入れるとでも思ったか？」

心を読んでいるだろうに。

「そうだよな。シスコンでもブラコンも小説や漫画の中だけのものだもんね。夢見ちゃいけないよね」

可能性なんて皆無なのにね。

麻香はわざと気丈に振舞っている振りをする。

全てを知っても奇跡にかけるか。

「……」

麻香が黙って動けない僕の首を絞めた。

いや、これ殺人だから。

体が動かないんだから腕もがこうにも暴れようにも抵抗できないんだよ。

「げほっげほっ……麻香！」

「でもさあ、お兄ちゃん」

「ん？」

「本当に好きなんだよ」

当然、と麻香は両手の力を緩める。

「私は諦めないよ。見果てぬ夢なんて私には似合わない。私の特殊能力じゃなくて女の正方法でお兄ちゃんを落としてみせる」

可能性なんて自分で上げれば良いんだよ、と麻香は言う。

「兄妹での正方法なんてないだろうが・・・」

そもそも方法なんてない。

間違いだらけだ。

「はあ・・・。今日は本当に疲れたな・・・」

「精密に相手を骨折させて僕を背負って20kmも歩けば疲れるだろ」

っーかお前以外出来ない。

「難しいし面倒なんだよ。相手の骨に程よく罅ひびを入れるのは」

骨を折るのに骨が折れるって・・・。

現実離れた駄洒落を実行したな・・・。

これに技名を名付けるとしたら時限骨折か。

「あ、それいいね。発想が幼稚で可愛いよ」

「ほっとけ。余計なお世話だ」

どうせ技名を考えるだけでも幼稚だろ。

「適当に漢字並べてカタカナのルビを振らないだけでも妹は安堵あんどしてるよ」

「ああ、内部破壊クラッシュとかな」

「例えるのはいいけどセンスが無いね」

「お前おまえやってみろ」

「内部破壊クラッシュ？」

「思ったより面白い！」

ただ恥ずかしい！

他言たごできねえ……。

「まったくお前は何者だよ」

「何者でもないよ、お兄ちゃん」

何者でもない。

凡人でも妹でもない。

そう簡単な存在ではない。

言いって麻香は空を見上げる。

「知しってる？ 星ほしって近くにあるように見えるけどとても遠くにあるんだよ」

「知しってるよ」

高校生に振る話か、それ。

今時いま、小学生でも既知きちの事実じじつだろ。

「海王星が地球から何km離れているかも？」  
「そんなことは知らん」

知るはずが無い。

そもそも理科は総合的に出来ないのだ。  
ちなみに45億445万kmらしい。

「近くにあるように見えるのに本当は遠くにあるんだよ。ねえ、お兄ちゃん」

「・・・」

僕は迷った。

ここで慰めの言葉を言えば、最終的に僕がこいつを受け入れる事になりそうだったからだ。

しかし現実を述べるのが一番だろう。

それが僕にとっての能事だと思った。

「お前ならその海王星にも行くことが出来るんだろ？ いくら遠くに見えようと絶対に到達できるんだろ？ お前はそういう奴だ。計算高く確実。超難解ギヤルゲーで何億通りもあるルートから一発で隠しキャラのエンディングまで到達できる」

麻香は僕の顔に目を落とす。

「やっぱり例えのセンスが無い」

「・・・」

「私なら超難解ギヤルゲーで主人公の父親を攻略できる」

「ゲームの規格を超えた！」

それに主人公の性別設定が不明確だ！

「お兄ちゃん」

「なんだ？」

「私、気楽に頑張るよ」

「僕は父親よりも難しいぜ」

難易度は超Sクラスだ。

「でもエンディングは用意して置いてね」

次の日。

昨夜僕はあの公園からまた妹に負ぶってもらって帰宅した。

僕は何も食べず（食べれず）、風呂にも入らず（入りたくても体が動かないので入れる状態ではなかった）自分の部屋で布団の上に放りだされ、麻香に多少の文句を言ってそのまま深い眠りに着いた。

はずだ。

そこまでは覚えている。

というか僕の記憶自体が曖昧で信憑性が低いのは承知の上だが、今の僕の目下（目前）にある惨状を数分経たずとも整理できる人間はごく少数だろう。

僕は今、パジャマを着ていた。

言い換えると寝巻き。

いつも着ているチェック柄。

そこまでなら「家に帰って来て無理をしてせめて服だけでも着替えた」という僕の記憶違いで済む筈のだが、僕の体はそれを着るのに相応してサッパリしていた。

昨夜までは汗で体中がべとべととして髪もかさついていたはずなのだ

が、今では髪までも指で楽に梳<sup>す</sup>ける。

・・・まるで入浴して髪を何度も洗ったように。

まだ疑問はある。

寝ていた場所は自分の小汚い小部屋ではなく妹の部屋にあるベッドの上なのである。

これだけでも理解に苦しむがそれ以上に難解なことがある。

同じベッドに、僕の隣に麻香が寝ていた。

ぴつたりと僕に擦り寄っている。

僕の右腕を腕枕にして静かに寝息を立てているのだ。

それだけでなぜ僕が着替えているのか、体が綺麗に洗われているのかという疑問が解決する。

絶句。息を呑んだ。

当然と言うか、必然。

「お、おい。麻香・・・」

僕は慌てて麻香の肩を揺らした。

「う・・・うん・・・・・・？」

麻香は寝返りを打つ。僕とは反対側を向いていた顔がこちら側を向いた。

「スー……スー……」

寝息を立てているところ、まだ安息の眠りから覚めていないらしい。

寝ている生き物は共通して可愛いと言つが、これはこの時の麻香にも当て嵌はまった。

鮫は夜行性なので昼に泳ぎながら眠る。前文と矛盾するが、それは想像するまでもなく恐ろしく気持ち悪い光景で、いつもなら麻香の眠りをこれに例えるはずだが今日はそうもいかないらしい。

まあ勿論麻香は普段でも美女でいるが、この寝顔はそれに比較できない程に美しく愛おしかった。

「麻香、おい麻香」

再度肩を揺らすけど今度は反応が無い。

「……既に屍しかばねつてか」

ふと茅ヶ崎との会話を思い出して呟いた。

無地のカーテンの隙間から時折眩しい光が漏れている。妹は可愛いとかいう物を部屋には置かない主義らしい。僕がこの部屋に入るのは何年か振りだ。壁紙も無地で、インテリアの殆どが小さな会社のオフィスにあるようなものばかりだ。

観葉植物とか。

パキラって言っただけ？



確か何年前かの誕生日に僕が贈ったものだ。

プレゼント当時は机に乗る程度だったのに今では僕の背以上あるかもしれない。

樹木とはこんなに早く成長するのか・・・？

遺伝子組み替えでもしたのかな・・・。

麻香なら千年杉を僅か百年で育てられそうだ・・・。

日光の射光角度が低いことからもうとつくに夜が明けたようだ。

僕はふと、考える。

もしかしたらこの世に禁断の恋など無いかもしれない。誰が誰を愛するとか個人の自由だし、日本国憲法の特徴である基本的人権の項がそれを証明してくれるかもしれない。兄妹で愛し合っただけな  
いとが、そんなことは生殖動物の本能的解釈で子孫繁栄の存在意義がまだ人間の当たり前として定着している。血の繋がっている人間が愛し合うことを否定すれば、揚げ足を取るようだが地球上の全ての人間の祖先は最終的には二体だったかもしれないことに気付く。  
樹状図を辿れば結局、最初の原因に行き着くわけだ。つまり現代社会のこの現状を根本的に翻ひるがえしてしまうだろう。

所詮人間はその程度かもしれない。

現実問題、その程度の存在なのだろう。

だからきつと、麻香は簡単に程度が低い人間が創り出した常識を叩

き潰す。

周りの人間が何を言おうと麻香は僕を恋愛対象から外さないだろう。それどころか、あれだけ堂々と「好きだ」と宣言した訳だから、積極的に狙ってくるだろう。

彼女が言う、フェアなアプローチで。

これは自意識過剰ではなく自分を過大評価しているのではなく、僕の妹を正當に評価しているだけのことである。

間違えなく僕にとってはアンフェアだろう。

勝負するにはハンデが必要不可欠だ。

ハンディキャップレースにしなくてはとも僕も持たない。

麻香のことは嫌いじゃない。

寧ろ好きだ。

しかしそれは兄妹愛であって偽りの愛。

似てる様で似つかない言葉遊び。

気持ちなんてのはすぐにその姿形を変える。女心は何とやらというが、男心だって形を変えないわけが無いのだ。人の心はまるで水のように自由自在にひん曲がる。恋をするには大切なことだ。

良い形にも

悪い形にも

そのシルエットは終始捻じ曲がる。  
妹に恋心抱くことは決して良い形とは言いがたい。

が。

もしかしたら。

もしかすると。

それほど悪い形でもないのかもしれない。  
奇怪な形をした陶芸品の様に趣おもむきがあるのかもしれない。それを美しいと評価すれば既にそれは芸術作品と成りえる。

見ようによつては、か・・・。

いかん、これでは麻香の思う壺ではないか。  
しかし僕はそう考えれば考えるほどこのベッドで麻香と一緒に寝ているのが何か恥ずかしくなってきた。

そもそも妹が隣で寝ているという現状を知ってしまった以上、二度寝を決めることは出来ない。

そういえば・・・。

僕が今、寝巻きを着ていることは昨日着ていた服は洗濯機の中か。  
ポケットに誕生日プレゼントを入れておいたのだが。  
そう思いながら右ポケットを摩さするとある筈のないプレゼントの包みがポケットを膨らませていた。

麻香の奴・・・。

最低限でも僕から渡して欲しいらしい。

僕は麻香を起こさないように、頭の下敷きになっていた腕を引き抜きベッドから這い出た。不自由の感は残るが体はそれなりに動くようだ。

プレゼントを部屋のガラスのミニテーブルの上に置いてドアに向かう。

「誕生日おめでとう」

ドアを開けると　　茅ヶ崎が両手いっぱいを持つお菓子の袋と共に満面の笑みを浮かべて立っていた。

そして突然茅ヶ崎は意味の分からないことを口にした。

「ごめんなさい、お兄さん。ドツキリでした」

・・・。

え？

何？

「中々感動的な最後でしたね。お兄さんの台詞には少し心打たれましたよ」

「そうかな？ それより私の隣で言った、屍について言及したいと思うのだけれど？」

後ろを見れば麻香が起き出して片手を腰に当てて重心を中心から反らせる姿勢を取っている。

そりゃもう、モデルのような。

地味な柄のパジャマも麻香が着れば映える。

「それはもう可愛さ余ってなんたらってやつでしょ」

「そう？　なら抱きついてキスでもしておけばよかったよ」

「今からでも遅くないよ。いつちやいなさい」

「兄貴・・・・・・・・いや、お兄ちゃん、ゴメン！」

麻香が突然飛びついてきた。

これが抱きついてくるならまだ精神的ショックだけで僕の被害は済んだだろうが、現実には違った。

ローリングソバット。

横回転しながら飛び上がって蹴り付けるプロレス技。正面を向いて立っている相手や、走ってくる相手にカウンターで仕掛ける。右回りに回転しながら飛び上がり、回転の勢いを生かして、自分の右足の裏で相手を蹴り付ける。

プロ顔負けの、美しいフォームで麻香が空中で旋回した　　気がする。

麻香の繰り出す技を僕の目で捉えきれないのでどうしようもない。ただ、僕は咄嗟にドアの縁を両手で押さえてその技を受け流すことなく胸の激痛を感じた。

「ぐっ・・・・・・・・」

そして麻香がそれを予期していたようにバランスを取り、着地した。

「流石、お兄ちゃんだね。体を張って栄を守るなんて」

「・・・・・・・・どういう趣向だ、これは？」

僕は胸を押さえやつとのこととで声を絞り出した。

「んー。だから屍のお礼」

「どれだけプライド高いんだよ……」

「……三千七百七十六メートル？」

「それは日本一高い山の標高だろうが！」

「それじゃあ五メートル？」

「いきなり身近になった!？」

残り三千七百七十一メートルは何処にいった!？

いや、十分に高いけどさ！

それに高いの意味が根本的に間違ってるから！

「お兄さん、素敵です。旋回脚をくらいながらも突っ込み続けるその精神」

茅ヶ崎が僕の腕の隙間を通り抜けて部屋に入りながら言った。そしてそのままベッドの端に座る。

「……それで？ ドッキリっていうのは？」

「どうだった？ 私のブラコン妹キャラ」

麻香のこの一言が全てを物語っていた。

……ということは昨日の事は嘘か。

え、じゃあ何？

僕は作られ話の為に数ページ兄妹愛について語ってたって事？

「気持ち悪いなあ……。私が実の兄の事を好きになるわけ無いじゃん。エロゲーじゃあるまいしそんな展開普通は有り得ない事なん

だよ？ それをあそこまで簡単に受け入れちゃって、まあ」

「・・・お前が普通じゃないからな」

「確かにそうだけど、少しは疑った方がいいんじゃないかな？ 愚かな兄だと心底思っちゃった」

「愚兄、か・・・」

「一応ヒントはあげたんだよ」

「ヒント？」

僕は麻香の言葉に反応する。

「そう、ヒント」

そして麻香は茅ヶ崎の方を向いた。

茅ヶ崎は無言で頷き、肩に掛けたバッグから携帯を取り出して言う。

「このストラップです」

そして茅ヶ崎は携帯についているメタルアクセサリを僕に見せた。

失くしていたお気に入り。

昨日麻香が推理して僕が見つけたストラップ。

たしか鬼灯が彫ってあるものだ。

「気付いた？」

麻香が僕に訊く。

「成程。全く分かん」



「だろうね」

「鬼灯の花言葉ですよ」

ここで全く理解できない僕に茅ヶ崎が助け舟を出した。

茅ヶ崎……。

僕は花言葉なんて微塵も知らないから……。  
全然助け舟になってないから……。

「言うなら船舶免許持ってないのにクルーザーを貸りた馬鹿の心境  
でしょう?」

「例えが例えじゃない!」

「鬼灯の花言葉は『偽り』なんです」

「どんなヒントだ、この野郎!」

そんなヒントで麻香の話すことが嘘だなんて気付ける人間がいたら  
見てみたいわ!

「あーあ。お兄さんが拗ねちゃいましたよ」

「ま、いいよ。今回もそれなりに楽しめたし」

と、麻香は冷たく切り捨てる。

「そっいえば兄貴。プレゼントありがとね」

そして僕の誕生日プレゼントを手にとってこちらに向けた。

……まったく、楽しそうだな。

それも去年とは比べ物にならない位。

少しずつテーブルに並べられるジュースやお菓子を眺めながら僕は

思う。

麻香 16歳の誕生日は盛り上がれそうだ。

第一章 完

ブラコンと言う言葉がありますが、現実の兄に対して恋心を抱くことは滅多にないのが一般的です。しかし近年ではあらゆる漫画・小説にこの言葉に加え、シスコンと言う言葉も頻繁に登場します。特に「萌え」を主体とする作品には殆ど必ずと言っていい程登場し、やおい系の男子相愛の兄弟についてもこの言葉が使われるようになってきています。その中でもブラコンと言うのはシスコンと比べ悲劇的で刺激的な表現での結末が多いので「萌え」と言うのはある意味、ブラコンについては干渉されないかもしれないです。この作品シリーズでのツンデレ妹はそれに加えデレる時でもあまり魅力が感じられないのが現状。今作ではさらに可愛さが殺がれている事を気付き、次作では多少、度を越えたデレ方を想定（妄想）しています。「妹」と言う言葉に反応したあなたには次作を期待して頂く様御願い致します。すみませんでした。

このシリーズに登場する妹・麻香の能力「瞬間記憶能力」及び「完全記憶能力」とはサヴァン症候群の能力の一つとして呼ばれます。このような能力を持つ人間は実際にいて、1887年に膨大な量の書籍を一回読んだだけで全て記憶し、さらにそれをすべて逆から読み上げるといふ、常軌を逸した記憶力を持った男性が発見されたのが最初と呼ばれています。日本では驚異的な記憶能力を持つ山下清さんがサヴァン症候群と呼ばれています。しかし実際、サヴァン症候群の人間は自閉症などの精神病の患者でどこかに障害を抱えていることが殆どです。これは一切無視しております。

読んでくださって有難う御座いました！

一章 妹の常識潰しはいかがでしたでしょうか。

推敲が大変でした。詰まらない小説の見直しは長ければ長いほど退

屈・・・(え?)

実はWordで100ページを目指す予定でしたが話の内容が思ったより伸びずに、膨らませることが僕の技量ではまだ無理でした。無念ですorz

最後に、このシリーズでは余り際立った現実離れの事件は起こさずに普通の生活の中で常識離れた麻香が活躍するように書いております。退屈な会話小説かよ、と思った方にはお詫び申し上げます。そういう小説なんです(汗)

さて、作者は次作では今度こそ100ページと燃えております。次回にご期待ください。

感想等ありましたら一言からお気軽に御願います。評価していただけると幸いです。

これから多少のお時間頂いて執筆しようと思えます。また御願います。

王手

101・P（前書き）

初めての方は初めまして。

知っている方は久方振りで御座います。

前回から3ヶ月近く空きができてしまい、申し訳なく思います。

これからまた二週間ほど宜しく御願います。

「妹の時間潰し」です。

例えば僕の友人に、小学生の頃「自分は世界一頭が良い」と安直な過信を抱いていた中学生女子が居たところで読者諸君には全く関係の無いことだ。それが妹の唯一無二の友人であり、僕の親友でもあり、妹の良き理解者の茅ヶ崎ちがさき栄さかであつても何ら不思議の無い事である。

寧ろ小学生の頃に考える事が、常識外れで、突拍子も無いことである方が普通だ。

その対象がヒーロー、或いは抽象的に、自分はこの世界の中で特別な存在だと信じてしまうことも一度や二度ならず有つたのではないだろうか。

他の誰より特別で。

他の誰より別格で。

この現代社会と言うフィールドで、自分が主人公だと信じたことはないだろうか。  
過信した事は。

だが、幼少の頃の茅ヶ崎のそれは、少し違つた。

有名大学卒業で一流企業の重役を勤める両親からのプレッシャー！。

異常なまでの熱狂的教育。

偉大なる両親の娘は偉大でなくてはならない。

傍若無人で、美女で、天才で、生きるスーパーコンピュータである僕の妹、麻香あさかと分かり合うまでの茅ヶ崎は想像するに自意識過剰なまでの自信に満ち溢れていた筈だ。

まるで世界の支配者のような。

まるで世界を掌握しているかのような。

まるで 幻想に溺れているかのような。

造られた自信 だったのかもしれない。

自分に酔わないと やり切れない。

自分を見失った 少女。

ある意味、麻香と似ている。

天才が故の孤立。

しかし、頂点は一つしかない。

ピラミッドの最高点に存在する代わり、隣を見ても自分しかいないのだ。

故に 孤高。

それが麻香とは違った。

僕は、今も茅ヶ崎栄に同情しているのかもしれない。

一つ隣の家に産まれていたらどんな人生を送ってこられたか。

哀れんでいるのかもしれない。

四月に起きたあの出来事を。

しかし、これだけは言える。

僕は彼女に感謝している。

兄として麻香を理解した茅ヶ崎栄に感謝している。



僕が茅ヶ崎に初めて会ったのは半年前の事。

そして事件が起きるのはそれから約二ヶ月後。

それは苦くても甘くない懐かしい話。

忘れられない 悪夢の記憶。

忘れられた 悪夢の記憶。

僕が語るが、主人公は僕じゃない。

主人公は間違えなく彼女達なのだから。

だから 時間潰しのつもりで読んで欲しい。

これは恵まれているが恵まれない、二人の少女の喜劇であり  
悲劇である。

土曜の朝、それも身も心も凍える二月の季節に、通学に使うスクールバッグに勉強道具を入れて、図書館に向かう機会があるなんて思いもしなかった。いくら高校受験の真つま只中ただなかにいるとしても、自宅で勉強すれば図書館の自習室を利用する事は無いと思っていた僕は溜息ためいきを漏らした。するとそれが聞こえたのか、それとも心を読んだのか、背後で殺気が感じられる。それでまた僕は溜息をつく事になる。

僕の友人全員が同じ高校を受験すると聞いて、僕もその高校を希望しようと思ったのはつい二ヶ月前である。教師にも少し頑張れば受かると曖昧で適当な太鼓判たいこばんを押され、多少自分よりレベルの高い高校だが、調子に乗って挑戦しようとしている。

現在、教師や両親に言われた通りに今まで頑張ってきたのだが、昨夜に実施された妹の特製入試予想問題といわれる入試出題率八割越えの模擬試験で見事不合格点を取ってしまい、妹の命令でスパルタ教育を受けるべく、図書室に向かっているところである。冒頭に心も凍えたとあったが、もしかしたら凍り付く心の原因は後ろを歩く妹のせいかもしれない。

「自分が悪いんですよ。いつもいつも勉強すると言っては舌先三寸したさきさんすんの兄貴が、珍しく熱心に勤勉に励んでるなあ、と思って態々（わざわざ）予想問題を作ってあげたのに、兄貴は全然解けないんだから」

この二ヶ月何やってたの？

と、中学二年生で僕の妹、麻香が僕の隣に並んで言った。

175cm近い麻香と僕が並ぶととても兄妹には見えない。(敢えて明言しないが)妹よりも一回り低い身長で僕と妹と一緒に歩くのを傍から見れば、姉弟に見えるに違いない。

黒いコートに身を包み、首元をこれも黒いマフラーで隠す麻香の姿は、さながらモデルの様である。  
この評価は僕の身躰では決して無い。

僕は寧ろこの小生意気な妹を貶したいぐらいなのだが、その顔貌風姿を見て非難する方が難しいだろう。七頭身の小さな顔と高めの身長、黒く輝くストレートの髪、整った顔立ちを総合すればそれはもう、美女の部類に入ってしまう。  
その兄ならば兄も美形なんだろう？

なんて安易な考えは直ぐに捨てる事をお勧めする。DNAが何と言おうと僕と麻香の血縁関係はあるのに、この兄妹は似ても似つかない。まるで美的要素を全て妹の方についてしまった搾りかすのような僕を、麻香の兄と他人に信じさせるのは至難の業だ。

それに加え、妹には知能指数まで吸い取られている。

人外を逸した計算能力と記憶能力は最早、特殊能力や超能力といっても過言ではない。

まるで何桁まで加減乗除できるのかと言うような計算は、桁だけではなくスピードまで尋常な速さである。どんな計算問題であろうとコンマ一秒で答えを算出することが可能だという麻香の言葉は未だ嘘ではない。

記憶能力もそれはそれで異常で、麻香は一度見たものは決して忘れない瞬間記憶能力を持つ。

会話した相手の表情をそれによって全て暗記、パターン化して相手の心を読む読心術まで使える。ここまでくると彼女は人間ではないかもしれない。

それら故に彼女の知能指数は学校の成績では表しきれず、今迄に定期試験で全教科満点以外は取った事がない。

またまたそれに加えて、麻香は運動神経も良い。

超人宜しく中学に入学して始めた柔道部では、去年、全国を制覇したと、まるで朝の挨拶である「お早う、兄貴」のように自然に報告されたのはまだ記憶に新しい。相手が弱すぎるといつて二年次に進級してからは退部している。

私が居なくなれば真面目な部活少女たちの全国制覇の夢も叶うことでしょう、とその後他人事のように言われた僕でも、退部は麻香の優しさなのか、それとも哀れみなのかは分からない。

これらのせいで完璧過ぎるこの妹には　　本人は好いてない様だが　　あだ名がある。

公立中学在学の僕とは違う中学校、私立なでしこ撫子大学付属中学校に在学中の妹は、その容姿などその他諸々から撫子大学付属中の「大和撫子やまとなでしこ」と呼ばれている。

その大和撫子がずっと黙って頭の中で妹を紹介している僕に同じ台詞で話しかけてきた。

「二ヶ月なにやってたの？ 兄貴」

さっきもそうだったが、この失礼な発言には少しムツとする。

「いや、遊んでいた訳じゃない」

そう。

遊び好きで飽きやすい僕でも、決して遊んでいたわけではない。

「確かに机に向かったみたいだけど？」

「勉強してたんだよ。志望校に合格すべく」

「兄貴の部屋さ、受験勉強始めてから、綺麗になったよね？」

ここで紹介する。

僕の部屋は汚い。

物（俗に言うガラクタ）が沢山あって寝るスペースしか無いほどに。

「そりゃ掃除したからな。汚い部屋だと何事にも集中できないもの  
だろう？」

再度紹介する。

僕の部屋は最近、生まれ変わったのである。

なんと、布団以外の空間の他に勤勉に励むエリアができたり、まるでジェンガで誰かが積み上げられた塔を緊張の中崩してしまった様な惨事の模様が映し出されていた机上は、今は参考書しかない。

「二十三回」

「えっ？」

「この二ヶ月中の兄貴が部屋を掃除した回数だよ。その内、家具の移動だけの模様替えが五回」

「うっ、ぐ」

「確かに分からないわけじゃないよ。テスト勉強中に部屋の掃除がとて<sup>はかど</sup>も捗るなんてことよくある話だからね。漫画とかでよく見るあるあるネタでは高い確率で採用されるし」

「あの・・・」

「兄貴は定期試験勉強の時も掃除をしたよね。兄貴にとっては、高校受験は定期試験と同じ感覚なんだね。神経図太くて見直しちゃったよー」

「あ、麻香・・・」

「そうやって試験前ギリギリに徹夜してその場を乗り切って生きてきた兄貴は一生」

「すみませんでした！ 勉強に集中していませんでした！」

僕は妹に対して勢いよく頭を下げた。

そりゃもう、土下座の勢い。

「今日はその分集中させるから覚悟しておいてね」

「二カ月分ですか・・・？」

容赦ねえ……。

何倍に薄めれば元に戻るんだよ……。

「それは簡単でしょ。六十倍だよ」

「はあ！？ 今、有り得ない数字聞き取ったけど空耳だよな!？」

今日一日で時を駆ける気が、貴様は!？

本当に二カ月分じゃねえか。

「ん？」

突然麻香が立ち止まった。

そこは24時間営業で全国チェーン経営の某コンビニエンスストアの目の前。

日本のコンビニにおける最大手のこの店は、田舎であるこの郊外県にも何店もチェーン進出しているのだ。

個人的にはファミマが好きだが。

「コンビニ寄っても良い？」

「何か買うのか？ ……まあ……僕は勉強を教わる側だし別に構わないが……」

「歯切れが悪いなあ。何？」

「いや、この時期の図書館の自習室って混まないか？ 俺みたいな

受験生が沢山いるだろう？」

「兄貴にしては珍しく勘が鋭いね」

大きなお世話である。

「それなら心配する必要はないよ。予約してあるから」

「え？ でも自習室って予約制じゃなかった気がするぞ」

友人が言っただけだから間違いない。

それにもし予約制だったとしても昨日、図書館に出向く事が決定されたんだから、予約席は満席だろう。

「またまた鋭い。今日は冴えてるよ、兄貴。このまま勉強も同じくらい冴えてると私としては楽なんだけど、そう簡単にはいかないんだよねえ……。そういうのっていい感じにバランス取れてるもんだし。シーソーと同じだよ。釣り合う事なんて滅多にない。釣り合わぬは不縁ふえんの基もととは言っけど、そう首尾よく相互が釣り合うなんてないよねえ」

何を言っているのだろう。

後半は全く意味が分からない。

「二週間前に頼んだんだよ、館長に」

「？」



館長に？

二週間前？

「そう。今日自習室使うこと分かったから二週間前に館長さんと交渉したわけ。だから昨日模擬試験を実施したんだよ。結果は予想を大きく下回り、ある意味予想外だったけど」

「俺の二週間はどこに行ったんだ！？」

未恐ろしい妹だ・・・。

こうなることを予想していたならもっと早く対処して欲しかった・・・。それ以前に館長と交渉してどういふことなんだよ・・・。しかも麻香でさえ予想外って、どんな脳を持つてるんだ、・・・僕は。

「それは冗談。兄貴の馬鹿さ加減は私の予想範囲内だよ」

そう言っつて笑顔を向けられる。

「益々(ますます)凹むっつーの」

何だ、馬鹿さ加減って。

「兄貴の学力は取り敢えず平均であるストライクゾーンの下方面に予想張つてれば大体当たるんだよねえ」

「俺の成績はフオークか！」

あながち間違つてはいないが。

「違つよ。ゴロだよ」

「キャッチャーまで届かず!？」

キャッチボールさえも危うい僕の頭だった。

ウィーン。

僕らがコンビニの入り口まで行くと静かに自動ドアが開いて、外気とは違う暖められた空気が外に逃げた。

麻香は入ってすぐに、迷わず目的の場所に向かったようだか、僕はいつも通り雑誌売り場に吸い寄せられた。

癖と言うか、なんと言うか、基本的にコンビニに入ると雑誌コーナーで週刊誌を立ち読みするのが常だからだ。

今週は忙しかった所<sup>せい</sup>為で、今週号の漫画雑誌を読んでいないことにふと気付き、それを探した。

やっと見付けたと思つたら店内の奥にいる麻香から「兄貴、ちょっと来て」と、声が掛かった。

僕は無言で頷き、雑誌を置いて麻香がいる清涼飲料水の冷蔵ブライトンドに向かう。

「今から2分以内に自分の昼飯と飲み物選んで来て。時間内に決めなきゃ自腹だよ」

「えっ？ 奢おごってくれるのか？」

「お母さんから貰ってきてるの。兄貴を高校に合格させることを条件に」

麻香はそう言っけて千円札を二枚、取り出す。

「随分と安い家庭教師代だな」

あるいは裏口入学金か。

「お母さんだもん。こんなもんだよ。・・・私はもう決めただから早くしてよ」

「・・・了解した」

僕は悩むことなく手軽に食べられるおにぎり二個とお茶を選んだ。

「お前、こんなものを買うのか？」

買い物かごにおにぎりを入れるときに、既に入っていた、小学生など子供向けの日曜の朝に放送されているアニメの食玩が一つ入っていることに僕は気が付いた。

確かタイトルは「タヒチに向かった猫」だっけ？

.....

どんなアニメだよ.....

少し視てみたいかも。

僕は自分にツツコミを入れて麻香の言葉を待った。

「これは兄貴の勉強に必要なもの。因みにタイトルは『タピオカを愛した猫』、通称『タピ猫』ね」

「俺の受験勉強には日曜朝枠の子供向けアニメの食玩が必要なのか！？」  
何をする気だ、お前は！？」

しかもタイトル惜しい！

内容も益々気になってきたし！

タヒチじゃなくてタピオカが好きなんだ！

「まあまあ。後のお楽しみってことで会計済ませちゃうけど、まだ何か買うものある？ あっても買わないけどね」

買ってくれないなら聞いてくれるな。

麻香がレジで精算しているときに、僕はガラスから見える外を覗く。うっ、寒そうだ……。。

コンビニを出たら早く、もう一度室内に入って暖をとりたい。

「ありがとうございます」

店員の挨拶と共に麻香がレジ袋を持って、さっさと外に行ってしまった。

僕も慌てて後に続く。

「僕が持とうか？」

「いいよ。図書館、後少しだし」

僕の好意は麻香に一瞥いちべつもされずにそう断られた。

よく見ればさっきまではポケットに突っ込まれて分からなかったが、麻香が身に付けている手袋までも黒い物だ。

黒くろ尽じんの麻香は、ある意味不気味である。

そう思っていると麻香がこっちを横見して言う。

「白とか黒の無彩色がファッションとしては何も考えなくていいから無難なの。特に黒は私に似合うから」

「魔女かよ。だからと言って頭から爪先まで黒で統一することはないだろう」

確かに黒は似合っているが。

「安心して。このコートを脱げば来年の夏用に買ったビキニ姿を拝めるから」

「俺達は何処に行くつもりだ!？」

「真っ赤だよ」

「色なんか聞いてない!」

「一体図書館のどこで泳ぐつもりだよ!」  
室内プールじゃねえんだぞ!

「本の森、字の海で遊泳する」

「上手くねえよ!」

最初森って言っちゃってるじゃねえか!

「水着姿の私に濡れなさい」

「濡れねえよ!」

それに妹の水着姿に濡れたら大変じゃねえか!

「冗談はともかく、こんなに寒いのに白を身に付けるのは気分的に無理。よって衣服が黒で統一されるのは必然」

「普通、黒の方が寒いと思うのだが・・・」

確か色の作用とかで、青や黒は寒色系の色だった気がする。

「私の中だと白って薄いイメージがあるの。衣服において薄いつていう心象は、薄着ってことですよ。つまり私は白い衣類ではなく、少しでもこの寒さを誤魔化す為に黒に統一してるんだよ」

麻香が話し終わると同時に、僕らは赤信号で立ち止まった。

赤は危険を表す、STOPサイン。

この信号を過ぎれば図書館は目と鼻の先だ。

僕は携帯を取り出し時刻を確認する。

9時58分。

開館まで2分もない。

恐らく麻香の計算通りだろう。シュミレーションゲームの様に、きつと入り口に着く頃には丁度入場が許可される。

「そういえば麻香。さっき館長と交渉したって言っていたが、どういうことだ？」

忘れていたが、思い出してしまったからには気になってしまふ。  
よくよく考えればとんでもないことを言っていなかったか……？

「ああ。それなら蔵書の整理を提案したの」

「お前が選別するのか？」

「そうだよ。本って時が経つにつれて内容が古くなっていくでしょ。  
不要と考察できる本は奥に移されたり、廃棄されるわけ。私は全  
ての蔵書の内容を把握してるから簡単に出来るの。現代においてあ  
まり必要が無さそうな本を選んで、リストにして提出するってい  
うこ  
と」

「悪いな。俺の為に」

「いや、私があそこの図書館が使い難にくいからさ」

ああ、そう……。

刹那の感動だった。

「一石二鳥って言うのはこの事だよ」

「県内で有名なお前だから出来る芸当だがな」

蔵書の内容を知って且かつ現在の情報を把握しているお前じゃなきや  
図書館も条件を飲まないだろうし。

「ほら、早く行くよ」



いつの間にか信号が青に変わっていて、麻香に急かされた。言われて横断歩道を渡る。

と。

「・・・あれ？」

今日は休日で一通りのお店が開店する時間帯でもあって、図書館がある通りは車が行き交っていた。その交通量の所為か、僕が鈍感なのかどうかは定かではないが、図書館前で感じる違和感に首を傾げる。

あれ。

何かおかしくないか？

「おい、麻香」

いくら考えてもはっきりしないので、麻香もこの違和感を覚えているかどうか確かめることにした。

「何？」

「この図書館、何か違和感が・・・」

「んー。開館直前なのに並ぶ人が居ないとか？」

「あつ」

それだ！

この時期、何人もの中学生や高校生が受験の為に図書館を使う筈である。特に自習室は数が限られているので、朝早く来ないと満席になってしまうのもザラだ。

なのに、この時間に誰もいない。  
違和感の原因はこれだったのである。

しかし何故？

「そりゃ今日が休館日だからでしょう」

「僕らは何しに来たんだ！？」

僕は驚愕の真実を知った！

驚き過ぎてドラえもんみたく数ミリ浮いたんじゃないかとすら思った。

「愚問だなあ。勉強でしようが」

「そんなことは百も承知だよ！ 僕が聞いているのは休館日の図書

館に態々来てどうやって勉強するんだ、ということだ！」

「・・・」

あ、無視した。

麻香は僕の決死の突っ込みを無視して、休館日の為に電気が通っていない自動ドアの隣にある事務室の窓口に向かった。

「すみません」

窓口で麻香が言った。

職員が顔を出した。

「はい」

「自習室を使用したいのですが」

「大変申し訳ありませんが、本日は休館日となっておりますので」

当然の返答である。

「知っています。館長さんから話がありませんでしたか？」

「はい？」

職員が首を傾げる。

「……面倒なので館長さん御願います」

「いえ……あの……お名前御願いますか」

イライラしている麻香の迫力に負け、職員が机にある電話機の受話器を掴つかんだ。  
確かに怖い。

「『大和撫子』です」  
「は……？ あの……」

職員はあからさまな偽名に、なおも首を傾げ怪訝そうな顔を向ける。

「そういつて頂ければ伝わります」

職員も諦めたように電話の番号を押し始めた。

麻香が振り向いて腕を組んだ。見るからに不機嫌そうな顔で、僕は少し肝を冷やす。

ここで失言すれば終わりだ。  
具体的に何がという訳ではないが、僕の何かが終わる気がした。

「やっぱりそうだろうと思った」

僕は慎重に言葉を選ぶ。

「そりゃそうだろ。まさか休館日にやってくるとは予想していなかったと思うぞ」

「二週間後に来るって言ったんだけどね」

「でも今日とは思わないだろ、普通」

選んで休館日に来るなんて迷惑な利用者である。

「あ、館長来たっばいぞ」

図書館の裏の方から、背広に身を包んだ中年の男が現れた。恐らくこの人が館長だろう。

「お早うございます、麻香さん」

館長の一礼に冷静に礼を返した麻香につられ、僕も頭を下げる。いやいや、丁寧過ぎるだろ、館長さん。

「お早うございます、館長。本日は約束の件で来ました」

と、いつの間にか何処から出したのか、麻香の右手には厚い大きな封筒があった。

「これがこの図書館の蔵書整理参考資料です」

館長は麻香が差し出すそれを両手で受け取った。

「ありがとうございます。麻香さんでなければ何ヶ月掛かっていた事分かりません」

そう仰々しくお礼を言って、封筒を脇に挟む。

「大袈裟ですよ。．．．それで館長。自習室を使用させて頂いても良いですね？」

「そのことなのですが、麻香さん。本日は休館日なので．．．」

「丁度二週間前の土曜に、二週間後に使うと言った筈です。休館日であろうが例外はありません」

言い切りやがった。

「ですが、麻香さん。これは決まりなので．．．」

館長は心底困った顔をしている。

この無理難題を本当なら一言、二言で跳ね除けられるのに、今回は約束がある。

断りきれないし、許可もできない。そんなジレンマに陥っているはずだ。

そんな館長に尚も、麻香は畳み掛ける。

「口約束であろうと、契約は契約。守っていただきます。大丈夫です、本は弄りません。場所と机と椅子を貸して頂ければ結構です  
で」

「しかし・・・」

「あ、あの・・・？」

ふと、後ろから声がした。

振り向くと子供連れの母親が心配そうにこちらを眺めている。子供は四歳か五歳くらいの男の子で母親と手を繋いでいる。

「どうか致しましたか？」

それに対応したのは館長だ。

「図書館、今日はお休みなんですか・・・？」

「はい、真に申し訳ありませんが本日は休館日となっております。  
また後日ご来館ください」

「そうですか・・・ありがとうございます。残念だけど今日は図書館休みだって、りょう君」

りよう君と呼ばれた男の子は驚いて母を見る。

「ええ!?! ほん、かりられないの!?!」

「そうよ。また明日来ましよう」

「ええーやだー。きょうかりるー」

りよう君はお約束のように駄々を捏ね始めた。

「無理なものは無理なの。帰るわよ」

「いーやーだー」

「我俣わがまま言わないの」

「やーだーよー」

遂にりよう君はその場に蹲すくまってしまった。

母親はこちらを気にして腰が低くなる。

「すみません。聞き分けのない子……で……」

母親の言葉が最後まで続かなかったのは、麻香が突然りよう君に近寄り、しゃがんで話しかけようとしたからである。

「りよう君」

「ふえ?」



いきなり知らない女性に話しかけられたからなのか、りょう君は声にならない音を発して絶句した。

「今日はこれで我慢しようか」

そういつて自分で持つとあったコンビニの袋から、例の日曜朝粹のアニメ「タピオカを愛した猫」の食玩を取り出した。

「ああ！ タピねこ！」

これにりょう君は反応した。

母親も、館長でさえも目が点だ。

「欲しい？」

「ほしい！」

早くもりょう君の頭からは本の事より、目の前にある食玩しか無いようだ。

「これで明日まで本は我慢できる？」

「できる！」

「それじゃあ、あげるよ。はい」  
「わあ！ ありがとう、おねえちゃん！」

りよう君は歓喜の声を上げた。

「あ……」

脇で母親が困った顔をした。

そりゃそうだ。

赤の他人である麻香が自分の子供に玩具おもちゃをあげて困らないわけが無い。どうしようもないので僕が謝っておいた。

129

「すみません。うちの妹が勝手な事をして」  
「妹！？ ……え、ああ、こちらこそありがとうでございます。りよう君、しっかりお礼言いなさい」  
「ありがとう！ おねえちゃん！」  
「どういたしまして」

妹と聞いて驚いていたと言うことは、姉だと勘違いしていたか……。

僕は内心、本日何回目かの溜息を吐く。

それにしても麻香の奴、これを予想して「タピ猫」を購入したのか・  
・・。

何をどうすればこんなシナリオを予測できるのだろうか・・・。

いつもの事ながら感心するところばかりである。

親子は最後に深々とお辞儀して帰って行った。

それを見届け、麻香は館長に向き直る。

「それでは自習室をお借りしますね」

「何が『それでは』だ！ 脈絡も何もあつたもんじゃねえよ！」

つい我慢出来ずに突っ込んでしまった！

これまでの麻香の横暴な発言は 少なからず他意が含まれてい  
るだろうが 僕の為に言っていることだろうから口出ししない  
ように決めていたのに！

つい先ほどの幼児が 食玩と言う等価交換があつたが 休館  
日ということで図書館を諦めたと言つのに、この妹は平然とそれを  
無視したのである。

自己中過ぎるぞ、麻香・・・。

「ごめん、兄貴。今は兄貴の相手をしてる程気持ちに余裕が無いの。  
後でしっかり相手してあげるから黙ってて」

「相手ってどうい・・・!？」

威圧感、殺気と言うものが、ただの女子中学生から発せられ

るわけがないという持論をお持ちの方がいたら、身をもって体験できるこの立場を替わろう。

いや、寧ろ替わってほしい。

肉親に向ける威嚇いかくどころか、人間自身の畏怖いふの限度を遙かに超える気迫が麻香から放たれた。

全身の細胞が硬化したように思えた。

地雷踏んだ！

それを館長も感じたようである。

隠しているだろうが顔が恐怖に引き攣つっているのが一目瞭然りょうぜんだ。

せめて額の冷や汗をどうにかしないとこの冬の朝には不自然過ぎるだろう。

麻香は館長へと向き直る。

僕を威嚇した表情から一転して、不気味なほどの満面の笑みを浮かべる。悟りを啓ひらいたような、アルカイツクスマイルとも見える。

「そのまま騒がれても迷惑でしたね」

と、一言。

そして

「自習室、拝借します」

有無を言わせぬ口振りで断言するように言った。

「・・・分かりました。それではこちらにどうぞ」

ついに館長は折れ、僕らを館内に促した。

「あ、お待ち頂けますか。もう一人参加しますので」

「え？ 俺達だけじゃないのか？」

「あれ、言ってなかった？ 兄貴の家庭教師も一人だとかつたるいから、お喋りしながらやろうかなと思って、友達を呼んだの」

「友達！？」

友人と言うものを一切作らない麻香の口から「友達」という言葉が突然出てきて、僕は叫んでしまった。

その異常なほどの能力により、恐れられ、気持ち悪がられる麻香は、友情と言うものに興味がなかった。それに加え他人と力を合わせなくとも全ての事において、自分だけで解決する事ができる。

喜びを分かち合う相手は兄妹である僕が居る。

両親にさえ心を閉ざす麻香の唯一の自然な人間関係は兄だけなのだろう。

これは僕が自意識過剰なわけではない。

その証拠に、例えば今だって表面では嫌々言っても僕の高校受験の

手伝いをしてくれる。

「いや、それは世間体。自分の兄貴が高校受験如きに落ちるとか、恥ずかしくて外も歩けないし」

.....。

これは無視するとして。

つまりそんな麻香が友達なんて居るといふのは信じられない。

「ま、確かに驚くのも無理ないよね。私が休日に友達と話をするために時間を割くなんて何年振りかだろうし」

麻香はニヤリと笑って言う。

「現れたみたいだよ」

「まるで人を神出鬼没の化け物のような扱いをしないでよ、麻香」

自分の背後、直ぐ後ろで突然声が上がった。

僕はいきなりの登場に驚き、殆ど反射神経で振り向いたが。

「あ、あれ・・・？」

僕の目には僕と麻香が歩いてきた歩道と車道を走る車しか映らなかった。

誰も居ない場所から声が聞こえるっついでいよいよオカルト染みてきた。

この小説はフィクションであつてもファンタジーとか夢物語のストーリーではなかった筈である。

例えば僕の特殊能力が突然開花して、靈魂の言葉が聞こえるようになった、みたいなの。

例えば話しかける肩に乗る程度の小さな可愛い妖精と壮大な魔法と冒険の学園物ストーリーが始まる、とか。

はたまた僕のもう一つの人格が目覚めた、のような不可思議な展開もあるかもしれない。

なるべく、どんなストーリーでもバットエンドにはならないで欲しいな。

その時の主人公である僕への対応が恐ろしいし、そもそもバットエンドは嫌いだ。

感動物に持つていくなら白血病などの重い病気だし、それ以外なら狂気に満ちた人の死に繋がる暗い話だし。

結局、オチはどれも一緒に飽き飽きしているのである。

「何一人でブツブツ言ってるの？」

「え、ああ」

僕は妄想から目覚めた。

危ない危ない。

「それにしても私の友達をそうあからさまに侮辱するなんて許せないわ」

麻香が僕を睨む。

「は？ 友達なんてどこに……？」

と、麻香に言うのと更に恐ろしい顔で睨み返された。

こえーよ。

蛇どころじゃなく、ライオンに睨まれた蛙のようだ……。ビビるって言うの……。

不意に、振り返って道路を見渡す目線の先で先程と同じ声が出た。

「下だよ、下。もしかしてわざとやってる？」

「え？ ……おお!？」

僕が今度こそ声が出た方向に視線を動かすと、そこには濃い黒の頭があった。

僕は驚きの声を上げる。



「初めまして、麻香の兄貴。私は麻香の同じクラスの茅ヶ崎栄と  
」

中学生女子の全国平均身長は何センチなのだろうか。それが麻香の身長ではない事は確かだが、少なくともこれだけは言える。  
茅ヶ崎の身長はそれよりも低かった。

「それじゃあこついうのはどう？ エメラルドグリーンに浮かぶ氷塊」

「だから麻香。厨二っばいって」

「馬鹿ね。こついうのは格好付けたもの勝ちなのよ。センス感じれば厨二であろうと、なんだろうと受け入れるものなの」

「そうなの？ んじゃこれは？」

「漆黒の大雨の後の水溜り。 あ、兄貴、それはこつちの公式ね」

「・・・おつ」

「センスは感じないが面白いな、それ。先輩、それは分数で大丈夫だよ」

「・・・ああ」

「今度は栄が考えてみたら？」

「よっしゃ、お題頼む」

「いいよ・・・これはどう？」

「難しいな・・・」

茅ヶ崎は少し考えて、

「・・・柑橘かんきつ香る小さな空間」

「渋いなあ。 あ、兄貴、それは・・・」

「そいや!！」

僕は自習室の机に並べられた参考書とノートを投げ飛ばした。  
頑固親父がちゃぶ台を引っくり返すように。

本当は机ごと引っくり返したかったのだが、持ち上げる力がないこと以前に、図書館の公共物なので止めておいた。やっぱり皆が使うものは大切にしなければならぬ。

「最近のガキは切れやすいと言われてるのは本当だね」

「喧しいわ!」<sup>やかま</sup> どうして僕が受験勉強している横で『喫茶店のメニューを格好よく言い直そう』とかいうゲームで楽しんでんだ!」

「別にいいじゃん。栄も勉強手伝ってくれてるんだし。二人の家庭教師なんて兄貴にしては生意気だよ。感謝しろよ。崇めよ」

「知るか、そんなもん! 感謝は良いとして、妹を崇拜するとか何の罰ゲームだ! つーか麻香は兎に角、なんで茅ヶ崎までも高校受験の勉強が分かるんだよ!？」

「栄は頭がいいんだよ。なんたって両親は東大の卒業生で、今は某有名企業の会長と秘書。サラブレットだもん。もう大学卒業できる程の学力を身につけてるんだよ」

「マジ!？」

「ああ、まあね。親が教育熱心で、遊ぶよりも勉強といるいろんなものを詰め込まれた」

そこでふと、僕は茅ヶ崎の顔に陰りを感じた。微かだがハッキリとした陰気はその場にそよいだ気がした。

「そんな栄と私が教えてるんだから文句言わないでさっさとやりなさいよ」

「・・・分かったよ」

僕は自分で投げた参考書類を取りに行く。

はあ・・・。

なんとも惨めである。

なんで年下二人に勉強教えてもらわなきゃならないんだよ・・・。

「本当に兄貴は数学が出来ないねえ」

参考書を拾って席に戻るや否や、麻香が悪態をついた。

「しょうがないだろ。数式を見るだけでイライラしてくるんだから」

そして睡魔に襲われる。

勉強が分からない人の典型的なパターンである。

「一回完璧に解いちゃえばその後もスムーズに出来るんだよ」

麻香は言う。

「流れって大切なんだよ」

「流れ？」

「言い換えれば自分のやる気。何かしら自分のやる気を刺激すれば、いつも以上に思考が働かし、頭の回転も良くなる。大切なのはそのスイッチだよ。兄貴のクラスにもいるでしょ。いつも遊んでるくせに成績がいい人」

「確かにいるな」

「そういう人って言うのは切り替えがちゃんと出来るから、頭が良  
いんだよ」

「・・・で？ どうすれば僕のやる気スイッチがオンになるんだ？」  
「今から入れてあげる」

そういつて麻香は微笑んだ。

悪い予感しかしない。

人差し指を立てて、たっぷり間を取って言った。

「兄貴の本棚の奥に隠すようにしまってたあったエロ本を全て机の上  
に置いて来ました」

「帰るぞ」

僕は殆ど反射神経で勢いよく立ち上がった。

何してくれてんだ、この女！？

隠すように、じゃなくて隠してんだよ、それ！

「残念ながらここで帰すわけにはいきません。安心して。お母さんは午後8時頃まで兄貴の部屋には入らないから」  
「安心できるか！ 早く帰って隠し直す」

逆に言えばその時間になったらアウトってことだろう。

出口に向かおうとした瞬間、麻香に腕を掴まれた。

「早く数学を仕上げないとお母さんは自分の息子の部屋でエロ本を見つけちゃうよ」

「……………」

「……………(ニッコ)」

それは悪魔の微笑みにしか見えなかった。

ベッドの下じゃないんだ……と茅ヶ崎が呟いたのが聞こえる。

俺の部屋にはベッドは無いんだよ。

\*

「国語82点、社会81点、数学79点、理科85点、英語83点。  
……………うん。こんなもんかな」  
「はあ、やっと終わった」

僕はカチコチの身体からだを伸ばし、リラックスした。

「一日やってこの程度って言うのは多少心残りだけど、まあ、合格点でしょ」

「この程度って、麻香、あなたの兄貴は結構頑張ったと思うけど」

茅ヶ崎が麻香の発言を咎とがめた。

「何言ってるの。たかが平均点が40点上がったところで」

「だからそれ、すごい事だから」

「私がいながらこの程度って言うのは少しガツカリした結果よ」

あの後、追い詰められた僕は麻香が用意した参考問題集をひたすらやらされた。前半は終わることなく永遠と続けられた麻香と茅ヶ崎の無駄話の中、集中するのは難しかったが、人間何事も慣れである。最終確認模擬試験を実施する頃には周りの音は何も聞こえなかった。それにしてもあんな中身が無い話、よくも一日中話してられるよな。。。

やっぱり友達ができて嬉しいのかな。

茅ヶ崎も頭が良いらしいし、話が合うのかもしれない。

それから。

僕らは茅ヶ崎と別れ、帰路に発った。

図書館を出たのが7時少し過ぎだから、このまま帰ればエロ本を見

られずに済む。

学力も上がったし、母親の信用も落とさない。

僕にとっては損害無しの良い事づくめである。

方法はどうかあれ麻香にお礼を言わなくてはいけないようだ。

「麻香」

「何？」

「ありがとな」

「お礼なんていらぬよ。そんな事言われたらもうとっくにお母さんにエロ本が見つかってる事、言い辛いでしょ」

「やっぱりそういうオチかよ！」

「そっだよな！」

「上手くいき過ぎだと思ったわ！」

「安心して。無難なのを一番上においておいたから」

「・・・何を置いたんだ？」

「『妹の弄り方』」

「どこが無難だ！？ 困難極まりねえじゃねえか！ しかもそんな本知らないぞ！」

「僕のコレクションにそんな本はない。」

「つか、妹がいるのに妹本買ってくるって危なすぎる兄だぞ、それ。」

「私が親切心にも買い足しておいた」



「悪戯心の間違いだろ!？」

そうともいう、麻香は頷いた。

「そうとしかいわねえよ」

五歳の園児みたいな言い方しやがって。

つか相変わらず悪戯のレベルが高い。

最高難易度とは言わないが普通に嫌がらせだ。

「………冷静だね」

口では驚いたものの、走って家に帰ることをしない僕に疑問を持ったのかそんな事を言った。

「もう手遅れだしな。諦めるよ」

暫くは母親と顔を合わせられそうにないけど。だけど。

「マジで感謝してるし、そんなだろうと予想はしてたし」

「どういたしまし……ああ! やっぱり気持ち悪い!」

「なんだよ。最後まで言い切れよ」

「だってさ、本当に気色悪いんだもん。兄貴が私に真面目にお礼を言うなんて。鳥肌さえ立つてきた……。もういつそラーメンのスープで溺死すればいいと思うよ」

「器用な死に方だな」

そんな死に方したら末代までの恥だ。

「醤油か塩か豚骨か味噌か」

「スープの種類を吟味ぎんみすんじゃねえよ」

「・・・お湯で良い？」

「それはスープなのか？ 麵の茹ゆで汁なのか？」

「私が食塩で良い感じに味付けするから」

「それを俗に塩ラーメンといわないか？」

流石にお湯という発想はなかった。

「ナルトは要る？」

「この下りまだ続けるのか？」

そういえば最近ナルトが入ったラーメンを見なくなった気がする。

そもそもどんな味だっけ。

「原料は魚肉のすり身だから、かまぼこと同じ。因みに最近是需要が減って製造量が激減してるって話だよ」  
「ふーん。だから見かけないのか」

イメージも古臭いってことかな。

「む。ナルトっていう発想は古いってこと？」

「いや、そういうことじゃ……」

「それじゃあ知ってるかな？ ナルトって言う漫画があること」  
「そりゃまあ」

一応あの漫画雑誌愛読してるし。

「真のラーメンに合うナルトを作るために戦う忍者の話」  
「あれ？ 僕の知ってるナルトと違う」

共通点は忍者だけだ。

寧ろ共通点があることが不思議である。

「えっ？ それ以外にナルトってあるの？」  
「それ以外のナルトしかねえよ」

どこの出版社で出してるんだ。

訴えられるぞ。

「それにしても冬は日が落ちるのが早いねえ」

自宅近くまで来た僕らは暗い道を歩いていた。空には星が瞬いているが、道路を歩くには街頭の明かりだけが頼りである。

麻香の真っ黒の衣服は闇に融け、ちよつと路地に入ると見失ってしまいそうだ。

この辺りは住宅街なので通る車も稀である。

「家まであと少しだな」

「早く帰ってお風呂に入りたいわ」

「今日は僕が背中を流そうか？」

「エロ本見つかつてる状態でそんなことしたら社会的地位を完全に失うと思うけど」

「そ、そうだったな・・・」

忘れていた・・・。

うっかり冗談も言えないな・・・。

「ああ。でも今日は疲れたなあ」

「一日中話してたもんな」

本当に終始口を閉ざす事はなかった。  
内容は薄っぺらいし、よく飽きなかったよな。

「計算しながらだったしね」

「計算？ 僕の勉強の事か？」

お前にとってそんなの負担にならないだろうに。

「まあね。……そういえば」

僕は立ち止まった麻香を「どうした？」と振り返った。

「栄、どう思う？」

「？ どういうことだ？」

「茅ヶ崎栄のこと、どう思うって言ってるの」

「可愛いし、勉強も出来て、加えてあのサツパリとした性格だろ。  
好感は持てるほうだな」

これでいいのか？

と、僕は付け足す。

麻香は「ふむ」とだけ言って少し考えた。

「茅ヶ崎栄、撫子大学付属中学校の二学年に所属。身長こそ低いも

の、整った顔立ち、人当たりの良い性格、スポーツ万能、学業優秀・・・いや、これは卓越とでも言おうかな。ほぼ完璧な人間よ」「まるでお前だな」

お前の場合ほぼじゃなくて完璧か。

「そうなの。まるで私なの」  
「？」

自分で言うか？

何ていうか少し自意識過剰気味なところが・・・。

「私の頭がいいのは脳の使い方が他人ひととは違うからって昔言ったでしょ？」

「そう言えばそんな事言ってたな」

意味は半分以上理解できなかつたが。

「茅ヶ崎栄はそうじゃない」  
「えっ？」

ど、どうしては。

「そう。あの子の頭は兄貴と同種。普通の脳細胞だよ」

「いや、ちよつと待て。それなのにお前に近い存在ってどういうことだよ？」

「そう。あれは少しの才能と努力　これじゃ良く聞こえちゃうかな　理想と非現実によって塗り固められた、いわば作り物の天才」

そして、麻香は続ける。

「並みの努力ではああはなれないよ」

「作り物の天才・・・？」

麻香の言葉を反芻して意味を噛み締める。

「しかし・・・茅ヶ崎に本物の才能があつたんじゃないか？」

「そんなものあれにはない」

麻香は言い放った。

彼女は人より少し頭の回転が速いだけ、と。

「考えてみてよ、兄貴。私みたいな小説や漫画の中にしか出てこないような完璧超人がこの世界に何人いるの？」

「だが、茅ヶ崎は完璧じゃないってお前が今・・・」

「だからほぼ完璧なの！」

だけど。

「ほぼって言う意味分かる！？ 後一步で完璧なんだよ！」

「……………」

「私でさえ完璧じゃないんだよ」

「えっ？」

お前は完璧じゃないか。

誰がどう見ようと。

「それは確かに恐竜を復活させるだとか、全人類を滅亡させるとかは不可能じゃないよ。しないだけ。だけどさ、いくら私でもできない事はあるんだよ」

「た、例えば…………？」

「何の装備もなしに成層圏にはいけないし、海溝の底を歩けない」  
「それは当たり前だろう」

逆を言えば装備があれば出来ると言っことだろうが。

「そつだよ。当たり前なんだよ。論ずるまでもなく自明なんだよ。……………ほら、私は完璧じゃない」

「人間では出来ない事が出来なくても、それってどうなんだ？」



「それじゃあ人間の完璧って何？」

「いや、それは……」

「どこから完璧なの？ 境界線ボーダーラインはどこ？」

言われてみればそんなこと考えた事もないし、寡聞かぶんにして聞いたこともない。

「私も神じゃない。同格じゃないんだよ」

「だから……」

ほぼって言うことが……。

「そういうこと」

「それで？ 茅ヶ崎とお前がほぼ完璧だと言うことは分かった」

しかし何が言いたいかが分からない。

自分の友人をあれとかあなどる所、まだ友達ができた事が慣れないだけかと思っていたが、読み違えたか。

お前は茅ヶ崎栄のことをいつたい何者だと認識してるんだ？

「アフノーマル異常な脳の使い方をしてる私と普通ノーマルの脳を持つ栄、同じランクにいるとしたらどっちが優れているのかな？」

「お前とは比べられないだろう」

頭が良いと言っても大学レベル。  
スーパーコンピュータと比べると必要なのはハンディキャップが必要なはずだ。

そもそも比べるベクトルと規模が違う。

「中学二年生の段階では私も栄も常軌を逸してる。しかも栄は進化を止めようとはしない」

あの場ではそういったけど本来ならば大学とか言うレベルじゃないよ、と麻香は言う。

「いくら東大出の親を持ってても、大した才能もない僅かよわい十四の小娘がそこにいるのは、私が言うのもなんだけど」

麻香は一息ついて、言い切った。

「異常だよ」

それも

「ある意味、私と同じように」  
「.....」

僅かな沈黙の間を置いて、麻香は僕に質問を投げかけた。

「人間が脳細胞を使い切ると、どうなるんだっけ？」  
「えっ？」

昔、麻香の話にあった気がする。  
確か……。

有効活用といっても実は60%がその限界である。80%の使用で精神的・身体的な障害が生じ、もし100%完全に使い切れ  
ば

な!?

「そう。このままいけば早々に死ぬよ」

麻香は街頭の下で静かに、はっきりとそういった。

春が近い。

少しだけ暖かい朝の日差しの中を歩いて、そう呟いた。

高校入試まで一ヶ月をきつたある日、僕は勉強の疲れから気分転換しようとして外に散歩に出掛けた。

というのは言い訳であり、本当は今朝起きた時から勉強したくない気分だっただけだ。ここしばらく机に向かって根詰めていたので何かだるい。それに麻香と茅ヶ崎の図書館での教授からは勉強もスムーズに進んでいて（流れを掴むとはこの事かと悟った）、今日一日何もしなくても恐らくは大丈夫だろうと思う。

まあそういうわけで今日は本能の赴くまま、日中は街をブラブラすることにした。

学力が同じぐらいの友人が見れば高校は諦めたのかと思われてしまうだろう。

高校受験では大学受験とは違い、そんなに焦るほど大変ではないはずが僕らの志望校は多少人気がある優秀な進学校。

成績の下位にいる僕らは普通志望すら、させてもらえないのだが、何の因果か僕らのその志望校の申告書が何事もなく通ってしまったのだ。これではもう勉強する他ない。

奇跡的にも友人達は、所謂「やれば出来る子」だったらしく努力の成果が最近テストに反映されだしてきている。そこまで突出しているわけではないが、既に勝負できる範囲には入ったらしく、最後の仕上げに入っている。

僕は切符を買って、改札を抜ける。

.....。

これは偶然か。

それとも 必然か。

そもそも麻香が勉強をサボタージユする僕を放置して、見逃す事がおかしいのかもしれないが、それでもこれは偶発的な出来事なのか判断しかねる。

駅のホームのベンチで眠そうに座って、読書をしている女子に見覚えがあった。ついぞこの間勉強を教わった麻香の友人がそこにいた。

ふう。

見掛けたのに無視する事はない。

一応この間のお礼も兼ねて挨拶でもしておこう。

「お早う」

一言声を掛けた。

「あ、先輩じゃん。おはようございー」

茅ヶ崎が本から顔を上げ、タメ口で対応した。

挨拶ぐらい言い切ってほしい。

一応先輩なんだけどなあ……。

だが自分の事を覚えていてくれてホツとする。

正直、忘れられたらこの後はどうしようかと思った。

「つか、先輩はこんな所でなにやってんの？ 手ぶらだし、勉強は？」

「ああ、今日はサボりだ」

「知らないよ。麻香にばれた時は……」

良く分かってるな。

と、僕に向かって合掌する茅ヶ崎を見て心の中で苦笑した。

「それで？ 何処行くの？」

「茅ヶ崎は何の予定だ？」

茅ヶ崎は「勉強」と短く答えた。

「図書館か？」

「塾に決まってんじゃない」

決まってるのか・・・？

「ま、教わりに行くわけじゃないけどね」

「・・・自習室？」

「ブツブツ。はずれー」

「仮眠室」

「何で態々寝に行くの？ 正解は、実験室」

「実験室？ 最近の塾はそんな設備があるのか？」

「しょぼいけどね。ここだけの話、私のお目当ては塩酸とかの劇薬」

「おいおい、ぶっちゃけ過ぎてないか？」

発言が犯罪染みている。

「そういう危険思想はないから安心なさい」

そういつて茅ヶ崎は座っている場所を少し横にずれて僕が座れるスペースを作った。座れということなのだろう。麻香は絶対にこんな事はしないから涙が出そうになる。

「何泣きそうになってんの？ 早く座れば？」

「サンキュ。それで何の実験をする予定なんだ？」

僕は茅ヶ崎の隣に座り訊いた。

「んー。金の練成」

「錬金術をするのか!？」

鉛を金にする、あれか!？

魔術的な、あれか!？

「まあ、それは冗談だけど今は原子物理の応用によって可能なんだ」  
「えっ? できるのか?」

僕自身冗談で言っていたのに・・・。

「核分裂や核融合を応用すれば理論上は可能。だけど核分裂の方は長い年月と膨大なエネルギーが必要になって、作ったとしても生成資金が掛かるから意味無いし、核融合の方は必要な条件を発生・制御できる技術はまだ無いわけ」  
「へえ。そうなのか」

ハッキリ言ってさっぱり。

「核融合は麻香が出来そうだよな」

「確かにそうだな。……茅ヶ崎、悪いが用事思い出したから僕は帰る」



「下心が丸見えだよ、先輩……」

そう簡単に出来ない、という茅ヶ崎の言葉で僕は上げた腰を下ろした。

「それで、何の実験をするんだ？ 塩酸と水酸化ナトリウムを中和させて塩でも生成するのか？」

「中学生の実験じゃないんだからさ……」

茅ヶ崎は呆れて溜息を吐いた。

お前、中学生だろうが。

「これだから……。塩酸と言えばすぐ中和だよ」

悪いな！ それぐらいしか知らなくて！

「それで先輩は何処に行くの？」

「そうだな……。それといった予定は無いな。街には出る気でここまで来たんだけどな」

未定も未定。

決定事項は街に行くことのみである。

「自由でいいねえ。まるで受験生とは思えない」

「それだけ頭が良いってことじゃないのか？」

「妹とその友達に勉強教わった張本人がよく言うよ」

「フフフ。お前らの学力を測っていたのだよ」

「測られてたのは先輩でしょ」

「そうだったな」

測られて、計られていた。

麻香の手の上で踊っているだけと言うよりは、手の上で生活しているようなものだ。まるで世界が麻香のおままごととも言える。

特に麻香の調子がいい時は、自分のアイデンティティーを見失ってしまいそうになる。

ま、麻香は随時絶好調だが。

「あ、来たね」

駅のホームに電車が入って停まった。電車が来る事は既に放送で知らされていたので驚くまでも無い。茅ヶ崎が立ち上がった。

「先輩も乗るの？」

僕は追うように立ち上がって茅ヶ崎の隣に並ぶ。

「一緒の車両じゃ嫌なのか？」

「ハハツ。麻香はそう言うかもね」

肯定されたらこのまま膝を折って額が地面に着くところだった。茅ヶ崎と居るとひやひやさせられる。

麻香の友達だからって麻香な訳じゃないんだよなあ。

妹の友達と言う初めての体験で緊張しているのは、寧ろ僕の方がもしれない。

電車に乗り込み、ベンチの様に隣り合って腰掛けた。今日は、客が疎らで僕らが座ったシート以外にも幾つか空席がある。ただ、乗りあつた乗客全員、女性と言う事が気になった。

「・・・茅ヶ崎、これって女性専用車両じゃないよな？」

僕は恐る恐る茅ヶ崎に訊いた。

「私が居るから大丈夫」

「騙された！」

別の車両して置けばよかった！  
予想通りじゃねえか！

「冗談だよ、冗談。そんな元気にはしゃがないですよ」

落ち着いて周りを見ると若い女性の二人がこちらを横目にクスクス笑っていた。

「驚かすなよ。全力でホームに下りなきゃいけないところだったぞ」  
「窓から？」

茅ヶ崎の爆弾発言時には既にドアは閉まっており、出発しようとするところだった。

しかし、もし本当だったらやるかもしれない。

ガタン、と。

電車が僕らを乗せて発車した。

「先輩」

「なんだ？」

「時に、許嫁いいなすけって知ってる？」

「親が子供の結婚相手を決めてしまう、あれか」

「そうそう。三平方の定理も知らなかった先輩でも許嫁は知ってるんだ。もしかして文系？」

「一つ質問に答えたただけだというのに、お前は何故一言二言余計な

ことを言うっ？」

確かにあの時お前に教えてもらった定理だが。  
何か悪い事言っただかなあ……。

「先輩には許嫁っている？」

「いるわけねえだろ。親が大企業の社長って訳でもない。それにそんな政略結婚みたいな制度はとっくの昔に廃止されてるんだから」

室町時代の武家かよ。

「廃止って言うか規制ね。憲法24条辺りで当事者の合意に基づくようになっただから」

「辺りって……」

アバウトだな。

親しみ易くていいかもしれないが。

「どう思うっ？」

「どう思うって……」

アバウトだな。

漠然とし過ぎだ。  
ぼくぜん

「自分がそうだとしたらってこと」

「僕に許嫁がいたらどう感じるかということか？」

コクツと、茅ヶ崎は頷いて肯定した。

「そうだな……。相手が出来た人間なら言うことは無いと思うが、性格が悪かったら結婚はしたくないな。それ以前に相手の気持ちも分からないのに親が勝手に決めるっていうのが考えられないな」

「相手を好きになる努力はしないの？」

「最終的にはそうなると思う」

「諦めるの？」

「心底心中に決める相手がいない限り、無理に反抗はしないんじゃないかな」

「相手が顔も頭も性格も最低ランクでも？」

「そんな時は麻香にでも頼むよ」

「仲睦<sup>むつ</sup>ましいね」

「別に甘やかされてるとは思っていないけどさ。麻香はああ見えて僕が理不尽な目に遭っているときは助けてくれるんだよ。それでかな、変な諦め癖がついちやって」

「妹頼って今度は責任転嫁？ サイテー」

「かもな」

かも、じゃなくてそうなんだけどな。

責任転嫁。

ズルイ兄だよなって心底思うよ。

「あたしはね」

茅ヶ崎は少し黙って遠くを見る目で言った。

「あたしはいるんだ。許嫁」

「へえ。そういえばお前、いいところのお嬢様だっけ？」

「一応ね」

「それでそのお相手は？」

「取引相手の社長の息子」

「どんな奴なんだ？」

「知らない。けど噂で聞くには世間知らずの我侭小僧らしいよ」

「あー。何て言ったらいいかな」

ここで慰めるべきか・・・。

僕ってまったく気が利かないよなあ。

「別に気遣わなくてもいいよ。自分でも貧乏くじ引いたと思ってるから」

そう言われても対応に困ることには変わらない。  
いきなり変な質問したと思っただら。

つまりこういうことか。

「当然結婚したくないんだろ？」

「当たり前でしょ。まだ中学生の私の人生のレールが既に錆付いてると分かって進みたくないと思わないほうがおかしい。親に反対しても決定事項だって。自分の子供を道具としか思っていない」

「ま、まあまあ。落ち着けよ」

決壊寸前の茅ヶ崎を必死にあやすと、何とか落ち着いたようだ。

え、何？

こいついきなりヒステリックになるタイプ？

「あたし、両親が嫌いなんだよね。お父さんもお母さんも大嫌い。憎いって言っても過言じゃないくらい。お父さんは仕事しか頭に無いし、お母さんはひたすら私を完璧にしようとしてる」

落ち着いたと思ったのは気のせいだった。

完璧と言った時、あの夜が一瞬思い返された。

「娘を育てるって言う感覚じゃない。言わば自慢の娘を作ってる。愛情も感じないし、自分の自己満足の為だけにあたしを教育してる。許嫁の話聞いたとき、思った」



この時点で僕はこの一歳年下の中学生の話を最後まで静かに聞いておこうと決めていた。

「　　今まであたしが生きてきた時間って、誰のものだろうって」

結局、僕はあの後駅に停まった電車で救われて、壊れた水道管の様に吐き出された憎体にくていくち口の言葉に返答を待つことなく別れ、茅ヶ崎は彼女の目的地である学習塾へと向かった。

一方僕は茅ヶ崎に着いていく勇氣と氣力は到底無いので、妹がそろそろ怒るだろうなどと言って電車を乗り換え、歸路に発った。

元々は茅ヶ崎に着いて行くつもりだったのだが。

これ以上の八つ当たりは、いくら妹の友人であろうと御免しめだった。サンドバックも良い所である。

よって僕は街への往復の電車賃を茅ヶ崎の話と言ってお釣りを貰いつ溝に捨てたわけだ。

こんな事なら勉強していた方がマシだった。

それでも。

そうは思おつと。

僕は茅ヶ崎の話を聞いて何も感じなかった訳ではない。

言つまでも無く茅ヶ崎の現状に同情した。

許嫁か。

僕はこの言葉を口の中で何回か反芻はんろうする。

結婚相手が決められているって言うことは、恋愛は出来ないんだよな。

中学二年生。

これから青春だって言うのに。

いくら経っても春が来ない僕とは違い、茅ヶ崎は可愛いし、性格も良い。そう言う所では勝ち組の筈なのに、勿体無い。

高校生になれば猶の事だ。

話に聞く高校生ライフの楽しみは恋愛でもあるらしい。

当然、僕のような人間は対象外だが。

茅ヶ崎ともなれば対象内どころか、中心点だろう。

.....。

ここで僕の性格は歪んでいるとまた再確認。

年下の女子を羨ましがった所で何もならないが、僕は彼女がそれを出来ないと言う事実には、どこか優越感を覚えているのかもしれない。

\*

「勉強をサボったりするから」

開口一番、麻香は玄関（そういえば玄関のシーンがやたらと多い小説だよな。この小説って）で僕を迎えた。

「.....ああ」

そうか。

サンドバックはこれの代償か。

「本当に間が抜けてあるよね。私が兄貴を見逃すかってーの」

「返す言葉も無い」

「疲れたでしょ？」

ニヤリ、と僕を見て言った。

シテヤラレタ。

「最近、ストレス溜まってたからなあ。栄の奴、随分と吐き出したでしょ。きつと許嫁の話まで」

「お察しの通りだ」

僕は力尽きて寝転んだ。

「ドクマイドクマイ」

麻香が上のほうから僕の顔を覗いて言う。  
如何にも楽しそうだ。

「あ、そうそうお母さんが呼んでたよ」  
「んあ？ 何だろ」

僕は重い体を無理やり動かして起き上がり、母の居るであろう台所に行く。

「何か用？ お袋」

「買い物行って来て。リストそこにあるから」

「おいおい、受験生に御使い頼むんですかー？」

「麻香に今日あんた勉強休みって聞いたけど？」

っ。

あいつ、余計なことを。

「あ、ついでにお隣さんにそのミカン、お裾分けて言って渡してきて頂戴。宜しく」

休ませる気無いんですね・・・。

僕はビニールのミカンを持って玄関に戻る。

何とそこにはまだ麻香が残っていた。

丁度いい。

「お隣さんに行ってきたくないか？」

「何で？ ピンポンダッシュ？」  
「このミカンを届けるんだよ！」

何で悪戯に行かせなきゃいけないんだよ。  
どんな兄だ。

「あ、ついでにスーパーにも言っ来てくれ」

「何で？ ピンポン奪取？」

「ボールだけ万引きする気か！？」

急に卓球やりたくなつた親子が居たら気の毒だろうが。

「その突っ込みはどうかと思うよ・・・」

ま、同意である。

「はあ。分かったよ。行ってくる」

そう言つて再度玄関を出ると麻香が、

「私もついて行ってあげるよ」

と、言つて上着を着て出て来た。

「……僕は一人で行けるんだけど」

「話し相手が居ると退屈しないでしょ」

「まあ、そりゃそうだがな……」

はつきり言つて嫌なのだが。

こいつと居ると兄の威厳と言うものが（元々無かったかもしれないが）風の前の塵に同じなのである。

せめて、茅ヶ崎と同じ身長ならいいのに。

「身長が低いヒロインって結構居るじゃん。私の背が低かったらそんなのと被るでしょう？」

「え、何？ ヒロイン？」

つか僕の心を読むなつての。

「あれ知らなかったの？ 私この小説のヒロインなんだよ？ 因みに兄貴は通行人G」

「地の文語つてるのに通行人！？」

全ての場面に登場する通行人G恐るべしだな。

「安心して。通行人GのGはゴキブリのGだから」  
「人じゃないのか!？」

ゴキブリ語りの小説って想像しただけでも寒気がするな・・・。  
ああ、何か何処からともなくカサカサって聞こえてきたよ。

「大河、ルイズ、くりむ、シャナ、イカ娘、インデックス、ミナ、  
ゆの、ぽぷら。ほら、考えるだけでも小さなヒロインはこんなに居  
るよ」

「ここらこら。さも普通にキャラクター名を表記してんじゃないよ。  
せめて伏字で出せ」

「イカ くり む」

「何か美味しそうになっちゃった!」

クリームは無理矢理だけどな。  
イカスミか？

「今言ったアニメの中でもイカ娘は強敵ね」

「キャラ名な。ま、確かに最近じゃあ、イカ娘人気が凄いもんな」

え、対抗してるの？

「確かに可愛いけど人気出過ぎじゃないか？」



「絶対そうくると思ったでゲソ」

もうお約束みたいなもんだ。

特にイカが使い易い。

流行語になってもおかしくなかったと思う。

「体が小さなキャラと言えばさ。釘宮ってイメージない？」

「だから伏字使えって言ってたんだろ！」

実名をそうやたらと明言するなつての。

因みに声優さんね。

「くぎゅうううってイメージない？」

「ギリギリ大丈夫か・・・」

これだと分からない人が出てくるとは思うが・・・。

「それで？」

「それは僕も思う。そんでツンデレって言うのがテンプレートだよな」

「そのイメージはツンデレカルタのせいなんじゃない？ ほら、あの豆腐の角にぶつかって死んじゃえって奴」

「ああ。そうかもしれない」

あの独特の声は、聞いたら忘れられないし。  
釘宮病つてのもあるらしいしな。

「ツンデレといえば最近のは度の越えた暴力つてあるでしょー？  
それしたら死んじゃうだろーって言うの。 はい、そこであか  
らさまに私の顔を見ない やっぱりツンデレつてそれ位しない  
と、ツンデレつて認められないのかな？」  
「認められるとか、そういう問題じゃないと思うけどな」

というか、お前まさかツンデレキャラ目指してないだろうな・・・。  
お前は無理だぞ、麻香。  
デレを想像し難い。  
まったく思い浮かばない。

「暴力と言えばさ。発見された女性の遺体に沢山の火傷やけどや痣あざがあつ  
て、問題になる事件が時々ワイドショーか何かで話題になるでしょ  
？」  
「あるな。DVに悩まされたつて思うと、とても傷ましいよ」  
「不謹慎かもしれないけど、それって女性がドMで、そういうプレ  
イを日常的にやっていたという可能性はないかな？」  
「あるかもしれんが、不謹慎すぎるだろ！」

少しは死者をいた勞われ！

「その内、女王様プレイのオヤジが・・・」  
「止める止める」

それは流石に労われねえわ。

ミミズ腫れの遺体とか想像したくない。

ああ、ちょっと想像しちゃったよ・・・。

引くわ・・・。

全力で引く。

そうしているうちに、ふと、僕は右手のビニールに気付いた。

「あ、やば。ミカン渡すの忘れちゃったよ」

話しながら歩いたので忘れていた。

そしてここは家からは大分離れた場所。

話している間に、結構歩いた。

「ホントに馬鹿だよね。死にたいとか思わないの？」

「幸い誰かさんが鍛えたお陰で、この程度で自殺心願するよつな精<sup>メン</sup>神<sup>タル</sup>は持ち合わせてないんだよ」

「それじゃあ、その誰かさんに感謝ね」

「つか、麻香。気付いてたなら教えるよ」

「はい来ました責任転嫁！ 本日二回目」

「何故お前が一回目を知っている!？」

電車の中での会話なのに……。  
僕の体のどこかに盗聴器が仕掛けられているのかもしれない。

「壁に耳あり商事にメアリーだよ」

「壁に耳あり商事と言う会社には、メアリーさんが勤めてるって言うことだな？」

「専務よ」

「意外とキャリアウーマン!？」

メアリーは努力家だった。

いや、誰だよ。メアリー！

「とにかくここまで来ちゃったんだし、スーパーに行くか……」

ミカンは帰りに届けよう」

「万引きに間違われないように気を付けてね。私はピンポンしか狙ってないから関係ないけど」

「本当に盗む気か!？」

まだ諦めていなかったのか。

一体ピンポンの何に執着してるんだ？

「卓球って英語でテーブルテニスでしょう。と、言ってもテニスと卓球は別物じゃん。共通点はラケットで玉を打ち合うことだけだよ？ これってテニスとかいう単語に机の上でやるからってテーブル付

ければいいってことじゃないでしょうが！ 反射神経とか打ち方とか全然違うし、そもそも発祥とされる国から違うし、何で同じような名前にしちゃうわけ？ どうしてそういう所で手を抜いちゃう訳よ？ バドミントンの方がラケット似てるし、そっちからシャトルテニスとかに改名すべき。それに・・・」

「分かった。お前が何に執着してるかよく分かったから読者が読み飛ばしているだろう内容の無い話はしないでくれ。後、万引きもするな」

あれ・・・。

こいつはこんなに卓球好きだったか？  
麻香はスポーツ万能ではあるが、一種目に熱中したのは格闘技である柔道ぐらいだった気がする。

「趣味は生け花とお琴」

「真顔で嘔吐してんじゃねえよ！」

乙女か。

お前はバリバリの格闘家だろうが。  
特例黒帯野郎。

「嫌いなスポーツは球技」

「あれ！？ 卓球の球は、球技の球じゃねえの！？」

そしてジャンルが広い！  
大半のスポーツが当て嵌まっちゃうよ。

「大体球技って面倒なんだよね。まずボールに慣れないといけないからさ。やっぱり自分の身体からだだけでできるのが一番」  
「台詞だけ聞いてれば漢おしくだよな」

球技など外道！

みたいな。

「スポーツは得意だけど、好きな物が多いわけでもないよ」  
「その才能を多くの人に分け与えてやれよ」  
「好きこそ物の上手なれって言葉があるけど、反対の下手の横好きって結構残酷な言葉だよな。必死に努力しても、ばっさり切り捨てられるし、まだこれは成長過程ですよって言い訳も出来ないし」  
「その為に好きこそ物の上手なれだろ」  
「それは与えられた逃げ道だつて。若しくは、才能がある人のための言葉。これで海底かいているうけつ撈月の自分を誤魔化す人間と、現実をしっかりと見据える人とは雲泥うんでいの差があるよ」  
「厳し過ぎないか？ 確かに麻香の言う事も一理あるが、好きだから止めた方が良くいなんて、極論だと思うぞ」

効率思考の麻香から言えばそうなんだろうけど。

でも。

麻香の言うことって本当に、好きでもないのに上手になった奴が言えることだよな。

元々才能があるとか。

無理矢理押し付けられた努力の末の結果だとか。

好きな事に努力を惜しまないのは当然だと思う。

もし下手の横好きであっても、努力を止めない。

それこそ、好きこそ物の上手なれと言う存在自体が半透明のような言葉を信じてても罰は当たらないだろう？

なんて。

そんな話をしている内に、いつの間にか、スーパーに着いてしまった。

「それで何を買うの？」

「ちよつと待て」

僕は買い物リストを取り出し、項目を読んだ。

「ジャガイモ、人参、玉ねぎ、豚バラ」

「本日の夕飯が容易に想像できるね」

「今、家にはカレールウしかないって事じゃないよな・・・？」

「確か白米はあった筈だよ」

「それは最低防衛ラインだろ」

米がないとか、戦時中かよ。  
それ以前に、米が無いとカレーがポタージュスープみたいな感覚で  
食卓に出されるかもしれない。

.....

明日は大丈夫なんだろうな・・・。

「それじゃあ、兄貴。さつさと買って帰りますか」

「そうだな。まずは野菜コーナーで豚以外だ」

麻香の放り投げる買い物カゴを辛うじて受け取り（落とすならまだしも、他のお客さんに当たる所だった）、お目当ての野菜を探す。

183

「はい、春菊、チンゲン菜、縮れホウレン草」

「立派な中華料理が出来上がるじゃねえか！」

「一つも合ってねえよ。」

値段の高い野菜ばっか持って来やがって。

普通のカレーが食べたいわ。

「はい、人参、じゃがいも、玉ねぎ」

「その野菜の羅列を聞くと、どこも無くキャンプを思い出すな」

「次は肉だね」



あ、これは拾わないんだ。

話題の提示が麻香任せって言うのも難だな。

つか、興味の問題か？

僕は基本、何気なく、話の展開を一切気にすることなく話振ってるから、どうしても麻香任せになりがちなんだよね。

どんな話題であろうと話の引き出しが無数にある麻香は、対応に困らない。

「さて、肉も買ったし、麻香は何か買うものあるか？」

「買うものは無いよ」

「盗むものも無いな。それじゃあ会計に行こう」

と、まあ。

こんな風に簡単に買い物物のシーンを切り上げるのであった。

何行でスーパーの場面が終わった？

「帰りはミカンをお裾分けに行くのを忘れないようにしないとな」

「そして帰ったら勉強だね」

「帰って夕飯を食べて、7時頃か？」

「今日は九時までやるよ」

「え？ 九時でいいのか？」

随分早い時間に終わるんだな。

二時間程度じゃないか。

「何言ってるの？ 明日は日曜日だよ？」

「そんなこと。今日が土曜なのだから当然……」

あ。

「お前、まさか徹夜で翌朝まで机に向かわせる気か！？」

「そんなことしないよ。馬鹿じゃないの？」

「だ、だよな……」

このパターンは、笑顔で「そうだけど？」って言うパターンだと思  
ったが、違うようだ。

どうでもいいが、助かった。

「えっと……26時間？」

「一日超えちゃった！」

遂に、受験勉強で命の心配が必要になってきた。

来たる日がやってきた。

三月某日。

高校入試後期。

これまでやってきた（と言うか、やらされてきた）努力の成果を發揮する時が目前と迫っている。

いや。

こんな強要されたなんて言い方をしたら麻香に失礼だ。理由は何であれ、この長期間にわたって僕の成績を合格ラインまで引き上げてくれたあの妹にはもっと感謝の念を示すべきだと思い前  
言撤回する。

しかし、今日は受験当日である。

今まさに僕が激しい受験戦争に初陣を挙げようとしているのにも拘かかわらず、彼女は何をしているのか。ここまできたら「頑張つて来い」の一言ぐらいは頂戴したかったのだが、妹は僕が家を出る間には遂に起きる事が無かった。麻香の性格上、無駄と思つたことはしないので、今から可愛く僕を追いかけて応援するとは思えない。よって必然的に麻香は今もベッドの中に居ることだろう。

それでも麻香の登場を僕は、この市立壬生みぶ高校の正門前で願わずに  
は居られない。

三月と言ってもまだ冬の寒さが残っているので、朝は寒い。特に今日は　春が近いなんて章間冒頭で格好付けて呟いていた頃の自分を疑いたくなるような、受験生への天からの試練かと思うような　そんな不自然な冷え込みである。僕は荷物を増やさないために、中学校の制服の上には何も羽織っておらず、周りの送り迎えの親が居る　つまりはどんなに着込んでも、脱ぐ時には保護者様に代わりに預かってもらえる　生徒を心の中で恨み、肩を震わしていた。

そしてふと気付く。

麻香なら今朝が冷え込むことを昨日の内に知っている筈だ。そこから導かされる推論は<sup>すいろん</sup>

「……………あいつ、寒いのが嫌で起きないんだな」

何とも淡泊な妹であった。

この低温下での緊張は、精神をとても追い詰める。誰かと話そうにも、一緒に受験する友人は全員、暗記カード（カードの裏表に問題と答えを別々に書いて記憶する受験生のお供みたいなやつ）とまだ必死に睨めっこをしている。僕は既にそんなことしても意味など無いと思っているので、受験票を何度も確認しながら校内入場を待っているのである。

つかこの寒さ、本気でやばい。

せめて、マフラーでもして来れば良かった。

「よくもまあ寒そうな格好で居るよな受験生」

棒読みで、句読点など全く有りもしない台詞が、突然背後から僕に掛かった。

僕は後ろから話し掛けられるのが多いようだ。

「私はそういう根性は嫌いじゃないが……寧ろ好きな方だが、それではこれから始まる受験に支障がありそうだぞ？」

今度はしっかりとしたアクセントを効かせた言葉だったので、話し掛けてきたのが音声プログラムだと言う仮説は（元々立てていないが）、否定された。

後ろを振り向くとそこには女子高校生が居た。

僕より少し高い身長に、バランスのいい体型。豊満な胸は同世代の中では、大きいクラスであることには間違いは無い。そして読者の予想を決して裏切らない綺麗な顔立ち。麻香や茅ヶ崎とはまた違った、美女である。喋り方は男っぽいが、顔は全然そうは見えない。まあ、ここで可愛くも無い中の下みたいな人が出てきても困るんだけどね。

そんな人に一々名前とか付けていると、読んでいる方も、書いている方も誰が誰だか分からなくなっちゃうんだよね。

登場人物は極力少なくしてるから、一人一人に魅力が無いと影薄くなっていくし。

と、閑話休題。

芳容ほうようの女子生徒はそのまま着ていたジャンパーを脱ぎ、僕に差し出してきた。

「君に貸そう。と、言っても後数分だろうがな」

「あ、ありがとうございます」

僕はいつもなら断るところだが、本当に寒かったので、瞬時にお言葉に甘えることにした。

お。

この人の温もりが残っていて暖けー。

.....。

.....。

危ない危ない。

つい美女から借りた物だったので変態思考が突出してしまった。善意を無駄にしてはいけないな。

「私の温もりを感じているか？」

「本当に善意なのか!？」

うおおおい。

まさかの切り返しに初対面なのに突っ込みいれちゃったよ。

予想外だよ。

もうソフトボールの授業で、次のバッターは女子だから内野を守るうぜとか話し合ったのに、普通に右中間抜けた感覚だよ。

「私はこうやって受験生を茶化するのが中学校の頃からの夢だったのだよ」

「傍迷惑な夢実現させちゃった！」

「だから私は登校禁止のこの日に学校に居る為に、生徒会に入ったのだ」

「世も末か！」

不純過ぎるわ。

.....。

さて。

どうしたものか。

条件反射のように、次々に突っ込んでしまった。

初対面だと言うことを忘れずにいこう。

自重自重。

「君は面白い奴だな。私に名乗りたいと思わせる男など、そうそういないのだぞ。男は皆空<sup>うつ</sup>けばかりだからな。では取り敢えず名乗っておこう。私の名前は鬼怒川<sup>きぬかわ</sup>夜見世<sup>よみせ</sup>。今年二年次に進級する予定だ。君がこの高校に受かったときが楽しみだよ」

僕は楽しみでも何でもないのだが。

入学以前から変な人に絡まれてしまった。

唯一の救いは鬼怒川先輩が美人だという事だ。

それにしても。

主人公体質というのは体験すると、逆に恐ろしく思えてくる。

人生まだ十数年しか生きて来てないが、女子とはまったく関わりを持たなかったのに、この数ヶ月で早くも二人目の美女。

このペースでいけば、清纯系眼鏡ドジっ子とツンデレ幼馴染が登場して、ハーレム展開になるのは必至だろう。

清纯系眼鏡ドジっ子というのはこの場合、僕と委員会が一緒になつてしまい、二人だけの作業となってしまう。しかし真面目に奮闘する少女はドジばかりする少女で　　みたいな展開だ。

対してツンデレ幼馴染と言うのは、当然金髪ツインテールで、幼少期の頃に県外に引っ越してしまっただが、高校生になって都合良く戻って来て転校生として扱われるのだが、僕は本人から直接幼馴染だったことを告げられ始めて気付く　　の様な展開になる。

あれ、聞いた事がある……。

しかし。

別に嬉しくない。

ハーレム展開といえは聞こえは良いが、最終的に一人に絞らなくて



はいけない僕の立場は、相当大変なものだろう。

そう簡単にいかないのが、人生というものだろうか。

「君の名前は言わなくていいぞ。私は気に入った人にはあだ名を付けるのだ」

「何かもう凄いキャラ設定だ！」

そうきたか！

遂に僕の名前が公開されるのかと冷や冷やしていたが、そうきたか！

「そうだな……。『アフロ』というのはどうだ？」

「別に僕はアフロではありませんよ！？」

「何を言う。君のアフロが無ければ、私は話しかけなかったぞ」

「僕のこの襟足さえも極限まで切り込んだ短髪を見て、どうしたらアフロに見えるんですか！？」

「中には色々な物が仕舞えそうだな」

「よく知りませんが、そんな便利なものじゃないと思いますよ……」

そんな発言、読者がビックリするでしょうが。

え？ 今までずっとアフロだったの？ って思うでしょうが。

そもそもアフロで受験に来るとか、受かる気無いでしょ。

「それでは『スライムベス』」

「何故！？ 何故ここでドラクエネタ！？」

しかも普通のスライムではなく、マイナーな存在であるスライムベス。

赤くなっただけなのにメラを覚えてるんだよな。  
ノーマルより少し強いし。

「私はFFよりもDQ派だ」

「へえ。鬼怒川先輩はゲームやるんですか」

「やるとも。ゲームは嫌いじゃない。寧ろ好きな方だ。近くにあるゲームセンターの太鼓の達人のランキングは、殆ど私が占拠している」

鬼怒川先輩はそう胸を張る。

ああ。

そういえば麻香とゲーセンに行った時に、殆どの曲に『おにかわ』  
と言う名前が登録されていた。

鬼怒川の鬼と川を取って、『おにかわ』か。

実はその後全て麻香が記録を塗り替えたのだが、それは知らない様なので黙っておこう。

「新作ゲームは買った週に攻略しないと気が済まない」

「分かります。その気持ち」

「おお、共感してくれるか」

「はい。僕も購入した日なんかは寝ないでしますよ」

「それで次の日の授業は寝ちゃうんだよね」

「確かに」

「それでも懲りずにまた夜更かししちゃうんだよね」

「その通りです」

「気付いたら不眠不休で三日も起き続けていたと言つものもあるよね」

「それは無いです」

何を言っているのか。

そこに通じ合うものはない。

超人か馬鹿か、紙一重だ。

そういう人に限って直ぐに飽きてやらなくなるんだよね。勿体無い。

「ところで君に耳寄りな情報だ」

「………。何でしょうか？」

期待するどころか、悪い気しakashないのだが。  
そもそも僕の何を持って耳寄りなのだろうか。

「ハンバーガーに挟まれているピクルス並みに重要な情報だ」

「うわっそれ、滅茶苦茶大事じゃないですか！」

ハンバーガーにとってのピクルスは、非常に重要なアクセントだ。  
たまに、ピクルスを抜いて食べる人が見受けられるが、僕にとっては考えられない。邪道である。

それ程大事と言う鬼怒川先輩の情報は、どんなものなのだろうか。

「試験内容を知っている」

「この学校大丈夫か!？」

今更だが、入るのが嫌になってきた。

何でこの高校生が、極秘である高校受験の問題を知ってるんだよ。

「ソースは教師。さつきこっそり教えてくれた」

「教師までも腐ってる!？」

しかも暴露しちゃっていいのかよ。

「大丈夫さ。私は君にこの高校を受かってほしいのだからな」

「完全な私事ですね」

「実はな……」

ここで鬼怒川先輩は、声を潜め、トーンを低くした。  
嫌でも身構えてしまう。

「英語のテストの第一問はリスニング問題だ」

「万人周知ばんにんしゆうちの事実だよ!」

ちゃんと対策してきましたよ。  
少し期待した僕が馬鹿だった。  
大体、前振りが簡素だと思っただよ。

「そうそう。あだ名の話をしてたんじゃなかったか？ 今、とても良い名前を思いついたのだが」

「ああ、そういえば」

そうでしたね……。

鬼怒川先輩の顔を見る限り、また却下しないといけないことが容易に想像できる。

「君のつつこみに敬意を表して。『つつこみん』」

「うわあ！ 想像以上に酷だあ！」

それはもう、ネーミングセンスがどうこうという次元を超えちゃってます。

敬意の欠片もない。

「全く君は文句が多いな。あの名作ゲームから引用すれば駄目だと言っし、私直々に思いついたのを言っつて見ても駄目だと言っ。そんなにニックネームを付けられるのが嫌か？」

「嫌な訳ではないですが、名作ゲームも鬼怒川先輩が思いついた物も、人を呼ぶには余りにも恥ずかしいと思います。『パパス』の方

がまだマシです」

そして何気に『あだ名』の呼称を変えるな。

「分かったよ。そんなに私のセンスが嫌いなら、君にはニックネームを付けない」

「えっ、それじゃあ」

初、主人公自己紹介？

「君の事は『君』と呼ぶ」

「へ？」

「廊下から教室の君を訪ねる時も『君』だし、服装を大声で注意する時も『君』。放送で君を呼び出す時さえも、『君』だ」

「厄介なのが来た！」

「『一年四組の君。至急生徒会室まで来るようお願いします』」

「一年四組の誰もが生徒会室に集合だよ！」

「この呼び出しに慣れる為に毎日呼び出す」

「過酷な高校生活の一端が見えてきた！」

受かっても地獄、受からなくても地獄じゃん！

何でそんな無秩序無条件に呼び出されるの？

どう生きていけばいいの？ 僕は。

その時、心底落ち込む僕を無視し、一体の空気が動いた。

「おっと、会場したようだぞ」

「では、そろそろ僕も友人と……もう行ったようですね」

「ああ、君と一緒に居た子達なら、割と前に単語帳から目を離すことなく、入り口のほうに向かっていったぞ」

「そうですか……」

僕が一生懸命突っ込んでいたにも関わらず、置いてきぼりかよ。薄情者達め……。

「それでは私も持ち場に戻るとしよう。君、全力で頑張れよ。武運長久を祈っている」

「持ち場があつたんですね……」

そういえばこの人は夢実現の為に、ここに来てるのだった。

そして、鬼怒川先輩は「では」と言つて校舎に入つて行つた。

僕はそれを見送り、受験者用の昇降口に向かう。

頑張ることには頑張るが、鬼怒川先輩に会つた時点で武運は絶たれている。

何処まで奮闘出来るかは結局、自分次第。

「頑張るか」

と。

そう呟いた瞬間。

面倒なことに気がついた。

「上着、返してない……………」

はあ…………。

麻香が来ない理由もいろいろあるらしい。



もし僕が落ちると言う展開を想像していた方がいらっしやれば、「すみません」と謝っておこう。

そういう落ちも有りっちゃありだが、僕にとっても作者にとっても、そういう後々收拾がつかなくなりそうになる展開は、ある程度セーブしなくては、ストーリーが進まない。

もし僕がこの高校に落ちたとして、明記していなかったが滑り止めで幾分下の私立高校を受験していました、と言う事になっていたら物語はある意味、伸展したかもしれない。

しかし。

しかしである。

今作から読み始めた人はともかく、よくよく考えてみなくとも、あの僕が受けた高校で新キャラクターが登場していることに読者の皆さんは直ぐに気付いているだろう。

あれだけ登場人物を絞りたいと饒舌じょうぜつに語っていた作者が、これっきりしか会えなくなるようなシチュエーションにするわけが無いのである。

敢えて違う高校にすることで面白い関係になるかもしれないが、僕は一応町に住んでいるのでそう頻繁に出会うわけは無い。

既に一人、違う学校の女子中学生がいるし。

これ以上、運命的な遭遇を増やすのも気が引ける。よって同じ学校にするのが無難なのだ。

したがって愉快な予想してくださった皆様には、期待を裏切ってしまい申し訳ないです、と謝るしかないのである。

時計の針は午後1時を指している。

僕は一昨日と同じく、壬生高校の正門前にいた。

もつとも、今日は一人ではない。

なんと連れが居る。

態々（わざわざ）僕の入試の結果発表に一緒に来てくれたのは、妹・麻香とその友人・茅ヶ崎である。

時間も丁度、昼食を食べ終わったと言う頃だったので（近くのファミレスで奢らされた）、一昨日のような寒さは感じられない。

財布は、大寒波に襲われているが。

ともかく僕らは高校の昇降口前で、同じくこの高校を受験した生徒達と共に、合格者発表を今か今かと待っているところだ。

「先輩まだー？ さっき食った豚カツで、立ってるのだからいんどど」

既に数十分待たされて、寄り掛かって体重を麻香に任せた茅ヶ崎が口を尖らせた。

「奢るからと言ってがつつり食うからだ。そもそもお前、お金持ってるだろうが。何で控えめにポテトフライとかを食べないで、豚カツを注文してんだよ。僕の財布を見る！ こんなに薄く・・・」

「豚カツは厚かったけどね」

「喧しいわ！ つーか何でお前はお前でステーキセット頼んでんだ

よ。そこは大人しく季節の七種類キノコクリームパスタにしとけよ」  
「肉じゃないと食べた気がしないんだよね」  
「男か！」

紛れもない男か、お前は！

メニューの一番裏にあるデザートコーナーで苺パフェを迷わず注文した女子がよく言うわ！

そして、おかげ様で僕の本日の昼食はサラダバーになってしまった。トマトは沢山食べられないし、キュウリは妹に鈴虫と呼ばれた所から食べられなくなり、結局レタスで空腹を満たした。

一日でレタスをあれだけ食べたのは初めてだ。

例えると、ダイエット中のOLのキャベツの千切り。

ただ、食べまくった。

ドレッシングを一通り試して、遂には二周しちゃったよ。

ドレッシングでは、個人的にはごまダレが優勝。

麻香がくれた（押し付けた）パセリにも合う。

もしかしたらハマってしまったかもしれない。

「あたし達のおかげで新しい味覚の発見？」

「自分の手柄にしようとするな」

今日食べなくても、あの美味しさは遠からず出会っていただろうしな。

まったく図々しい。

「ごまダレ、私は家で使ってるけど」

「何！？ 何で教えてくれなかったんだ！？」

つか家にあつたの！？

「兄貴が『梅ジソが最強だ』なんて言ってたから」  
「うっ」

「渋いのが好きなんだね」

「まあ、そんな時代もあったさ・・・」

そういえばこの前までそう思っていた。

だが。

しかし。

今現在から僕はごまダレ派となった。

一目惚れならぬ、一味惚れ。

「そんな事より」

麻香は空気を切り替えて言った。

「もし落ちたらどうする？」

「受験生にとつての禁止ワードを発表直前によく言えるな」

「今更何言っても同じだよ。それよりペナルティ考えるほうが楽しいじゃん」

「もう妹が恐ろしくて堪んねえ！」

DSというか、性悪だ。

この性悪女が妹だという事実が、ひたすら僕の頭を悩ませる……。

「まずは三足歩行を禁止してみようか」

「人としての最低ラインじゃね!？」

流石と言うべきか、麻香の目の付け所は相変わらず普通じゃない……  
退化しろというのか……??

「せめて三足歩行にしてあげようよ」

「フオローになってないぞ、茅ヶ崎！」

寧ろ難易度上がってる。

何だ、三足歩行って。

「それから私の部屋の家具になってもらおう」

「……どういことだ？」

「屈んでくれれば椅子になるでしょ？」

「……僕の人権がどんどん侵害されていくのが、はっきりと分かるな」

「え？ 人権？」

「何、その反応！？ 僕には人権がないとでも言うのか！？」

「……」

「今度は無反応！？」

遊ばれてる。

すっげえ遊ばれてる。

昨日中学を卒業した兄が、妹に良い様に弄もてあそばれてる光景がそこにはあった。

「それはともかくゴミ箱としてなら何とか……」

「僕の家具化計画が継続してる！？」

そしてさっきよりも扱いが劣化してる気がする。

「だって、兄に座るなんて嫌だし……」

「部屋の隅でゴミを待つ兄も相当嫌だと思っぞ」

想像しただけでも悪寒がする。

「そっだよ、麻香。先輩だって頑張るんだから自分も我慢しなきゃ」

「だからフォローになってないって言ってるんだろ！ お前の発言の度に状況が少しずつ悪化してるんだよ！」

「兄貴」

「ん？」

「私、頑張るよ」

「何をだ！？ 頑張ったり、我慢するのは寧ろ僕の方だろ！？」

その努力ほど無駄なものはない。

世の中には報われなくてもいい努力もある。

「他のペナルティはどうしようか」

「四足歩行と人間家具化では飽き足らず！？」

「兄貴の秘蔵本を全部燃やす」

「えげつねえ！」

今までで一番リアルで地味だが、本当に僕の嫌がることを的確に突いてくる。

男の宝物をそう軽々しく燃やすだと……………。

「……………つか、俺の工口本はこの前全滅したじゃねえか！」

「えっ、どういうこと？ 先輩」

「数ヶ月前に図書館に行った日だよ」

茅ヶ崎と初めて会った日の事である。

「・・・ああ。・・・間に合わなかったんだ・・・」

そう。

麻香は嫌がらせを本当にやっていて、僕の机の上には僕の所持する全てのエロ本が、綺麗に整頓されて並べてあったらしい。らしいと言っているのは、僕が帰った頃にはビニール紐で結ばれ、次のゴミの日の為に物置に仕舞われていたからだ。

「流石に妹本は買い足されてなかったけど、全て没収されたよ。何故か母親が激怒しててな。今思えばどうしてあんなに怒ってたんだろ。いつもは見つけても黙認してくれてたんだけど・・・」

「私買った『近親相姦・母』のせいじゃない？」

「麻香あああああああああああああああ」

僕のコレクションに止めを刺したのはお前か！

そんな題名のエロ本を息子が持っていたら、そりゃ怒るだろ。

「まあまあ、減るもんじゃあるまいし」

「減ってたんだよ！ 僕の本棚の体積と、息子の立場と幸せな時間が

！」

「高校入れたら彼女作りなよ」

「高校入ったら彼女作れよ」

「同情するな！」



しかも二人同時に！

と、まあ。

例に従って無駄な会話を終え、本題に戻る。

「そろそろ発表されるんじゃないか」

「うん。校舎内の教師たちもバタバタしてるし、あと直ぐで発表だ  
と思うよ」

麻香が言い終えるのが早いか遅いか、中から白い紙で隠されたボードを、一人の中年の教師が押して来た。きつとボードにはもう一枚内側に紙が貼ってあり、合格者番号が記載されているのだろう。

「先輩の受験番号はいくつですか？」

確認するため、茅ヶ崎が訊<sup>き</sup>いてきた。  
えっと、鞆の中に受験票が……。

「072だよ」

「……」。こういう場面でもやってくれるね、先輩。ある意味尊敬する」

「違えよ。適当な情報を流すな、麻香。お前ら発想が中学生か」  
「中学生だもん」

「……そうだったな……」

僕は茅ヶ崎の当然の一言に何も言い返せず、黙って受験票を見せた。

「何々？ 069？」

「.....」

「.....」

そうして。

そうして僕らは合格者発表される瞬間まで、黙って顔を見合わせるのだった。

\*

その後、僕は人込みの中、シックスナインを連呼する妹と後輩の口を塞ぎながら、無事自分の番号を見つけ事が出来たのだった。狙ったように仕組まれた番号。

僕はこの呪われた運命を恨まずにはいられない。

そうは言っても合格できた事は呪われていない事だろう。

.....。

そうだよな？

運命といえ、発表前に麻香とペナルティの話はあったが、そうは言っても、僕は落ちる気は更々無かった。

あの麻香の家庭教師で、受からない高校などないだろうと確信していたからだ。こういうことを運命と呼ばずして何になるか。

それにいざとなれば麻香に受験問題を全部予測（予知）してもらい、それを暗記してしまえば簡単に受かる。もうこうなっては車に轢かれて記憶が飛ばない限り、安全コースは確定である。

この方法を実行するには暗記するという事が必須条件だが、暗記なんてものは誰にでも出来る。

誰もが出来るし、誰もが行える。

言わば常套手段だ。じょうたいしゅだん

時に記憶する事が出来ないと嘆く人もいるが、そういう人に限って他の事をひたすら暗記している。

あのアイテムは何処のダンジョンで手に入るか。

あのキャラクターはどんな台詞を喋ったか。

あのアーティストのスケジュールとか。

自分の好きな事なら何の不具合も生じずに覚える事ができる。いつその事、それと勉強を一緒にすれば計り知れない知力を手に入れられると思う。

例えば、ダンジョン『弥生』の森で『漢委奴国王の金印』がドロップしたり、『徳川綱吉』の必殺技で『生類憐みの令』（少し見てみたい）とか。

学習アニメでも、萌えキャラがいっぱい出て来て、声優陣が豪華だ

つたら、誰もが視聴すると思う。しつこい様だが釘宮さんとか。

話はずれるが、そもそもポケモン151匹言えた所で何の役に立つのか。

今では600を超えるらしいが、全てのポケモンを歴史上の偉人の名前にすれば少なくとも600の人の名前は暗記できるんじゃないか。

今では子供の教育への関心を惹こうとして、勉強本など出ているが、本なんか一部の人が読まない。

勉強ゲームなんてものを子供が好き好んでプレイするわけが無い。もしやっても一時だけだ。

大切なのはさり気なさ。

ポケモンをやってる人は必ず『タウリン』という単語を覚えている事だろう。ゲーム内では攻撃力を上げるといふ単純なアイテムだが、実際はアミノ酸の一つでイカ・タコなどの肉エキスに多量に含まれる物質だ。

この『タウリン』を、現実ではどんな物質なのか理解している人は、プレイヤーのごく一部だろう。

しかし、『タウリン』はポケモンをやった事がある人間ならば誰もが知りうる物質なのだ。

このさり気なさ。

このさり気なさこそが、知識を増やす事で重要な状況なのである。

もう一つ例を出そう。

『オリハルコン』という単語を知っているだろうか。

それはどこへ知り得たか。

知っている人の一部はドラクエで仕入れた知識ではないかと僕は思う。

ゲームでは錬金素材だったり、全身がそれで出来たモンスターが登場したりするのだが、実際は古代ギリシャ・ローマ世界の文献に登場する合金である。想像上の都市アトランティスに存在したと呼ばれる幻の金属だ。

概要は詳しくは知りえないが、言葉なら知っている。それは無知に生きるよりも遥かに重要な事だ。

『オリハルコン』の存在はさり気ないこともないが、それでも知識として得ていることに違いない。

これが暗記なのかどうか微妙なところだが、人間の記憶は必要ないと判断されれば消えてしまうという点から、ルソーの社会契約論は不可解な物質『タウリン』よりも不要な情報と看做みなされているということだ。

これがどうだろう。

もし『社会契約論』というアイテムがあつて、『ルソー』というモンスターが所持していたら、人は忘れる事が出来ないのではないか・・・？

結局、暗記は簡単と言いたいのか、ゲームは偉大と言いたいのか、それは敢えて底深い闇に葬り去るとしようじゃないか。

閑話休題。

合格して気の良い僕は、脈絡の無いようでも意味ありげなことを語ってしまうのであった。

茅ヶ崎栄が交通事故にあつたと言う知らせを聞いたのは、僕が壬生高校に見事合格し、カツ井と言うタイミングがおかしい夕食を食べた日の翌朝、正確に言えば午前10時頃、まだ僕が布団の中でゆっくりと情眼を貪っていて、それを麻香にくさくさ蹴くり対する部屋のドアの一撃で起こされる直後だった。

そんな起こし方ばかりするから部屋のドアは凹むのだ。

ともかく僕は部屋着を素早く着替えて、麻香がドアを開ける勢いにも負けないように力任せにドアを蹴破り、部屋を飛び出た。

茅ヶ崎は麻香の友人と言つても、既に僕の友達でもある。

僕ははつきり言つて焦つていた。

それは僕の友人が大変な事になつていふと言つ事よりも、どちらかというと妹の友人が大変な事になつていふと言つことに、である。あつることか、麻香の方を心配していた。

友人を失うと言つ事はどういふことなのか、僕はまだ良く知らないが、相当のショックである事は推測できる。

そのストレスに、妹はどう対処するだろう。

それを考えると決して冷静にはなれなかった。

もし僕はこの時点で、冷静になつて今生じている事象の矛盾に気付いても結末は変わらないだろうが、それでも後悔してしまう。

本当に気付くべきは茅ヶ崎と始めてあつた時点だったとしても。

僕は階段を落ちるように降り、玄関を出て、自分の自転車に飛び乗った。荷台に麻香が（あくまで上品に）飛び乗る。こういう緊急事態には、二人乗りも目を瞑らつむなくてはならない。

麻香は走ったほうが速いと思うのだが、それも一々議論している暇など無いようだ。

一刻を争う。

麻香は身長割には重くないので、二人分の体重をそれ程感じずに漕ぐ事ができる。

僕は三つしかないギアを最大に設定し、全力で漕ぎ始めた。

ここから茅ヶ崎が搬送された病院まで十分。

考えられる限りの最短ルートを頭の中で構成すると、後ろから声が掛かった。

「その道は今日水道管の工事してるから通れないよ。私が言う道を通って」

麻香の言うことだ。拒む理由はない。

「分かった」

僕は足をフル回転させる。

ここ最近で筋力が落ちた為、自転車の最大ギアでの二人乗りはやっぱり多少は力が必要だった。他人が見れば少し引くくらいの形相だろう。

二人乗りをしながら全力で漕ぐ男。

何かあったのではないかと　　実際何かあったが　　思わせるような、シユールな絵である。

麻香の案内により、信号には一度も引つかからない。全て青のGOサインだ。本来なら爽快だが、残念ながら事態は悪かった。

いつかの話で青は安心の保護色。

今日ばかりは、鎮静効果も薄れていた。

\*

僕らは麻香のおかげで途中、時間を一切ロスすることなく、病院に辿り付く事が出来た。

僕は自転車置き場に殆ど放り投げるように自転車を止め、麻香と共に茅ヶ崎の病室に急ぐ。

受付の看護師の方に聞く限り、どうやら手術を必要とする怪我ではないようだ。話では徐行していたトラックのミラーに頭が当たったらしい。つまりはドラマ的な重大な交通事故ではないということだ。

僕は少し落ち着いた。

少なくとも命に別状は無さそうだ。

救急車で運ばれたのも、頭を打って気絶しただけらしい。ひとまずはホッとする事ができる。

受付で教えてもらった三階まで上り、病室の『茅ヶ崎 栄』の名前を確認し、麻香は扉を開けた。

茅ヶ崎は一人でベッドの上で座っていた。



しかし。

彼女は、いつもの茅ヶ崎栄ではなかった。

目は半開きで、瞳には光が灯ってなく、何処かしら虚ろで、それはもう生気を感じなかった。目の下には濃い隈があり、女子中学生特有の肌のハリは完全に失われている。体に力が入っているようには見えず、上半身は枕をクッションにして壁に寄り掛かっている。まるで人形だ。

「栄」

麻香が呼び掛けると、彼女は視線だけをこちらに向けた。それは見据えるというより、さながら、音に反応する機会センサーのようだ。

茅ヶ崎の視線は麻香と僕とを交互に行き来して、最終的に呼び掛けた本人である事を判断したのか、麻香の方に落ち着いた。

そして。

意外にも彼女は言葉を発した。

「さかえというのは何ですか？」  
「っ！？」

僕は驚愕を禁じ得なかった。

こいつは今、何と？

「何って、貴女の名前じゃない」

「私の名前ですか・・・？ 先程も看護師の方や医師の方が、私をそう呼んでいらしたので、もしかしたら名前ではないかと思っていましたが・・・。そうですか。私の名前は栄と言うのですか。では、名字は何か、ご存知ですか？」

「茅ヶ崎だよ。貴女の名前は茅ヶ崎栄」

麻香の恐ろしいほど冷静な対応と、本来使うはずの無い丁寧な敬語の茅ヶ崎との会話を、僕はまるで他人事のように聞いていた。あたかも傍観者のように、僕はそこに存在した気がしなかった。

「あなた方はどなた様でしょうか」

「誰だと思っ？」

「最初に話しかけて頂いた医療関係者以外の方だと判断し、考察するに両親でしょうか」

「栄は記憶と一緒に知力も落としたの？」

「・・・やはり違いましたか。それでは第二候補の姉と言う結論に  
」

「友達よ」

いい加減面倒だ、と言いたげに麻香は正解を口にした。

「そして私は貴女と同学年よ」

「ではそちらの男性の方は後輩」

「一学年先輩だよ」

お前より大きくてどうしてその結論に達する？  
本当に頭が悪くなったんじゃないのか？

「失礼しました」

茅ヶ崎は頭を下げる。

何！？

この後輩が僕に謝罪するだ！？

ここが院内じゃなかったら写メるところだぜ。

「兄貴、ちよつと」

「ん？ お、おい。麻香？」

麻香は僕の腕を引っ張って、病室を出た。

「今の栄がどんな病気が、分かる？」

「ああ。なんとなく」

素人の僕でも茅ヶ崎の病名は分かった。

「記憶消失　　だろ？」

「そう。概念は健忘の中でも記憶喪失。あの症状で言うと親の顔も私たちも忘れてるから、ぜんせいかつしけんぼう全生活史健忘と見て間違いないね」

「全生活・・・？」

「漫画や小説で言う『ココハドコ？ワタシハダレ？』ってやつだよ。発症以前の記憶が全部吹き飛んじやうの」

「成る程。発症者を外人にする必要性が分からないが分かりやすい例えをありがとう」

そしてそのカタカナ発音が妙にうざい。

「愚兄でも分かる例だよ」

「どさくさに紛れて悪口を言ったな！」

愚かとか言つなや！

さっきまでの緊張感たつぷりの進行が、遂にいつものギャグパートだよ！

「でもさ、麻香」

「何？」

「治るんだろ？　小説の記憶喪失なんて大体は完治の確率が高いんだから」

それにお前は麻香なんだから。

「治るよ、当然。全生活史健忘は元々治る病気だからね。原因が外部からの身体的干渉なら尚更」

しかし、麻香は続けた。

「普通なら、ね」

「は？」

普通、なら？

僕は麻香の最後の一言に『？（ぎもん）』を表す。

「そう、普通なら。普通は頭の中に記憶が残ってるもの」

麻香はそう言ってそこにある椅子に座った。横にスペースを残していると言う事は、僕に座れと促しているのだろう。駅のことを思い出し、僕は少し罪悪感を感じるが、続きを求めなるべく隣に座った。

「いい？ 記憶喪失とか、物忘れっていうのは二つに分けられるの。過去の記憶が思い出せなくなるタイプと記憶が蓄積されなくなる夕

イプ。栄はどつちだと思う?」

「前者だろう?」

「そう。過去を忘れてしまったパターン。でもそもそも忘れるって言うのは記憶が消えるって事じゃないんだよ」

「……」

「忘れるって言うのはね。記憶を探し出す糸口が見つからない状態を言うの」

「糸口……」

僕は麻香の言葉を復唱する。

何か話を理解するためには、キーワードを拾う事が重要だ。

「縁日の出店で紐を引いてその先に付いてる賞品が貰えるって言うお店知ってる?」

「ああ、知ってる。でもそれが何?」

「忘れるって言うのはその賞品を繋ぐ紐が無い状態を言うんだよ。賞品を記憶とすると紐はその記憶を呼び起こすための鍵。それが糸口だよ」

「つまり記憶喪失者って言うのは記憶が賞品として存在するけどそれを引き出すことが出来ないって事だな」

「そういうこと」

珍しく肯定された。

「成る程。分かりやすい例えをありがとう」

「ゴミでも分かる例えだよ」

「はつきりと悪口を言ったな！」

最早工夫すらしな直球だな。

「……………それで、茅ヶ崎はどうなんだ？」

「栄は人為的にその記憶を修正不可能に裁断されてるの。箱の中の賞品は、ミキサーでぐちゃぐちゃにしてある」

「っていうことは……………」

「そうだよ。栄の記憶が戻る事は無い」

「……………そんな」

嘘だろ……………。

茅ヶ崎の記憶が戻らないなんて……………。  
僕たちのことは忘れたなんて……………。

……………ん？

待てよ。

「麻香。今『人為的に』って言ったよな」

「言ったよ」

「茅ヶ崎の記憶を消すなんて、どこの誰がやったんだ？」

ぶつかったトラックの所為か？

そういうことなら、麻香こんな所で僕に説明なんてしてないで

「無理だよ。そんなこと。記憶を粉々に粉碎するって言う事はそう簡単に来る事じゃないんだよ。記憶は交通事故みたいに一瞬で壊れるほど柔<sup>やわ</sup>じゃない。準備期間が少なくても一日は必要だね」  
「それじゃあ一体誰が・・・？」  
「私だよ」

え？

最初は聞き違いかと思った。

しかし、それを空耳と勘違いする時間も一瞬で、直ぐに麻香は同じ台詞を吐いた。

223

「私だよ。茅ヶ崎栄の記憶を消去<sup>デリート</sup>したのは」  
「お、お前。吐いて良い嘘と駄目な」

僕の言葉は麻香の僕を見る目で最後まで続かなかつた。  
麻香は無言を続ける。  
不敵な笑みと共に。

「で、でも麻香。一日の準備期間が必要なんだろう？そんな時間お前が何かやっていたら流石に茅ヶ崎も気付くだろう・・・？」



麻香は遂に沈黙を破った。

「準備する方法なんて様々だよ。今回は私の言葉に乗せた」

「言葉、だと・・・？」

まるで窮地に陥った敵キャラのような台詞を口にする僕がそこに居た。

「言葉って言うのは単純だけど、効果は絶大なんだよ。言うでしょ、ことだま言霊とか。それで、その日は一日中栄と喋って基礎を固めてた」

「一日中栄と喋って・・・」

僕はその様な状況シーンを知っている。

「そう。兄貴が休館日である図書館で受験勉強をしているとき、私は栄の記憶破壊の準備をしていたんだよ」

あの時・・・！

麻香と茅ヶ崎が他愛の無い会話を繰り返していた、あの時！

「兄貴はあの時の私の話を16進法に改変して、それに加えて3回暗号化して、記憶を消す言葉コードに変換できる？」

「・・・！」

僕の中には、体験した事の無い感情が溢れていた。  
これを激情と呼ぶのだろう。

「麻香！ お前は親友の記憶を！」  
「親友？ はっ！ 笑わせないで！」

立ち上がって声を上げた僕に対して、麻香は座りながら冷淡に僕を一蹴した。

「毎回毎回私に闘争心を抱いて、内心で私のことを化け物さげすつて蔑んできたあいつが親友？ 私の才能に嫉妬して、私の弱点を必至で探していたあいつが親友？ 冗談ならもつと面白い冗談をいうんだねもてないよ？」

麻香は冷静に、視線を僕に向けずに言う。

「ふざけないで。最初から『化け物』を見る目で、私に興味本位で近付いてきた時から、私はあいつのことを友達だなんて思ったことはない」

麻香ははっきりと切り捨てた。

四捨五入の四以下よりもばっさり切り捨てた。

「麻香………」

確かにそうだった。

最初から何もかもが矛盾していた。

麻香という妹の存在がある時点で、その友人が交通事故に合うこと事態がおかしい。

人類よりも千歩先を歩く麻香が、茅ヶ崎栄の事故を予測していないわけが無い。

事故なんてものが起こるはずが無いのだ。

僕は椅子に崩れるように腰を下ろした。

「後悔なんてしてないんだよな」

「してると思うの?」

妹はもう怒気を発さず、普通の口調だ。

「思わない」

「………」

「………」

麻香は顔を僕に向ける。

「どうする？ 怒る？」

「怒らねえよ。お前がやったことなんだろ。つまりそれは何か理由があるって事なんだろが。僕は妹を信じてるからな。僕の妹は無駄な事はしない」

今度は僕が視線を外した。

「……そりゃどうも」

よいしょ、と麻香は立ち上がった。

「ちよつと今回の最終ラウンド行って来るわ。兄貴も行くでしょ？」

きつと面倒臭い兄妹だと思っているだろう。

僕はこいつの手の上で踊っているのだろう。

面倒臭い兄だと思ってもらっても結構。

どうせ馬鹿なら踊らないと損だ。

「当たり前だ」

そして僕も腰を上げた。

病室に戻って直ぐに茅ヶ崎の両親が慌てる様子も無く、入ってきた。父親と思しき男は黒いスーツを着ていて、いかにも仕事をしているといった雰囲気、その後ろを歩く母親と思しき女は白いスーツを着ていて父親同様、仕事

に命を燃やすといった雰囲気。

父親は開口一番とんでもない事を言い出した。

「親に面倒をかけるな。栄、お前の所為で午後の会議を延期しなくてはならなくなった」

「というと、あなたが私のお父さんですか？」

茅ヶ崎の切り替えしには流石に両親も難色を示した。

「そして、あなたがお母さん」

茅ヶ崎は構わず、母親に話しかける。

「栄、私たちを忘れたのか？」

頭の回転が速いのか、早急に事態を收拾し、父親は言った。

「はい。今日より昔のことが思い出せません」

それを聞いて母親の方が直ぐに口を出した。

「栄、ヒルベルトの零点定理を証明してみなさい」

「・・・？ 何ですか、それは」

「栄には」

ここで初めて麻香が口を開いた。

二人同時に麻香を見つめる。

「栄には中学二年終了程度の知識しか有りません」

母親は後ろに倒れた。父親が間一髪それを受け止める。目を強張らせ、呪文のように呟いた。

「そんな馬鹿な・・・。私の栄は天才で・・・」

「栄はあなた方の人形じゃないですよ」

「!?!」

「私の話が理解できますか？ 母国語である日本語で話しているんだから趣旨ぐらいは理解してください」

「・・・あなたは一体なんなんだ？」

「あなた方が娘に調査をさせた天才ですよ」

「な・・・!？」

「私は栄の自由を要求しますよ。ご安心を。二つだけです。過剰な家庭学習と許嫁」

「あなたには関係のないことだろう」

「あるんです。あなた方は」

麻香はあくまで東大出の二人を見下して言う。

「私の友人を人として扱わなかった」

この言葉には母親が強く反発した。

「自分の娘の教育法を他人にとやかく言われる筋合いはないです！」  
「いえ」

麻香は、その場を永久凍土に閉じ込めた。

「貴女の娘ではありません。私の友人です。間違えないで頂きたい」

父親はどうしようもないと言う顔で首を振り、母親を抱き起こした。



「まったくさつきから」  
「妄言を言っているのはあなた方です」

麻香は父親の言葉を先取りした。これには父親も言葉を失ってしまった。

「どちらが主導権を握っているか、分かっていないようですね。茅ヶ崎つくるさん。あなたが敵に回しているのは誰ですか？」

麻香は次に母親の方を向いた。

「どう思いますか。茅ヶ崎はなこ華子さん」

妹は相手の心を壊すのが得意である。  
何をどのタイミングでいうと心的ストレスが最大になるかを知っている麻香にとって、それは言葉による拷問だ。

「おま」  
「三上商事四千、海日用六千、壁耳商事二千五百」

繋の言葉を遮って、麻香は何かの羅列を口にした。  
それを聞くうちにまた、華子の顔が青くなる。

「駄目ですよ。証拠はちゃんと払拭はらいつくしないと。中学生でも簡単に見つけられるようじゃ、中途半端な処理しかしてないですね」  
「な、何故それを……」

華子の顔は蒼白と言うより真っ白だった。

「今から何をしても無駄ですよ。事前に調査はしたでしょう？ 大和撫子の危険性も十分過ぎるほど理解していると受け取りますよ」  
「な、な、な……」  
「栄は自分を殺してほしいと私に言いました」  
「えっ!？」

初耳だ。

僕も一緒に驚いてしまった。  
ベッドを見ると茅ヶ崎本人も驚いている。覚えてないのだから当然だ。

「私は殺してあげましたよ。他ならぬ友人の頼みですからねえ。そこに座ってるのが」

たっぷりと時間を置いて麻香は止めを刺した。

「あなた方の作品『栄』の亡骸です」

両親は膝から崩れた。

二人とも口を開けて、心そこにあらずといった感じだ。

「お父さん、お母さん……」

栄の呟きだけが聞こえた。

「私に自由を下さい」

それは、僕らに一瞬記憶が戻ったかと思わせるような、広々とした  
大空に憧れる人間のような、そんな呟きだった。

「さて、兄貴帰ろうか」

心機一転。

麻香はご機嫌そうに僕に言った。

「麻香さん」

「麻香でいいよ」

麻香は茅ヶ崎の呼び掛けに間髪入れずに快活に答えた。

「友達になってももらえますか？」

「そうそう、前の栄から今の栄に伝言があるんだった」

麻香はニヤツと笑って言う。

「私は天才ばけものだってさ」

一瞬。

その間は刹那とも言えるほど一瞬だった。

「化け物の一人や二人、問題ありません」

茅ヶ崎は確かにそう言った。

麻香は「そっか」とだけ言つと、「明日には退院出来るよ」と付け加え病室のドアを開ける。

「娘をお前に近づけようとした代償が娘を失うと言う事か・・・？」

見れば繋は目を閉じ、俯いていた。

「栄は……」

「神話のイカロスは太陽に近付きすぎてどうなりました？」

麻香は振り向くことなく言った。

「まあ、今回の蝶の翼はあなた方でしたけどね」

無理矢理なこじつけ。

立ち止まっているところを見ると、最後は僕にとって置いてくれたのだろう。

麻香は齒牙しがにもかけなかったが、僕はいい加減頭にきていたのだ。

「えっと、ご両親方」

何て呼んで良いか分からず、中途半端な丁寧語になってしまう。  
僕の言葉に二人はこちらを向いた。

「僕の妹は化け物じゃないですよ」

「……ふん。『それ』を化け物と呼ばずしてどう表現すればいいのだ？」

繁は鼻を鳴らして嘲る。あざわら

「参考程度に」

また口を開きかけた繫を遮るように僕は言った。

「僕は麻香と呼んでいますよ」

麻香はふっと笑って歩き出す。

捨て台詞としては上等。

そう言ってくれたらしい。

それ以上両親二人は何も言わなかった。

\*

結局あの時の話ははったりか……。  
古往今来こわうこんらいお前たちは友達だったって訳だ。

「ねえ」

帰りの自転車で、荷台からまた声が掛かった。

「兄貴は私の事好き？」

「嫌いだね。超が付くほど」

「ありがとう。私も嫌いだよ、兄貴の事」

「・・・感謝するよ」

何だ、この会話・・・。

マゾ同士の愛の確認か？

「私さ、時々この世界を滅ぼそうかと思うときがあるんだよね」

「勘弁してくれ・・・」

そんな思いつきで滅ぼされていい世界ではない。

「でも毎回思うんだよね。世界を滅ぼしたら兄貴を苛める事できないなあって」

「本当に兄を凹ませるのが上手いな、お前は」

そんなしょぼいことで思い留まってるのか・・・。  
世界が急に安く思えてくる。

「そうだよ。私にとってこんな世界要らないし。兄貴と遊べればそれでいいんだよね。でも」

「？」

「もう一つ、滅ぼさない理由が増えちゃったよ」

「……」

茅ヶ崎栄。

彼女はどうしても親の呪縛から逃げ出したかったのだ。昔から、ずっと。

そんな時、一人の女性に遭遇した。

そいつは昔から天童とされていた自分の遙か上に存在していた。

自分の現在地を見せ付けられたのだ。

天狗の鼻を見事に押し折った。

そこで。

茅ヶ崎は折れた鼻を捨て、麻香を頼った。

潔く。

清々しいほどに。



『助けてくれ（ころしてくれ）』と願った。

私を『殺してくれ（たすけてくれ）』と頭を下げたのだ。

茅ヶ崎栄。

記憶を失った僕の後輩。

彼女は 救われた。

そして麻香<sup>ほけもの</sup>を受け入れた。

惹かれたものは何かと、詮索するのは無粋だ。

救われたのは茅ヶ崎だけではない。

栄の記憶を消した張本人。

時間を握り潰した少女。

麻香も 救われたのだ。

「お兄さん」

僕が新入生の説明会の為に、壬生高校に向かおうと玄関を開けたら、そこには無事退院した茅ヶ崎の姿があった。

「これからお出掛けですか？」

「ああ、高校入学の説明会だ」

「壬生高校・・・の制服ですね」

「お？ 知ってるのか？」

「ええ。何故か、知っています」

茅ヶ崎はそう言って苦笑する。

後で麻香に聞いた話だが、茅ヶ崎は知識をある程度覚えていられるらしい。

つまり、生活には支障なく、中学生としての話についていけるような知識だけ残ったため、高校生の制服の記憶は消えなかったのだろう。

それにしても、あの茅ヶ崎が僕に敬語を使うとは……。感動だ。こいつ、よく見れば滅茶苦茶可愛い。

「あれ？」

ここで、僕はあることに気が付いた。

「茅ヶ崎、髪染めた？」

あの黒髪が若干茶色になっている気がする。

「あ、お気付きになりました？ ほら、良く言っじゃないですか。昔の自分との決別だって」「新学期覚悟しとけよ」

確実に生徒指導だ。

うちの中学の指導教師なんか夏休みに調子こいて髪の毛を脱色おとしてきた奴を、始業式が終わらないうちに丸坊主にしたんだからな……。

「え？ 地毛ですか？」

「姑息こしやく過ぎる！」

だから若干なのか！  
誤魔化ごまかす気なのか！

「少しずつ茶色を濃くしていきます」

「いや、ばれるだろ」

間違いなく。

当然のように。

「それで、麻香に会いに来たのか？」

「それもありますが、お兄さんにも会いに来ました」

「え？」

これは不意打ちだ。

予想だにしなかった。

「私と友達になってくれますか？」

まさか、そんなことを言われるとは。

僕は喜びの余り口が軽くなる。

「寧ろ結婚しようぜ」

「すみません！」

茅ヶ崎は勢い良く頭を下げる。

「即断!？」

呆気ない人生初のプロポーズだった。

「それで、お兄さん……？」

「ん、ああ……」

改めて言つと気恥ずかしいが、仕方ない。

「俺でよかつたら」

そう言つと茅ヶ崎はニコツと笑つてくれた。

そういえば。

「親とはどうなった？」

後で麻香に訊けばいいのだが。

折角友人である本人が目の前に居るのだから。

「両親は私に干渉しなくなりました。何に關しても」

茅ヶ崎はわざとらしく茶色がかった髪を手櫛てくしで梳すいた。

「茅ヶ崎……」

「ですが私は後悔していません」

「……」

そうか。

お前がそういうのならば

「それに」

「ん？」

「両親は案外私のことを大切にしていたのかもしれない。私が愛に気付いてあげられなかったのかもしれない」

「何でそんな事が分かる？」

「名前ですよ」

「？ 名前？」

茅ヶ崎は小さく笑ってあることに気付く。

「そついえばお兄さん、学校は？」

「そうだった！」

僕は自転車に飛び乗り茅ヶ崎に別れを告げて家を発つ。  
僕は必至にペダルを漕いだ。

茅ヶ崎栄。

過去があるから今がある。

そんな文学者染みた事を言うつもりは毛頭無い。

ましてそれを他人に諭さとさせるなんて思わない。

過去があつて、未来があつて、現在がある。

それらは一つ一つ独立しているのか。

目に視えない繋がりを持っていたとしても僕には到底理解する事な  
んて出来ないはずだ。

ただ。

茅ヶ崎栄が生きて成長してきた十四年は、麻香や僕と一緒に居た時  
間は、茅ヶ崎栄に

彼女にとって。

彼女達にとって。

僕は時間の無駄とは思わない。

「忘れる」ということは誰が考えようと恐怖である事に違いありません。その中でも、大切な用事をすっぽかしてしますことと、今まで生きてきた記憶を全て失う事は大きく差があります。後者の方が圧倒的に畏怖の対象でしょう。自分と言う存在は残るものの今までの人生を一切無に返すようなものだからです。記憶と言うものは大きく3段階から成り立つとされています。記憶によって覚え、保持で維持し、想起によって思い出す。記憶喪失とは特にその中の記憶、想起に異常があることで起こるようです。今作では実際にはない保持機能を一時的に破壊し、記憶を頭に残さないようにするというものでした。麻香は易々と記憶を消す事ができましたが、現実になんかそれを故意に行うには何が必要なのでしょう。対象の心をスタスタに切り裂くシヨックなのか。研究され尽くされた薬品なのか。元々人間は不要と判断した記憶は忘却されるようになっていきます。もしかしたらそのような薬が存在するのかもしれない。

お久しぶりです。もしくは始めまして。王手です。読了ありがとうございました。

拙い文章を長々と書き連ねた小説ですが、何とか書き終える事が出来ました。

前回の常識潰しの後書きでは「次回は100ページだあ！」なんて事言っていました。無理でした。余りにもネタが続かない。90ページ弱なので、あと少し粘れば到達できたのですが、「完」と書いた瞬間の脱力で続きませんでした（笑 根性ですかね。

唐突ですが作者はますます茅ヶ崎栄というキャラクターが好きなようになっていきます。そこで麻香の名前が出てこないのは、何故でしょうか。……また、鬼怒川先輩も暴れていく予定です（笑 実は彼女、本性は なんですよ。（……）



それにしても今回の妹の時間潰しはどうだったでしょうか。他人の目から見ればそれでもまだまだなのでしょうが、書けば書くほど文章力と語彙が増えていくのを感じます

既に今作を投稿させて頂いている間に次回作の構想を練る事ができました。次は学園祭の時期、6月頃にお会いできるかと思っておりますが、時間と実力の関係で早くも遅くもなります。また数ヶ月ほどお時間を頂く形となりますが、もし気が向いたら次も読んでやってください。御願致します。

ありがとうございます。またお会いできる事を切に願っております。

王手

201 - P (前書き)

初めての方は初めまして。

知っている方は久方振りで御座います。

前作から五ヶ月。長い間音信不通の状態で申し訳ありませんでした。六月に更新と予告していましたが、予定が伸びに伸びて八月中旬です。

pcの故障でデータが消えるなんてこともあり、心も折れた時期もありましたが、無事に書ききることができました。

これからまた一週間とちよっとの間、宜しく御願います。

「妹の手間潰し」です。

例えば僕が、在學校である壬生高校みぶの生徒会に所属していることは読者諸君にとつて雀すずめの涙ほど興味が無いことだとしても、僕が鬼き怒川夜見世ぬかわよみせのことを話すとなると、この事実が必要になる。

鬼怒川夜見世は有名な生徒会長であつた。

同じ時期に生徒だつた人間に「生徒会といえは」という質問をすれば必ず「鬼怒川夜見世」と返ってくる。

他に「学園祭といえは」といつても「鬼怒川夜見世」と返答されるだろうし、拳句あけくの果てには「君」と訊いた時でも「鬼怒川夜見世」と返ってくる。

これについては喜ばしくは無いのだが……。

それにしても全校生徒にこの「鬼怒川夜見世」の名前にしても、顔にしても、行動にしても、ここまで印象付いていることは普通ではない。

一生徒が男女合わせて八百人近い全校生徒に注目されるなんて事はあつたとしても、それは一瞬であり、その後、関わりを持たない人は直ぐに記憶から抹消抹消してしまふからだ。まして学年も違えば尚更なおさらだ。

容姿はそれに適う。

容姿端麗。それだけで十分。

姿形以外に毎年変わる生徒会長の中で一際目立ち輝くには、非常で、つまりは常軌を逸した行動・言動をとる他無い。

鬼怒川夜見世はその条件を満たしていた。

自分勝手。

傍若無人。

自由奔放。

そんな行動を繰り返す。

自分の自由に行動する。

だが。

それでいて快刀乱麻に物事をこなす。

それでいて意思堅固いっしやんこの心の強さで。

それでいて一心不乱に努力する。

異常と非常の溝が上手く中和され、ある意味でバランスのとれた人間を確立している。

正義キヨウの味方が悪ヒールの怪人かは紙一重。

彼女はどちらにも当て嵌まる。

楽しみたい一心で周囲に働きかけるし、それが周囲のメリットにもなる。

彼女は喜びを分かち合う楽しさを知っているからだ。

自分の楽しみという概念に他者の喜びが組み込まれているのだ。全員で一つのことを成し遂げる事を、彼女は楽しみとして定義しているのである。

鬼怒川夜見世は。

ただ、人生を楽しみたいだけに生きている。

青春を謳歌おじかするためだけに今を生きている。

その過程で多少の苦しい努力をしたとしても、味わった苦しみが感動となって返ってくる時を感じるためだけに生きている。

まさに人間の究極。

世界に彼女以上に生きる事を楽しむ人間がいるだろうか。

どんな困難が現れようとそれを楽しみに変換し、打破<sup>たは</sup>する。

彼女にとって敗北という結果は存在しない。

道別れする人生の全ての分岐は、最終的に必ず勝利とリンクする。

彼女に負けはない。

と。

彼女自身はそう思っていた。

彼女の周囲もそう考えていた。

しかし。

鬼怒川夜見世はこれより未来は自覚しなければならぬ。

自分はただの人間である事を。

彼女自身は

非常でも異常でもないと言う事を。

彼女には非はないが、勘違いは間違いでしかない事に気付かなくてはならない。

そう。

彼女は負けた。

鬼怒川夜見世、高校二年生の学園祭。

それは困難ではなくて。

僕の妹でもなくて。

当然、僕なわけもなく。

鬼怒川夜見世は自分自身に負けたのだ。



壬生高校の生徒会室は一教室分の空間がありながら、あらゆる物が散らかり乱雑としていた。

並べられた事務机の上には何らかの資料が重ねてあり、載せ切れなかった紙が所々床を隠している。

棚の中が割と綺麗に見えるのは、殆ど使用する機会がないということに違いなかった。

壁に立て掛けてあるダンボールや木材は去年の学園祭の残骸で、棚の上にも及んでいる。

その時に片付けて、分別し、廃棄すれば良かったのに、「来年も使う」とか「もつたいない」などと本心から出ていないであろう言い訳と共にほったらかしにしたのだろう。

ガムテープで紙とは思えないほどガチガチに固められたそれらは、処分するのも面倒だというのは分からない事もないが、部屋に放置したままにしておくのは迷惑でしかない。

ただでさえ 床の資料しじょうによって 歩きにくいのに、尚更足あひだの踏み場が無くなってしまっている。

ホワイトボードの足に付いているキャスターは本来の機能を果たすことなく固定式になっているのも当然だろう。

物が散乱した床を移動するには持ち上げて動かすしか方法はない。

そんなゴミ屋敷のような部屋の前方で主おもよろしく、一つの事務机を陣取るのは我が高校の生徒会長様だ。

自らの足をあられもなく机上に載せ、態々（わざわざ）買ってきたというお気に入りのおフィスチェアに体重を預け、ゲームに興じている。

ここ最近、四月下旬の生徒会長の生活スタイルだ。

顔とゲームの機種は机上の資料によって確認する事はできないが、ゲームをしながら気付かずに独り言を言うタイプのようで、しきりに「うっ」「あー」とか、「死ぬ!」「次は殺す・・・」などと他人が聞けば少なからず引くような呟きまでしている。

更に時々机を叩いてその感動を表しているので、喧やかしい事この上ない。

生徒会室には会長と庶務である僕しかいないにも関わらず、デシベルで換算すれば車のエンジン音にも匹敵するのではないかと言うほどの騒がしさだった。

「また負けた!」

鬼怒川先輩が資料の山を一つ蹴り飛ばし立ち上がった。

床にまた資料が降り積もる。

鬼怒川先輩の手を見れば、そこに握られているのはゲームボーイ。時代を疑う古代のゲームである。

先輩の事だからまたマイナーなソフトを見つけてきたのだろう。それもまさに化石（例えばヴェロキラプトルのような）。

「タケシが倒せない！」

「察するにポケモンだ！」

王道中の王道じゃねーか。

しかも大分序盤で挫折してるし。

「いや、ピカチュウだけで突破するつもりなのだよ」

「たいあたりだけで!?!」

ものすごいハンデだな。

一気に難易度がつちやったよ。

せめて別のポケモンも連れて行かないと。

「野生で捕まえたトランセルを検討中だ」

「勝つ気がない!?!」

意味有り気なチョイスだな。

せめてキャタピーからじゃないと壁としか機能しないから。

「でももういい。どうせ勝てないのだから改造する」

「いやいや先輩。確かに初期のポケモンはバグを利用した改造がやり易くて有名だからって早過ぎませんか?」

まだ荷物届けてトキワの森を通過しただけじゃないか。

流石に僕も、始めて一時間でゲーム内容を書き換えようとは思わない。

「13個目の道具をセレクト長押しして……」

「先輩、そろそろ付いて来れなくなった読者もいると思うのでその辺で……」

「おっ、なみのりを覚えたぞ」

「タケシ死んだ! なみのりピカチュウで一掃される!」

「トランセルが」

「多才な虫だな、おい！」

つか鬼怒川先輩。あのプロローグの後で、負けたとか勝てないとか  
言わないでほしいんだけど……。

人生初の敗北がゲームだなんて最悪である。

「分かった。それでは名器ゲームボーイは置いておいて、最新のゲ  
ームをしましょう」

鬼怒川先輩はスクールバッグから新たなゲーム機を取り出した。

「3DS」

「ドラえもんの秘密道具みたいに取り出した!？」

予想外!

不意打ちにも程がある。

しかも何気にものがねが上手い!

のぶ代さんの方だが。

「ドラミちゃんも出来るぞ」

「!？」

更にネタを被せてきたぞ!？

入試の日から今日までにいろいろと進化してますね、鬼怒川さん。

「べ、別にお兄ちゃんの事なんか好きなわけじゃないからね!」

「必要のない萌え要素ぶち込んできた!？」

しかもまた上手い!

凄く残念な感じになってる……。

「ミニドラマも出来る」

「レパートリーが何気に多い!？」

全部ドラえもん関連だが。

しかしここまでくると次は期待せざるを得ない。

まさか、先輩にこんな才能があったとは……………。

「2DS」

「ツッコミ切れない!？」

ポケが混ざり合い過ぎて口頭では追いつけないので脳内解説。

何でミニドラなのに普通に喋ってんだよ!

何故普通のDS持つてるんだよ!

2DSって普通じゃないか!？」

「よく全てに気付いてくれた!」

「フォローを必要とするポケは極力控えて下さい……………」

「私の神業はこれぐらいにして、3DSをプレイしよんじゃないか」

「あ、見せてくれるんですか?」

実は僕、3DS初見である。

僕はソニー派なのでDSはあまりやらないし、妹はそもそもゲームで遊ぶような奴じゃない。

つまり見る機会がまったくないのだ。さっき鬼怒川先輩が取り出すのを見て多少は気になっていた。

「ソフトは何ですか？」

「ニンテンドックスというものだ」

「……………先輩には珍しい癒し系ですね」

「君は私を何だと思っているのだ。私も一端の乙女だぞ？ 時にはこういうゲームを動いそしんだりするのだ。学校生活で少しずつ溜まっていくストレスを解消してくれる」

何が一端の乙女だ。

さっき机の資料を蹴り飛ばしたのはどこのどいつだよ。

まあ、敢えて公言はしないが。

「紹介しよう。愛犬の景子けいこだ」

画面には首輪をつけた女性が四足歩行でフローリングの上を歩いていた。



明らかに人間の女性である。

「・・・・・・・・・・」

「どうだ、私の愛犬は？最近じゃあ自分からおねだりして来てを　　して、　　が　　なんだけど　　で　　」

「いやらしい系だった！」

何が癒し系だよ！

何が愛犬だよ！

別の意味の犬じゃねーか！

「これは一般に販売されてないのだ。何と言っても自作だからな！」

「今日一番のドヤ顔で才能の無駄遣いをアピールしてきただど！？」

滅茶苦茶良い顔してるし、目なんかキラキラしてるのに、億単位で才能を無駄遣いしてるよ！

3Dだから出るところがしっかり出てるし！

もうゆっさゆっさで、たゆんたゆんだよ！

奥行きが無駄遣いである。

「安心しろ。本番機能もしっかり付いてる」

「ホッ。それなら安心………出来るか！どこをどことれば心を撫で下ろす事態になるんですか！」

慣れないノリツッコミさせやがって。

つか言ってるそばから景子さんを散歩に連れて行くことしてるし！

せめて深夜に服を着せて連れて行ってほしい。

「何が不満なのだ。猫の方がいいのか？ 待っている、すぐにネコミミを装着してやるから」

「そんな機能まで付いてんの!？」

コスチュームチェンジまで出来るとは多機能だ………。

普通のゲーム作れば良かったのに。

「子犬・子猫編もあるぞ」

「それはいろいろと問題がありそうなので自重してください」

そもそも女子高生とマニアックなエロゲーなんかやりたくない。

しかもその女子高生が作ったエロゲー……………。

つか鬼怒川先輩って技術者なんだな。

パソコンの同人ゲームならともかく、DSのゲームソフトを作ったわけなんだから。

パソコンとか機械系が苦手だと思うのは勝手な想像だったと言うわけか。

ん？ 待てよ。

この人本当に凄い事してないか……………？

僕が思いを巡らせている間にゲームを仕舞ったらしく、鬼怒川先輩が手を組んで話しかけてきた。

「君」

「はい？」

「そろそろ生徒会を本格的に始動しようと思う」

「……………はい」

今日までのは何だったんだ？

毎日ゲームしてたじゃないか。

ま、そういう僕も隣で読書をしてたわけだが。

「部活の勧誘期間は来週で終わるから、他の生徒会のメンバーもそろそろ顔を出すと思う。六月下旬に控えた壬生高校学園祭、ついでに『柊祭』のことを計画しないといけないからな」

「入学したと思ったらすぐに学園祭ですか・・・」

未だクラスに馴染み切れていない僕としては忙し過ぎて首が回らない。そして、恐らくそれは僕だけではないだろう。

「確かにうちの高校の学園祭は時期が早い。新入生である一年生は少し盛り上がり欠けるな。まあ進学校なのだから仕方ないと言えばそうなのだが」

鬼怒川先輩は言った。

「結局、『柊祭』は何を言っても開催される。それなら楽しんだ者勝ちだ。まあ、教師陣には私が生徒会長に就任する事を止めなかつ

たことを、新学期早々後悔してもらったかもしれないがな」

## 203 (前書き)

話のネタ自体が分かりにくいところがあると思いますので、例によって読み飛ばしてください。すみません。

「ところで君、いよいよ柊祭まで残り一ヶ月を残すだけになったな」

「端折みじりましたね」

放課後の清掃を終え、生徒会室に入るとそう呼びかけられたので、当然のことながら突っ込んでしまった。

前章から約一ヶ月。

大して面白い話題が無いからと言って、気付いたら一ヶ月も経っていたなんてまるでフィクションの世界だ。

……フィクションなのだけでも。

「そんなことより聞きたいことがある。君は高校の学園祭と言えば何が思い当たる？」

「そうですね……。やはり中学との決定的な違いとして食べ物などを販売できるので喫茶とかでしょうか」

「他は？」

「他ですか？ えっと、規模からして中学とは違いますからね。準備期間の楽しみなんてのが、意外と魅力だったりしますよ。学校に泊まったりしたら面白そうです」

「他は？」

「まだですか？ えっとー。あ、そういえば軽音楽部などのバンド演奏は中学の頃はありませんでした」

「それだ！」

やっと当たりを引いたらしい。

鬼怒川先輩もどこかの妹に似て、面倒な性格である。

「その通り。バンドだよ、バンド！ メンバーがそれぞれ楽器を手に取り、暗幕によって薄暗くなった体育館で、スポットライトを当てられ、ステージを陣取って歌う。最高じゃないか。ところで君」

「僕はやりませんよ」

「どづいうことだ？」

先輩が、僕が台詞を先読みしたのが気に触ったらしくこちらを睨んでくる。

はっきり言って怖い。

「いいですか先輩。学園物のストーリーでは大体の確率で主人公た



ちがバンド組んで演奏します。それが漫画ならそんな感じの画を描いて終わりますが、これは小説なんですよ？ 歌う曲の歌詞を書き連ねるなんて恥ずかしいことは、この作者は絶対にしませんよ。それに一ヶ月練習したくらいでステージに立てるなんてことはまずありません。素人バンドが演奏しても白けるだけですよ」

「えー」

「えー、じゃないですよ。少しはポケを重ねるぐらいしてください。それに読者もこの展開は飽きていることでしょう。新キャラ投入する気配もないし、バンド結成は無理です」

「分かった」

「良かった。分かってくれましたか」

先輩の事だからこの場でしつかり止めておかないと、例えば練習無しで本番を迎えることもありうる。メンバーの誰も楽器を弾けず、カラオケ大会になる可能性だって無いとも言えない。

「レッチリのコピーバンドは諦める」

「分かってなかった！」

んなもん諦める以前に希望するなよ！

公衆の面前で裸になる気か、この生徒会長は！

「いいじゃないか！ バンドやりたい！」

「遂に駄々をこね始めた!？」

小学生か。

今日も元気過ぎるほど元気である。

「そもそも先輩は楽器弾けるんですか？」

「リコーダーを少々」

「バンドが何か理解してない!？」

どこのマーチングバンドだよ。

僕はピアノでも弾けばいいのか………？

「何を言うか。そういう戯言は私のリコーダーテクを見てから言うがいい。確実に『利口だ』と言わせて見せる！」

鬼怒川先輩は絶望的な戯言おれごとを吐いて、懐からリコーダーを取り出し（え?）、その場でオツヘンバツクの『天国と地獄』を吹き始めた。

「……………上手すぎる」

絶妙なタンギングと華麗な指捌はたきはとてりコーダーとは思えない  
優美な音を奏でている。

もはやフルートとかクラリネットの比ではない。

……………つか何なの!?

ちよくちよく出てくるこの無駄な才能は。

「どつだ、この音の調ついでは!」

「はつきり言って素晴らしいですが、その縦笛でバンド演奏は出来  
ません」

「何!?! ではこのエレキリコーダーでは……………」

「エレキリコーダー!?! 何それ!?!」

そんなものがあつたとは……………。

つか需要あるの、それ?

鬼怒川先輩はまたも懐から新しい縦笛を取り出し(え?!)、構えて

見せた。

「例によって自作だ」

「何だこの人!？」

「まったく。」

僕も、この空白の一ヶ月のキャリアが全く生かされていないじゃないか………。

一ヶ月も経って先輩に対する耐性も抗体も出来ないようじゃ、学園祭まで持つかどうか………。

「因みに君用にエレキピアノも製作中だ」

「使わないので! 無駄なことに時間を使わないで!」

リコーダーよりも作り易いとは思っが。

あれ? それ以前にそんなような楽器が現存していたような………。

「まったく。折角私が熱血生徒会長をやっているのに君は全然乗っ取れないんだな」

「キャラ作りだったんですか!？」

わお。

超予想外。

「最近の生徒会長は凄い。『一存』然り、『役員共』然り、『メイド様』然り。『めだかボックス』も生徒会長が主役だったような」

「インパクト・集団としては生徒会と言うのが身近であり、強烈なんでしょう。普通は男子である会長という職務を女生徒がやるのもまた、意味がありますね」

「ま、私はほとんど生徒会長としての仕事をしていないがな」

「この前、副会長が泣いてましたよ……」

一日で三回も学園祭各部門の責任者会議に奔放しているのを見た時は流石に僕も同情した。

そして会長。

胸を張らないで下さい。

「さて、生徒会もそろそろ学園祭の出し物を考えようじゃないか」

「生徒会も出店するんですか？」

「いや、生徒会はそういうものではなく展示物を製作するのが定例だ」

「展示ですか……」

「その通り。当日は生徒会一同忙しいからな。それに各クラスの出し物だってある。よって生徒会は店番などが必要ない校内展示をする」

「成る程。ですが先輩、残り一ヶ月全ての時間を展示に使えるわけではないんですよ。大丈夫なんですか？」

文字通り残念な展示になる気がしてならない。

『これ、誰が見て得するの？』ってやつ。

大体そういうのは製作者が楽しんでるだけなのである。

「その点は問題は無い。生徒会の出し物と言ったものの、これは全校で造る作品だ」

「全校で？」

「そう。例えば全校生徒に写真を一枚ずつ提出してもらい、その写真を使って大きな絵を表現するとかな」

「モザイクアートですね。それを生徒会で貼って造るって訳ですか」  
24時間テレビとかで見たことがある。

何枚もの写真を遠くから見える色に基づき、ぼやけた輪郭をとって  
いくと言う表現技法だ。

「これは例えだがな。この学校には大きな壁がないし、ボードを用  
意するのも面倒だからやらないが、同じようなことをしようと思っ  
てる」

鬼怒川会長は唐突に立ち上がり生徒会室のドアを開け、僕と一緒に  
外へ出るように促した。

僕は何も言わず廊下に出る。

「実は私の中ではもう構成は出来ているのだ。付いて来い」

そう言うと鬼怒川先輩はさっさと歩き出してしまふ。

相変わらず相手のことなどお構い無しだ。

しかし別に僕は気にしていない。

例のあいつに比べれば、まだ優しい方である。

「ここで余談をしよう。君は生徒会会則の第五章十二条は知っているか？」

「突然何ですか？」

「与太話だよ。今日の授業中に思いついたのだ」

「………知りませんが」

「生徒会の一員としての自覚が足りない！ 明日までに生徒会会則を全てノートに書き写して来い！」

「写経か！？」

くだらねえ！

本当に与太じゃねえか！

「古代朝鮮が三国に分かれている時の話だ。『あれ、国が一つ足りない』」

「百済無え！？」

危うく階段を転げ落ちるところだった。



階段つて結構危ないんだから下手な冗談は止めてほしい。マジで。

「いい機会だから小ネタどんどん消化していこうじゃないか！ 私にはネタになりそうでならないような微妙なやつがいっぱいあるんだ」

「冗談はこの辺にしてくださいよ。突っ込み切れるかどうか心配です」

つか無理。

僕の精神力では耐えられない。

「アダルトは英語でも adult という名詞だが、単数形の場合は単語の一番目が母音のため、an と発音しなくてはならない。An adult 『アン アダルト』。エロいと思わないか？ 『アアン、アダルトオ』」

「いきなりハズレ引いちゃったよ！」

完全に消化不良だよ！

面白いとかそういう次元じゃなかった。

かすりともしなかったよ。

「自分のクラスの下駄箱で靴を履きかえてこい」

僕のツツコミを受け流した鬼怒川先輩はそう言って自分の靴を取りに行った。

全力尽くしたんだけど。

必死でやったんだけども。

靴を履き替え外へ出ると、何の恥じらいも無く昇降口の前で仁王立ちしている鬼怒川先輩が目に入った。僕は無視したい気持ちを抑え、話し掛ける。

「それで、一体何をするんですか？」

「私が考えているのは大きな垂れ幕だ」

「垂れ幕？」

「そう。クラスからそれぞれ1m四方の布を提出してもらおう。そしてそれらを縫い合わせ、一枚の巨大な垂れ幕を造り上げる」

「それをここに垂らす、と」

「その通りだ」

昇降口があるのは校舎の北側。各学年の教室ではなく音楽室などの特別教室がある側なので、当日垂れ幕で中が見えなくても関係が無い。

僕が校舎を見上げると先程の鬼怒川先輩と同じような格好になった。

「学年で9クラスあるので27枚、どう配置しますか？」

「あと一枚生徒会で追加し、縦7m横4mにする。クラス毎に好きな文字でも絵でも描いてもらえばモザイクアートにしなくとも、それらしくなるだろう」

「成る程。それなら縫い合わせるだけですし、生徒会の負担もあまりない。流石先輩」

「人を怠<sup>なま</sup>け上手のように褒めないでくれ。私は真面目に提案してるのだぞ」

「先輩の事だからエロ本の切り抜きで裸婦画をモザイクアートするのかと思っていましたよ」

「昨日副会長に却下された」

「既に提案していただと!？」

完全に洒落のつもりで言ったんだぜ!？」

「グラビア本で良いと譲歩しても駄目だった」

「諦めが悪い!？」

それなら許可されるとでも思ったのであろうか。

棄却されて当然である。

「確かに私の趣味に生徒会、いや、全校生徒を巻き込むのはいけないと思う。それも決して褒められた趣味でない事は重々承知していたのだが、私はついつい思い付きで発言してしまう節があるだろう？ だから一晩反省して考え直した」

鬼怒川先輩はビシツと僕を指差す。

「さつき職員室で生徒の作品を発表するためと言って、一教室の使用許可をとっておいた！」

「先輩が写経するべきじゃないんですか？」

部屋一つを18禁に飾り付けるつもりなのか？

………まったく。

煩惱しか渦巻いていないこの人は天国には行けないだろう。

僕の周りにはつくづく残念な美女しか居ない。

その日僕が目を覚ましたのは丁度9時を過ぎた頃だった。

中学生の頃以来か。

本当に久し振りに、僕の生意気な妹・麻香に起こされたのである。

漫画でよくある『お兄ちゃん、起きて』みたいな、朝から気持ち悪いこと言ってるじゃねーよと言わんばかりの台詞ではなく、兄に言ってもいいのかというような　正しくは、兄妹だから言える　ピー音が確実に差し込まれるような汚い言葉で起こされた。

例によって、くふくし 蹀の激痛と共に。

「痛ええええええええええ！」

「うるさいなあ」

「うるさいなあ、じゃねーよ！　ほら部屋に入ってよく御覧なさい！　このドアの部分にガムテープが何十にも貼ってあるでしょう？　これが何なのか分かってんのか！？」

「知るか」

「一言！？　『おはよう』よりも少ない字数で僕の負の遺産を片付けんな！」

「それより私が三章でやっと登場っておかしくない？ この小説の題名が霞んで見えるんですけど」

「それこそ知るか！ 僕が高校に入学しちゃったんだから必然的にお前の出番が減るのは自然の摂理だろうが」

僕が語り手なんだからこればかりは仕方が無いことである。

「……とは言ったものの、一章二章と鬼怒川先輩が独占したのは僕も驚いたが。」

「来年は私が入学すればいいけど、それまで長いなあ。兄貴も私に10分おきに電話するぐらいの思いやりは持ってほしいんだけど」

「どこのシスコンだよ」

何で学校に行っている間、何度も妹に電話しなきゃならないんだよ。

それに何を話すの？

「『Hするとき、どの体位が好き？』とか」

「死んでも言わねえ」

それを知って俺はどうすればいいんだ？

「因みに後背位だよ」

「うるせえよ」

「あ、でも対面座位が一番かも」

「うるせえよ！」

処女だろ、お前！

いつから難しい体位をこなすようになったんだよ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何で黙ってるんですか!?!」

怖いんだけど。

妹に先越されたと思うと涙が出るんだけど！

「まあ・・・・・・・・・・栄となにかえ、ね・・・・・・・・・・」

「はあ!?!」



嘘だろ！？

唯一の親友を毒牙に掛けちゃったのか！？

「嘘よ」

「だろうな！」

一瞬引き込まれたが、よくよく考えれば有り得ない。

どっちも百合っけは無いもんな。

「栄も私も許容範囲だけど」

「許容しなくていいんだよ、そんなもん！」

全否定するわけじゃないが、僕に言わせれば同性愛は『無い』。

これについては語ることは何も無い。

「兄貴と話すとき絶対こつこつという話になるよね」

「無意識で会話の内容を誘導してんのか！？」

元凶は全てお前だろ。

脇道に逸れたがるのは僕ではない。

「それよか兄貴、今月学祭でしょ？ 兄貴のクラスでは何の出し物をするの？」

「いや、それがさー」

「決まってないんだよね。知ってる」

「じゃあ聞くなや」

全知全能の妹は肩書き通り知らない事は無いのである。

どこかの先輩同様面倒な妹だ。

物語的には仕方のない話題提示だが。

「喫茶とかにするの？ それともお化け屋敷？」

「方向性も決まってないんだよ。話し合いは何回もしたんだけどないまいち収束しなくて」

「メイド喫茶本番あり、とかどう？」

「却下だな」

本番って何？

花の女子高生に何やらせるつもりだよ。

風俗法に引つかかるぞ。

「それじゃあ本番ありの執事喫茶？」

「却下だな」

性別変えたただけだろ。

男子諸君は大喜びだろうが、客足が遠のく事は目に見えている。

「お化け屋敷本番あり」

「きゃ・・・お化け屋敷の本番って何!？」

お化けお持ち帰りすんのか!？

あの暗闇でやるのか!？

『砂かけ婆』とか『ろくろ首』が、『潮吹き娘』とか『性感帯が首』

とかになっちゃうのかな!?

.....

犯罪じゃねーか。

「大分脳内で盛り上がってるようだけど、傍から見ればとんだ妄想野郎だよ。読者も首を傾げることは必至だよ」

「確かに『性感帯が首』は無理矢理すぎたな。『雪女 心も身体も融かしてください』の方が」

「話を戻そうか。恐怖の館とかどう？」

「.....お化け屋敷だろ？」

「違う違う。高校なんかじゃ大したクオリティになんないんだからお化け屋敷は無理だよ。これは本当の恐怖を味わってもらおうの」

「他クラスのお化け屋敷全否定だな」

生徒会に属しているので知っているが、今年は全校で3クラスぐらいがお化け屋敷を出店する。

「兄貴の学校はどんだけお化け屋敷がやりたいわけ.....?」

「俺が知るか。それで、お前の言う恐怖の館って言うのは、お化け

なんて非科学的なものよりも現実の怖さを見させるってことか？」

「そうだけど、兄貴の言ってることは少し違う。寧ろ非科学的だから怖いんだよ」

「うん？」

「人間は科学で証明できない事に恐怖を感じる。この世界の法則は一定で絶対だから、それに当て嵌<sup>はま</sup>らないものには恐怖を感じるの。普通じゃあ有り得ないことがあればそれに恐怖するわけ。暗い所が怖いって言うのは視覚という人の感覚器官が機能しなくなるから。そして暗闇にいるとき必要以上に驚くのは、視覚に頼っていた感覚神経を聴覚や触覚に加担させるから」

「ふうん。それで？ お前はどんな恐怖の館を構想してるんだ？」

「その名も『ビニールプールにヨロイモグラゴキブリ二百匹』！」

「その品種にはピンとこないが、『ゴキブリ』という単語<sup>ワード</sup>が出てる時点で却下だろ！」

何それ！？

ヨロイモグラってゴキブリに付けちゃいけない言葉じゃね！？

「オーストラリアに生息する8cmぐらいのゴキブリだけど？」

「知らないの？ これぐらい常識だけど？ 的な言い方されても困

るんだよ！」

オーストラリアの巨大ゴキブリの事なんて知るわけが無い。

「あ、外国産のゴキブリの入手ルートに悩んでいるなら安心していいよ。ペット用に輸入されてるから」

「そんな心配するか！」

逆に不安になったわ！

何なの、ペット用ゴキブリって……。

「マダガスカルオオゴキブリの方がいいのかな？ でもあれは威嚇する時に音を」

「止める止める止める！ 想像しちゃったよ！ プールでゴキブリが舞<sup>ひま</sup>く姿が見えるよ！ とにかくこの案は却下だ！」

背中が痒<sup>かゆ</sup>い。

ゴキブリ怖え……。

「それなら『天井でざわめくオプトサソリ百五十匹』は？」

「はい、アウトオー！」

ざわめかないでほしい。

サソリって言っちゃてるじゃん。

「サソリの中でも最強の毒を持っていて、別名デスストーカーっていうんだよ」

「死の恐怖の方がよ！？」

ゴキブリの方が易しいだとお！？

誰が見て楽しむんだよ、天井のデスストーカー。

出し物の主催者も命懸けだな。

「ん、じゃあムカデいく？」

「気軽っ！？ カラオケ誘うのと同等か！？」

つかいつまで続くの、この害虫シリーズ。

いちいち こっぴど を付けるのが殊更不快だ。

「まあ冗談はこれぐらいにして」

そう言って麻香はふう、と息を吐いた。

「ぶっちゃけ喫茶店で良いんじゃないね？」

「急に冷めたな……」

まあ別に悪いわけではないけど。

麻香の助言を貰えるなら、僕にもクラスの奴らにも多少は有益な情報だろうし。

「メニューを工夫して、内装もちょっと周りと変えるだけで良い感じの店になると思うよ」

「おお。抽象的だが普通の意見だ」

麻香ならボケを重ねてくると思っていたが、今日は普段より大人しい。

何かあったのかな。



兄として少し心配である。

「具体的にどうすればいいんだ？」

「インパクト重視でタランチュラの唐揚げとか」

「確かにインパクトは絶大だけでも！」

誰が注文すんだよ。

物好きな高校生なら注文するだろうが、女子高生は明らかに寄り付かない。

つていうか、害虫シリーズスタートか！

「私が食べに行ってあげる」

「中学生のチャレンジャー!?!」

待てよ。

これ、意外と物珍しさで受けるかもしれない。

「いや、却下でしょ」

「それなら提案すんなや！」

分かってやってるのだから本当に質たちが悪い。

それはそうと。

僕はある疑問を解消しなくてはならない。

「そう言えばお前は何で僕を起こしに来たんだ？」

「端的に言うなら、暇だったから」

「くぁ w s e d r f t g y ふじこ 1 p」

踝！

俺の踝！

「嘘だよ」

「面倒くせえ！」

「引きこもりの兄貴にしては珍しく、日曜日である今日に予定があるみたいだから起こしてあげようかなあ、と思って」

「……………」

引きこもってねえよ。

そしてその優しさが怖い。

「勘違いしないで。今日は親が朝から居ないし、私も出掛けちゃうから、兄貴に家の戸締りをしっかりするように言っておきたかったの」

「……………そりゃどうも」

妹にそんな事を言われる自分が情けなくなってくる。

「それじゃ、私出るから」

「おう」

「今この家ってさ」

「ん？」

「Hし放題だね」

「誰と！？ 誰が！？ ちょっと待て！ 麻香！ おい、何とか言えって！ おい……………」

それはつい昨日の放課後、いつものように生徒会室に向かい、鬼怒川先輩の隣で学園祭の事で諸作業をして、やっとそれを終えた時の事だった。

先輩は僕が部屋に赴いた時から終始パソコンの画面と何やら格闘している。

だが、それは仕事をしているのではなく　　恐らくは　　マイ  
ンスイーパー辺りを興じているのだろう。

小学生にパソコンの使用を許可すれば、スタート、全てのプログラ  
ム、ゲームと進む子が多いはずだ。

その中でも、ルール説明を比較的必要としない、それこそまだ漢字  
を読む事ができない子供さえも出来る項目は、ソリティア、ピンボ  
ール、マインスイーパーであろうか。

そんな簡素なゲームこそ高校生になってふとした拍子に嵌る事があ  
る。

ソリティアの一分台を目指して、休日を一日無駄にした事がある僕  
が言うのだから間違いない。

しかしそう分かったようなことを言っても、僕はマインスイーパーが  
苦手で仕方が無い。

未だにクリアしたのは初級編である。

上級編の大きなウィンドウを見るとやる気が削ぎ落とされるのだ。

それにしても鬼怒川先輩のピンボールのハイスコアなんてのはどうなっているのだろうか。

何故落ちないの？

と言っほどの無限ループ。

僕なんて、ボールが一瞬消えるか止まるかするときに　　つまり  
急に光ったり騒がしい音が鳴ったりするときなど　　に混乱して  
しまう。

必死にパタパタしたとしても、両端の「ここ」、もう救いようがなく  
ね？」という場所に入り込まれ、すぐに残機が0、ゲームオーバー  
になってしまう。

とにかく、何のゲームか知らないが（よくよく考えればただ単にエ  
ロゲーなのかもしれない）、先輩がパソコンをいじっていたおかげ  
で、静かに作業をこなす事が出来た。

そりゃあもう驚くほどスムーズに。

結果的に、いつもの数倍のスピードで、数十分の一の時間で今日の  
ノルマを達成することが出来た。

よって当然ながら時間が余ってしまったのである。

それを見計らってか、鬼怒川先輩は僕に話し掛けてきた。

「終わったかね？」

「ええ、珍しく静かだったので集中出来ました」

「棘があるなー。ところで君。プールに行こうと思うのだがお金あるかい？」

「……………いくらですか？」

そう言つて僕は財布を取り出す。

すると鬼怒川先輩は僕が中身を確かめる前にそれを取り上げ、千円札を数枚手に取った。

うおい。

立派な窃盗罪だぜ？

「いやいや借りるだけだよ。未来永劫みらいえいこつ」

「返す気無いじゃないですか。至急僕の野口を返してください」

「まあ待て。私はこれを貯蓄プールする気は無いんだ」

「それが言いたかつたんですね。気が済んだら返してください」

「冗談だよ。いや、プールと言うのは冗談ではない。私は今週末、つまり明日にでも行くつもりだよ」

「はあ。そうですか」

どうでもいいからお金を返してほしい。

「他人事のように言っているようだが、君も行くのだぞ」

「はあ!? 何故ですか!？」

「さっき思いついた。何も心配する事はないぞ。寧ろ期待に胸を躍らせておくと良い。なにせ大人気の生徒会長と水着デート出来るのだから」

「確かに嬉しくないこともないですが、僕の野口で」

「嬉しくないこともない?」

「・・・・・・・・・・嬉しいです」

「よし、決定だな。入場料ぐらいは先輩として私が奢ってやる。臨時収入が入ったのだ」

「貸したんですから返して下さいよ・・・・・・・・」

そんな訳で今日僕は、俗に言う健康ランドなるものに訪れていた。

普通健康ランドと言うものは、ジャグジー、バス、サウナ、マッサージサービス、ゲームセンターなど、リラックスする事を目的とした公衆浴場だが、今回訪れた場所にはプールも完備されている。

室内温水プールであれば夏だろうが冬だろうが気温に左右される事なく遊泳が可能だ。

六月という微妙な季節でも先輩のプールで泳ぎたいと言う我侭が通ったのもその為である。

僕は欠伸あくびをしてロッカーの鍵を開けた。

更衣室にあまり人は居なく、それが僕を安心させてさっさと水着に着替えた。

「水中カメラでも持ってくれば良かったかな」

仕方ない。

網膜というフィルムに、白日の下に晒ひされる会長の巨乳を焼き付ける時が来たようだな……。

よっしゃ、っしー！



僕は気合を入れ、更衣室からプールの入り口に向かう。

プールに出ると、丁度女子更衣室から出る先輩と鉢合わせした。

「先輩ご馳走様です！」

反射的にお礼の言葉が口をついてしまった。

やべえ。

これはやばい。

何あれ、え、メロン！？

明らかにお歳暮のメロンクラスだわ。

「うん。たんとお食べ」

「頂きます」

しかし、僕の手はメロンを掴むことなく空を切った。

逆に、僕の身体は宙を舞ってプールにぶち込まれる。

「コンマ二秒で手が動くとは……躊躇ちゅうちゆはしないのか、君は」

多少フライングした飛び込みから体勢を持ち直し、プールの下から見た先輩の目は、明らかに汚いものを見る目であった。

あちゃー。

ついやっちゃったよ……。

しかも監視員がこっちを睨んでいる。

飛び込み禁止とはいえ投げ込み禁止ではないはずなのになあ。

投げ込みの方が悪質だろうけど。

「プールといえばお待ちかねのサービスカットだな」

「ポロリだとしても小説じゃ無理ですね」

プールから上がり、シャワーを浴びに行く先輩を追いかける。

僕はもう必要ないだろうが。

「この完璧なプロポーションを拝めないとは……残念だろっな」

「ボケなんですか？ 本気なんですか？」

いまいち判断し辛い発言である。

「こういう振りは分かりにくい、と。メモメモ」

「メモする必要性はないかと……」

「私の胸を揉めって言ったんだよ」

「良いんですか!？」

今回は動き出そうとする自分の身体を抑え、自制できた。

先輩が完全に投げる構えを取っていたのが気になるが。

「色仕掛けに弱い、と。メモメモ」

「本当に誘ってるんですか!？」

もう一度投げたいんだろうか。

期待した目でこちらを見ている。

「いや、結構痛いですから……」

水の衝撃を侮るな、と言ったところである。

「……………」

「……………」

「……………」

「…………せい」

ある意味断れない質なので、会長のために再度プールに叩き込まれた。

しかし。

今回はしっかりと胸に触ってきた。

僕もただでは転ばないのである。

僕が監視員に睨まれながらプールを這い出た時には、先輩はシャワーを浴び終えていた。

そして、僕らはあることに気付く。

「おお、なかなか速いな」

鬼怒川先輩は僕の感想も代弁してくれた。

50mの競泳用のレーンを魚類の如く物凄いスピードでクロールする女性がいた。

水を掻く手と水面を蹴る足は綺麗なフォームをとり、その姿は人の目を惹いた。

女性は何度かプールの端をターンした後、僕達とは反対側で止まり、水から上がった。

んん？

あれれ？

僕は再度、ある真実に気付いた。

「君、あの人に速く泳ぐコツでも訊いてみないかい？」

「いえ、止めておきましょう。あの人忙しいと思います」

健康ランドに居る時点で忙しいもないだろうが、絶対にあの女に会わせる訳にはいかない。

「どうして？ 何事も訊いてみなくては」

「いやいやいやいや。止めましょう。確実に後悔します。是非あつちで泳ぎましょう。僕と一緒にイチャイチャしましょう」

僕はそう言って子供用の浅いプールを指差した。

どう考えても不自然である。

嘘はやはり苦手だ。

「どうしてそう頑かたくなに嫌がる？」

いや、だって。

あれ、麻香だろ。

あんな長い髪をしている奴がそうそう居るはずがない。

それ以前に、僕があいつの顔を見間違えるはずがない。

とにかく、こんな所で妹に会えば、後で何を言われるのか分からない。

面倒な事はゴメンだ。

………までよ。

ここに麻香が居るといふ事は。

その時、ベンチに座る麻香に飲み物だろうコップを二つ持って近付く、水着姿の少女がいた。

「やっぱり訊きに行きましょう、泳ぎのコツを。いえ、行くべきです、先輩」

あの少女に会うのも割りと久し振りな気がする。

麻香の事も忘れ、僕は鬼怒川先輩を連れてはれない様に接近した。

「よお、茅ヶ崎、結婚しようぜ」

「うわあっ！ビックリした！今世紀の人類最大の汚点、お兄さんじゃないですか！」

「その不可解な二つの名は置いておいて、会いたかったぜ。結婚しよう」

「嫌です」

「当然だな」

「当たり前だね」

「集中砲火!？」

何故か全員から突っ込まれた。

軽口のもりがとんでもない大火傷である。

凡ミスだ。

「会ってすぐにプロポーズって本当に人間なんですか？」

「そう言われると自信はないが、多分人間だぞ」

「人かどうかわからない生き物と結婚なんかできませんよ」

もっともである。

「なあ君。この子達は君の知り合いかい？」

「ああ、そうでした。こっちのでかいのが僕の妹の麻香で、こっちの小さい方は僕のフィ」

「麻香の友人の茅ヶ崎栄です」



対応が早い。

僕に慣れてきたのだろうか。

「私は壬生高校の生徒会長をやってる鬼怒川夜見世だ。それにしても君に妹が居たとはな。私には鬼怒川夜風という姉が居るが、数年前に魔法使いになるとか言って、家出をしてから会ってない」

姉もキャラ濃過ぎる……。

いずれ登場するのだろうか……。

恐るべし、鬼怒川姉妹。

「君も見た目は弟だけだな」

「気にしてる事をさらりと言われた!」

「いいじゃん別に、本当なんだから」

「おま、この身体差別にどれだけ苦しめられたか知ってるか!？」

。 小学校中学校と、『中川家』と何度馬鹿にされたことか……。

「まあまあ、落ち着いてお兄さん。それよりも小さい私がここに……  
……って私にプロポーズするのは私がお兄さんよりも小さいからですか!？」

何か重大なことに気が付いてしまった茅ヶ崎さん。

「……………」

「お兄さん?」

「空が青い」

「ここ室内ですよ! 誤魔化さないで下さい」

遂に気付かれてしまったか。

僕は内心冷や汗をかいていた。

「それにしても知らなかった。君がこんなに気軽に求婚するほど軽い男だったなんて」

「そうなんですよ、会長さん。凄い迷惑してるんです」

真顔で言わないでほしい

泣いちゃうから。

「私には一度も言ってくれないのに」

「そつち!？」

嫉妬してくれてるんだ!？

泣きたい気持ちが吹っ飛んだ。

「でもやっぱり断るけどな」

「期待させておいて!？」

プロポーズさせておいて断るんだ。

一時期大ブレイクしたお笑い芸人のつまらなさに気付いた世間の手の平を返した時ぐらいのどんでん返しである。

「私にもしてくれないよね？」

「お前は妹だろうが！」

そんな暴挙を犯した日には、気まずくて仕方がないだろう。

「そつだ、妹さん」

鬼怒川先輩は思い出したように麻香に切り出した。

「さっきの泳ぎを見て感心させてもらったよ。何か速く泳ぐコツでもあったら伝授して貰いたい」

「コツなんてありませんよ。あれは最適化の結果です」

「最適化？」

「手の入水角、バタ足の動きを最良の形にただけです。既存のスタイルを少し変えただけでもタイムは何秒も縮める事ができます。会長さんの場合、水を掻いた後、手を伸ばすのが遅いです。水に手を付けず、伸ばしきってからみずを掻き始めるといいですよ」

「……君は何故私の泳ぎを見ずとも具体的なアドバイスが出来るんだい？」

当然の疑問だ。

先輩が首を傾げるのも無理はない。

僕は何か悪い予感がした。

「おい、麻香」

「自分で言うものなんです」

僕を無視して微笑みながら言った。

「私頭が良いんです」

言った。

恐らくは僕の身長とは比べ物にならない程のコンプレックスを麻香は突然言った。

「・・・・・・・・・・」

この思い切った発言には茅ヶ崎も緊張している。

一気に温度が下がった。

「そうか」

鬼怒川先輩は目を瞑って言った。

「では頭の良い麻香ちゃんに質問ついでに相談しても良いかな？」

「構いませんよ」

「実は私は先月辺りからストーカー被害にあっている」

「兄貴、遂に犯罪を……」

「いや、僕じゃねえよ！」

取り敢えず僕を疑うのは止める。

「冗談はとにかく、それは本当ですか？」

ここは茅ヶ崎が方向修正をした。

興味が湧いたのかどうか知らないが、この話題は僕も初耳である。

「最初の頃はしつこくメールをしてくる程度で、何度かアドレスを変更しながら無視していたのだが、最近になって行動がエスカレートしてきている」

「例えば？」

「街を歩けばストーキングされる。何回か写真も撮られたこともある。最近は家の近くの喫茶店で私の動きを見張っている」

「結構酷いですね」

問題は深刻そうだ。

「警察には言いましたか？」

「学園祭も近い事だし、あまり警察沙汰にはしたくないのだ」

「それは困りましたね……」

麻香は腕を組んでしばらく考えた後、こう言った。

「それでは兄貴をお貸ししましょう」

「「「は？」」」

麻香以外の声が重なった。

「外出する時は兄貴に連絡してください。付き添わせますんで」

「ちょっと待て、こら！ 何勝手に決めてんだよ。僕が毎回動くよ」

り、お前が一発で解決すれば良いじゃねえか」

付き添うこと自体やぶさかではないが、求められているのは早期解決である。

「兄貴には理解しがたいだろうけど、これが最良なの。私が出たって誰も救われない。どうせ解決するなら最良の方法を選ばないと」

「ん……」

麻香が言うならそうなんだろう。

僕はそう考え押し黙った。

鬼怒川先輩はしばらく沈黙を守った後、

「それでは頭の良い麻香ちゃんを信じて君の兄を拝借するでしょう」

と、言った。

この時点でこの事件のオチを知る者は麻香だけである。



壬生高校学園祭「柊祭」当日となった。

何と云うか、時間経過がとんでもなく早い。

前作も十分速かったが、学園祭準備期間なものにも係わらず、プールに行ったり、他の生徒会役員の人との絡みが全く無かったりと、手抜き感マックスでどうしたものかと困っている僕が居る。

いつの日か、余裕が出来たら章閑話もとい章間のおまけのみたいな感じで、『準備期間での出来事』を紹介するかもしれない。

余裕が出来る確率は極めて低いが。

そもそも大した事はやっていないというのが正直なところだ。

鬼怒川先輩の登下校中は常に付き添い、休日も外出するときは毎度電話で呼び出される。

別に会長の事が嫌いなわけでもないのに、苦も無く約一ヶ月その任務を全うする事が出来た。

驚いた事にこの生徒会長は土日も学校へ登校し、生徒会室で遊んでいる。

本人は仕事をしていると言っているが、プレイステーションポータブル PSPを握りながら事務的な机仕事をするのは至難の業だろう。

今月は特に学園祭の準備があるので僕が休日に登校するのは不自然ではない。

鬼怒川先輩は普段も休日に登校しているのか。

それだけが僕の心に残った。

壬生高校では 彼の多くの高校がそうであるように 学園祭は二日掛けて行う。

一日目は学校内、つまり仲間内だけで祭りを楽しむ。

市内にある文化ホールで、各クラスが一ヶ月間練習してきた合唱・劇などを発表し合い、吹奏楽部の演奏を静聴した。

今回は一日目のシーンはカット。

というか永遠にカット。

静かに聴いちゃったわけだから、会話で成立するこの小説の概念は腐敗するばかりだ。

話す機会がないわけもないが、さすがに少な過ぎる。

とにかく一日目はプログラムの進行に関わるようなアクセシントも無く 鬼怒川先輩も大人しくしていて 終える事ができた。

そして今日、二日目である。

二日目は一般の人が参加できるように土曜日に催され、地域の方々

や他校の生徒を招き、喫茶店などの出し物を教室・屋台で開く。

どちらかと言えば学園祭のメインは自由に騒げるこの二日目の方であり、盛り上がりも最高となる。

そんなことであるから、生徒会の仕事が増えてしまう。

校則の違反者（特に過激な行動をする者）の増加に風紀委員だけでは対処できなくなるからだ。

うちの高校は普段厳しいだけに、毎年羽目を外す生徒も居るらしい。

ほっとけばいいのに。

生徒代表として、そうも言っていないのが現状なのである。

そして一番大事なことは。

その生徒代表の頂点<sup>トッポ</sup>が何を仕出かすか、である。

午前九時三十分。

全校生徒が体育館に集められた。

学校長の簡単な挨拶と生徒会長からの諸注意を済ませ、遂に一般公開という名の無法地帯が解禁された。

生徒達は各々の持ち場に向かう。

教室で出し物をする者、体育館でライブを披露する者、正面玄関前で屋台を出す者、などなど……。

その全員が今日一日を目一杯楽しもうと意気込んでいた。

かくいう僕も、巡回と言う使命を担いつつ、高校生が作り上げた祭典を楽しむ気満々でいた。

しかし、ここで声が掛かる。

当然鬼怒川先輩である。

「君、巡回の担当は何時頃かな？」

「午前中です」

「ふむ十時から正午と言う事だな。仕方ない、私一人でやるとするか」

「何をですか？」

「一体何を企んでいるんだ……？」

「こつちの話だ。では巡回頑張ってくれ。いつか電話する」

そう言つて鬼怒川先輩はさっさと何処かへ行つてしまった。

「何も起きなければいいけどな」

そう思わずには居られない。

見えなくなるまで鬼怒川先輩の背中を眺めていたが、それも生徒の波に消えたところで僕は行動を開始した。

僕はまず屋台を見に、校門に向かった。

結果、この単純な選択は大正解であつた。

「お兄さん」

一度出店を眺めながら校門の外まで出て、校舎の方へ歩き出そうとしたとき、そう呼び止められた。

僕をこつ呼ぶ人間は一人しか居ない。

妹ではない事が不思議であるが。

「よお。来てくれて……!？」

言いながら振り返ったが、その光景を見て言葉を失った。

「今日は、私の、姿が、見える、みたいですね！」

跳んでいた。

ピョンピョンと。

いや、もうオノマトペが見えるほど健気に。

「ちょ、マジで結婚しない？」

「顔が真剣過ぎて怖いですよ。声も大きいです」

息を切らして僕の真面目なプロポーズにドン引きする少女は、紛れも無く茅ヶ崎栄であった。

「壬生高校の後夜祭にカップルで参加すると結ばれるという伝説があるのだが」

「行きませんよ。目論見もくろみがバレバレじゃないですか。小学生でももっと上手く誘いますよ」

「最近は何活中のアラフォー世代に大人気らしいぞ、うちの後夜祭。教師陣も一般人が百人単位で来ないか危惧しているほどだ」

「恐ろしい結婚願望ですね……………」

「そうならないためにも僕と今すぐ結婚届に判を押そうじゃないか」

「あ、会長さんだ」

「!?!? あの人は今、生徒会主催の『全校変顔コンテスト柊祭編』の司会のリハーサルをしているはずでは……………!?!?」

「ブツ。嘘でした。その興味深い大会についていろいろと言及したいところですが、今日はちょっとした仕事があるので、お兄さんのくだらない冗談に付き合っている暇は無いです」

「死後と?」

「仕事です。つまらない一言を挟まないで下さい」

……………そういえば麻香が居ない。

大体こういうイベントには二人揃って来ると思っただが、どういうことだろうか。

「麻香は麻香で既に自分の仕事を遂行しているようです。私の頼まれ事とはまるで別件らしいですが」

「何？ 麻香まで何か企んでいるのか？」

今日は嵐が吹き荒れるのか………？

会長と妹。

面倒なカードが揃ってしまった。

当然どちらもジョーカーである。

今日はそれなりに曇ってるし、シチュエーションとしては最悪だ。

まさに悪夢。

「午後には雨が降りそうですね」

「この前梅雨入りしたばかりだからな………。閉祭式までは持てば良いけど………」

「後夜祭は良いんですか？」

「えっ？ そんなものないよ？」

「へ？ ついさっき後夜祭の話を………」



「そんなものあるはずが無いだろう？ 私立高校ならまだしも公立高校、しかも進学校の学園祭なんてそんなものさ。夜間に学校に居させるなんて、まず教師が許可しないだろうな」

最近いろいろと物騒だし。

夜は犯罪の発生率が昼間のそれより数倍上がるからな。

生徒も祭りと言う事で普段とは違うテンションになるだろうし。

「…………お兄さんってある意味ジョーカー二人よりも面倒ですよね」

「今頃気付いたのか？」

自負するほどである。

あの二人とは別種の面倒臭さだが。

「はあ。もうその話はいいです。折角ですからこの学園祭を案内してくださいよ。お兄さんはどうせ暇でしょう？ 来年にはこの学校を受験するでしょうからそれなりに校風も見ておきたいんです」

「あれ、撫子は小中高一貫校じゃなかったか？」

撫子とは麻香や茅ヶ崎が通う私立撫子大付属中学校の事である。

「そうですね」

「そうですねよって……。。態々（わざわざ）ランク下げて壬（ち）生を受験する意味なんてあるのか？」

「……………それは、お兄さんがこの学校に居るか  
らじゃないですか」

「新婚旅行は何処に行く？」

「冗談ですよ、気持ち悪い」

「かまわん。何処に行こうか？」

流石に長年僕の愛を無碍にした茅ヶ崎で、僕の発言を華麗にスルーした。

「他の学校に行ったら私の出番が無いじゃないですか」

あ、出番とか気にしちゃうんだ。

「麻香はお兄さんと一緒に住んでいるわけですから自然に出番が回  
ってきますが、私なんて、言ってしまうえば知り合いですからね。こ

の学園祭が終わった後のお兄さんとの絡みなんてどうします？ 街で偶然会うくらいしかありませんよ？」

「ならば同棲でもするか？」

「嫌ですよ。頑かたくなに拒否します」

「そんな嫌がるなよ。意外とガラスハートなんだぜ、僕」

「知りませんよ。割れたガラスは危ないのでしっかり片付けてくださいね」

「今日なんか冷たくない!？」

立て続けの毒舌にびっくりである。

出番無くてイライラしてるのかな？

「分かったよ。そんな茅ヶ崎のために今回に続いて次章も茅ヶ崎回にしてもらおうじゃねーか」

「そんなことできるんですか!？」

「では次章、『茅ヶ崎、柊祭散策偏』」

「予告だけというオチはありませんよね?」

学生である僕達が学校生活を送る中で、授業以外に必ず課題、簡単に言えば宿題をすることは避けられないものであろう。

その種類は無数に存在する。

教科書に載っている小説の感想、漢文を書き下す、計算公式を暗記してくる、など様々だ。

小学生の頃は宿題なんていうものはしなくとも困りはしなかったが、中学高校と進むと宿題と言うものは成績に大きく反映する事を知り、無視出来る存在ではなくなる。

また、それに比例して、宿題をこなす事も難しく、つまりは手を抜く事も覚え始めるのだ。

ここである法則が生まれる。

『提出物の優先順位』

僕はこう呼んでいる。

小学校こそあらゆるほとんどの教科は、担任教師が掛け持ちして行っていたが、それを過ぎると学校の授業は一変する。

様々な教科に加え、様々な教科担任が現れるのだ。

この時点で初めて教科の数だけ教師が居るといった状況になる。

今日は算数の宿題。

今日は国語の宿題。

今日は理科の宿題。

などと言った、一日一教科の宿題という小学校までのシステムは一挙に廃止され、一日にいくつもの提出物を要求される事になるのである。

それも中学生程度のレベルであれば数ヶ月もしないうちにその学習循環に慣れることだろう。

それまでが甘過ぎた。

ただそれだけのことなのだから。

しかし高校生にもなってくると慣れでは済まされなくなってくる。

例えば、既に授業で教師の話す言葉が外国語にしか聞こえなくなっ  
てしまった僕とか。

英語の授業ではない。

数学である。

(ルート)って何？

間違いなく日常生活では『循環しない無限小数』なんてものの用途は存在しない。

皆無だ。

まあ、高校で習うこと自体日常では不要であるし、根本的に学習すると言う事は日常を中心としておいてないわけで、とこれは別の話である。

閑話休題。  
かんわ

話を戻そう。

何が言いたいかというと、僕のような半おちこぼれには今の量の課題・提出物を消化できないと言う事だ。

一つ一つに時間を費やせば、すぐに就寝時間を過ぎてしまう。

よって中には家ではやらない課題も生じてくるのが必然である。

注意すべきはここ。

この家でやらない課題に焦点を当てたのが、『提出物の優先順位』なのだ。

この『提出物の優先順位』は主に課題を出す教師に大きく関係してくる。

生徒達は家で提出物を仕上げる時に無意識にでも意識的にも、課題をやらなければ叱られるのではないかという教師に優先順位を付けているのだ。

当然全ての教科に共通して、課題をやつてこなければ、叱られる。

ペナルティの有無もあるが、その中には「この先生なら注意される程度で済む」といった心理が働く場合が半数以上を占めるだろう。

つまりそういうこと。

分かっているのだ。

その日だされた課題の中で何をやればいいのか。

多少飛躍するが『提出物の優先順位』とは期限よりも自分の被害を優先したものであるということなのである。

僕も今、頭の中で優先順位を組み立てている。

提出物ではない。

僕のこれからの行動だ。

ある校内放送を聴きながら、僕はため息を吐いた。

「びっくりした！」

僕と茅ヶ崎は出店で買ったかき氷を食べながら、校内展示を見学していた。

「うおっ。どうした、茅ヶ崎」

現在僕らが居るのはお化け屋敷ではなく、何の変哲も無い休憩所である。

もしかしてフランクフルトを食べる姿が見たいがために奢ろうとしているのがバレたか？

「どうしたもこうしたも無いですよ。前章であれだけ茅ヶ崎回とか言っついて、いきなり『提出物の優先順位』なんていう意味の分からないことを語り始めたんですから。読者の皆さんは明らかに読み飛ばしていますよ」

「まあ、そうだろうな」



調子に乗って高校生の行動パターンのことを話し始めたら着地点を見失ってしまったのは事実。

大々的に認める。

すみませんでした。

「ささ、時間も無い事ですし、そんなことは忘れて無駄話を始めましょう」

「話す前から無駄とか言われるとテンションが滅茶苦茶下がるよな」

一気に下がった。

カキ氷に負けてないぐらい低温である。

「ではお兄さん！ この私に何でも話題を振ってください！ どんどん盛り上げていきましょー！」

「この前、夢で熟女とセックスする夢を見たんだよね」

「いきなり厳しい！」

フランクフルトで思い出した。

グッジョブ、フランクフルト。

「起きた時はひやっとしたね。まさか僕の深層心理では茅ヶ崎コンプレックスじゃなく、熟女好きじゃなかったな」

「よくもまあ、恥じらいも無く言えますね。今すぐに首吊った方が良いとすら思います」

「しかもその相手が小学校の頃の担任の先生でさあ」

「続けるんですか！？ 女子中学生相手に仮想セックスした熟女の話をする高校生男子として学校中に広めますよ」

「すみません」

何の罰ゲームだよ。

不登校確定である。

「それでどーすんの？ 話題尽きちゃったけど」

「エロトークしか頭に無いんですか！？」

ほぼ正解である。

二重丸ぐらいは付けてあげたい。

ピンポーン。

校内放送を知らせる音が鳴った。

学園祭の案内だろうか。

そう思っている僕の耳には良く聞いた事のある声が響いてきた。

『今日は校外より御越し下さり真にありがとうございます』

「あつ会長さんじゃないですか」

茅ヶ崎の言う通り、この声は紛れもなく鬼怒川先輩のものだ。

しかし、鬼怒川先輩の今日のタイムスケジュールに校内放送という項目は無い。

つまりこれは予定外の放送だろう。

何か問題でも起きたのだろうか。

僕は放送に聞き耳を立てた。

『皆様にお知らせします。これより宝探しゲームを行います』

「はあ!？」

そんなイベントはこの柊祭には予定されていない。

僕が驚愕したとしても放送は止まらない。

『在校生も参加できるので良く聞いてください。ルールは簡単です。今から言うヒントを元に宝の場所を推理してください。見事探し当てた方には賞品としてその宝をそのまま進呈します。ご安心を。賞品は手作りなどのちゃちい物ではありません。売ればそれなりの価値があるものです』

そして鬼怒川先輩は咳払いをした。

『ただし、時間制限、タイムリミットがあります。今から二時間と少し、つまり午後二時になった時点で未発見の宝を回収します。説

明は以上です。質問は認めません。それでは宝の場所を示すヒントを発表します。メモの準備なんて要りません。それでは言います』

一瞬学校全体が静かになった気がした。

誰もが、と言うわけではないが大多数の人間がヒントを聞き漏らさないようにしているようである。

『「井の中身を捨ててしまつ」これがヒントです。当然暗号です。頑張つて解いてください』

そして鬼怒川会長は最後にこう付け加えた。

『それと業務連絡だが、生徒会の人間も私以外は誰も正解を知らないので参加可能だ。特に君、誰よりも速く見つけたまえ』

ピンポーンと。

再度、放送の終了を知らせる音が鳴った。

僕はしばし呆然としてその場で立ち竦んでいたが、茅ヶ崎に話しかけられ我に返った。

「お兄さんのリアクションから察するに、お兄さんも初耳のようで

すね」

「ああ」

茅ヶ崎も突如として開始されたゲームに戸惑いを隠せないようだ。

「では考えましょう。ヒントの意味を」

しかし参加する気満々である。

はあ。

僕は仕方なく優先順位を組み立てる。

しばらくして結論に至った。

これからの行動で優先すべきは、宝を見つけ、鬼怒川先輩の機嫌を損ねないようにする事だろう。

鬼怒川先輩の出したヒントは至極簡単なものだった。

かつて天才である我が妹麻香に、「自分に近い存在」とまで言わせた頭脳を持つ茅ヶ崎栄には、考える時間は一分と必要なかった。

「お兄さん、一つ」

「ん？ プロポーズか？」

「この学校に井戸もしくは井戸の跡なんてものはありますか？」

プロポーズという単語には一切動じない茅ヶ崎。

洗礼されたスルースキルである。

「いや、以前学校を回ったけどそんなものは聞いた事がないな。今時そんな危険なものは直ぐに撤去されるだろうし」

そうですか。

では、と茅ヶ崎は切り上げる。

「解けたのか？」

「ええ。探偵風に言っとしたら、謎は全て解きました、ですね」

そう言って茅ヶ崎は僕に付いて来るように促した。

歩き出す茅ヶ崎に付いて、僕は言った。

「是非解説願いたい」

そもそも暗号とか、なぞなぞが苦手な僕には見当も付かない。

実際、早々に僕は考えるのを止め、茅ヶ崎が解くのを待っていたところである。

いつからだろうか。

こんな諦め癖が付いたのは。

「お兄さんは先程、お化け屋敷をやっている三つのクラスをはしごしましたよね」

「クオリティ一番完成度が高いクラスはどれか、見比べてやろうぜって一緒に回ったやつだろ」



昔チラツと言ったが、今回の『柊祭』には三クラスがお化け屋敷を催している。

茅ヶ崎と全ての教室を巡回したが（生徒会なのでただでは入れる）、結局最後のークラスが一番面白かったという結果になった。

小道具も作り込まれていて、雰囲気はそれなりに出ていたと思う。

「その、最後に行った小道具に力を入れていたクラスに宝は有るはずです。お兄さん、あのお化け屋敷の特にセットは何がありました？」

「セットだと？ 暗いからよく見えなかったからなあ……。えっと、破れた障子、柳の葉、古井戸……ん？井戸？」

「それです」

茅ヶ崎はニヤツと笑った。

「会長さんの暗号は暗号と呼ばれるほど暗号ではないんです。どちらかと言つとなぞなぞに近い、漢字パズルですね」

ほう、と僕は相槌を打つ。

「暗号の井の中身は恐らく漢字の『井』の『』の部分なのでしょ

う。それが無いと言うことは……」

「『井』。つまりは井戸と言うことが」

ですが。

これでは少し簡単過ぎます、と茅ヶ崎は言う。

「確かに聞いてみれば簡単だな。これなら茅ヶ崎以外にも直ぐに暗号を解いてくる奴がいるだろう」

「私も宝はそこにあるなんて言いましたが、恐らくはこのイベントは暗号が次の場所を指示するRPG的なゲームなんでしょう。次のヒントがその井戸に書かれていると思います」

まさに鬼怒川先輩の好きそうなイベントだ。

彼女は自分でゲームソフトを製作するほどのゲームクリエイターなのである。

「しかし良かったな、茅ヶ崎。お前が一番乗りみたいだぞ」

話している間に目的地であるお化け屋敷に到着したのだが、そのお化け屋敷の教室には余り人の気配がない。

中に数人いるとしても、それはきつと純粹にお化け屋敷を楽しんでいる人たちであろう。

「あれ、君達ってさっき来てくれたよね？」

受付の生徒が僕らを覚えていたようだ。

「そんなに良かった？うちのお化け屋敷。ただで見ていったんだから感想ぐらい聞かせてよね」

成程。

覚えているわけだ。

生徒会の仕事などといって他校の女を連れ込めば誰でも頭に残ると言うわけである。

「ええ、まあ。小道具が作り込まれていて一番面白かったです」

「あはは。ありがと。製作者も喜ぶよ」

「誰かが一人で作ったんですか？」

「いやいや、まさか。みんなで作ったんだよ。でも、設計とか構成を考えたのは一人。君も知ってるだろう？ 生徒会長だよ。生徒会

長鬼怒川夜見世」

「!?!」

僕と茅ヶ崎は顔を見合わせた。

どうやら正解のようだ。

自分のクラスの出し物に細工するのは容易たやすいだろう。

「夜見世の奴も生徒会の仕事で忙しかっただろうに、自分がやるって聞かなくって……。。。。まあ、そのおかげで君達に褒められたわけだから一件落着としますか。さ、入るんでしょ?」

「失礼します」

今回も無銭で入場してしまった。

多少罪悪感を覚えてしまっ。

「そんな事よりお兄さん、あれです」

茅ヶ崎の指差す先には良くできた井戸のレプリカが置いてあった。

「このどこかに書いてあるはずですよ」

茅ヶ崎は中を覗き込んだ。

が、驚いたように少し後ろに飛び退いた。

「きゃっ」

「どづした!？」

「ビックリしました。中を見てみて下さい」

「分かった」

言われ僕は中を覗き込んだ。

んん。

これは。

「何だ、カエルの作り物じゃないか」

そこには緑色のアマガエルの玩具が置いてあった。

玩具といってもリアルな製品で、この暗がりの中で見れば最初は本

物と見間違っだろう。

「作り物………?」

「おうおう茅ヶ崎。もしかして両生類が無理な口かい?」

「く………」

僕に苦手なものがばれたのがよっぽど悔しいのか、齒を喰い占めていた。

作り物と分かってても、この近付き難い茅ヶ崎の雰囲気では隠しきれないもんな。

「両生類が無理なわけじゃないです。寧ろサンシヨウオ系はいけません。家でオオサンシヨウオを飼ってるくらいですから」

「おいおい、混乱して墓穴掘ってんじゃねえよ」

天然記念物を家で飼育してんのか、お前は。

虚勢を張っているのがバレバレだろうが。

「それにしてもカエルか。まるで『井の中の蛙大海を知らず』って  
いう諺ことわざの模型まがたみたいだな」

「それはそうでしょう。それが次のヒントなんですから」

両生類の恐怖から立ち直った茅ヶ崎は（それでも数歩後退りしているが）真剣な顔になっていた。

「ここでは他の人の邪魔になるので、外で話しましょう。いざ」

カエルの精神的打撃は想像以上に強大だったようだ。

普段なら『いざ』なんて言葉使わねえもん。

そして茅ヶ崎はお化け屋敷を出たところで次の目的地に歩き始めた。

「お、おい。もう次の場所が分かってるのか？」

「正解なら今お兄さんが言ったじゃないですか」

ふう、と茅ヶ崎は溜息を吐いた。

「心底残念な脳みそですね。さすが腐っても麻香の兄、と感心したのよ」

「別に僕は腐ってねえよ」

「安心を。納豆とか味噌とかのあれです」

「発酵もしてねえよ！」

僕はどこぞの健康食品だよ。

まさに日本料理か。

「確認です。お兄さん」

「今度は何だ？」

「学園祭中の小ステージは中庭の小ホールで開催されてるんですよ」

「ああ。朝言った『全校変顔コンテスト柊祭編』も中庭に設置されたステージで行われている。しかし茅ヶ崎、この時間帯だと何も催されてないぞ」

丁度鬼怒川先輩が指定した時間、午後二時までは何の予定もない。

「さすが会長さんですね。考えてあります」

「どづいづことだ？」



「『井の中の蛙、大海を知らず』ですよ」

「は？」

「上の『井の中の蛙』って言うのはあのお化け屋敷の井戸のことを表しているんですよ。つまりは正解、と。次のヒントは下の『大海を知らず』です」

「大海だと？・・・大海、・・・たいかい、・・・大会？」

「そうです。恐らくはこのレクリエーション中は大会という大会を知る事が出来ない。即ち開催されない場所のことです」

「そこで中庭のミニステージか」

「パンフレットで見える限り、体育館のステージはバンドライブ中です」

推理を聞いてるうちに何度も、茅ヶ崎が麻香の友達であると言う事実を思い出さずにはいられない。

当然麻香ほどじゃないが、この中学生も十分頭が切れる。

頭が良く回っている。

天才の片鱗<sup>へんりん</sup>を垣間見ると言うことは僕にとって恐怖を感じるところがある。

麻香のせいであることは明白であるが、それでもこの可愛い後輩を少しでも怖いなんて思いたくない。

『完璧な人間はいない』

いつか麻香が言った言葉だ。

もしかしたらその『完璧』を僕は無意識のうちに恐れているのかもしれない。

『普通じゃあ有り得ないことがあればそれに恐怖するわけ』

つまりはこういうことだろう。

。そもそも完璧と言つ言葉自体が不安定な存在なんだよな……

不安定で。

不確定。

麻香の完璧の定義は自分の中にあるらしいが、僕はどうかだろう、と  
考えてしまつ。

それがハッキリしない時点で、僕は完璧には程遠いのだろう。

窓から見える空は朝よりも雲を増している。

僕は携帯で午後の降水確率を調べる気にはならなかった。

「無いな」

中庭には沢山の人が往来していた。

中庭中央の小ステージで何か開催されてなくとも、周りを取り囲む出店で生徒や一般人もごった返していた。

校舎正面、校門から入ってすぐの場所にも出店していたが、こちらは抽選により決められた第二出店場所。

抽選といっても、出店場所は高学年が優先的に決める事が許される。優先権を破棄したクラスの出店枠を一年生は抽選で決める為、中庭は必然的に一年生が多くなっている。

つまり、知ってる顔に僕と茅ヶ崎が一緒にいるところを見られると言っことでもあった。

さっきからクラスメイトに僕らの関係を冷やかされていた。

いろんな意味で明日が楽しみである。

「ありませんね」

僕は茅ヶ崎の推理通り、小ステージの周りをぐるぐる回りながら次なるヒントを捜していた。

「もしかしたら私の推理が間違っていたのかもしれない」

「また考えるのか？」

「ええ。長考しますので、お兄さんだけでこの場を繋いでください」

「マジか」

「マジです」

まあ確かに、茅ヶ崎に全て任せるしか僕には選択肢は残っていない。うだうだと推理編みたいな形で文章を無駄に書き連ねるよりは得策だな。

「よし、僕が一人で喋るぞ」

「なるべく声に出さないで御願います」

そりゃそうだ。

周りに知っている人が何人もいる中で、独り言を言っているのは本当

に明日が楽しみになってきてしまう。

負の意味で。

そういえば、今鬼怒川先輩は何処にいるのだろうか。

あの放送からパツタリ音沙汰が無い。

別にこれ以上問題を起こそうとしている事を心配しているわけではない。

ここまで大々的に勝手な行動をしたわけだから、今更無かつた事には出来ないだろうし。

ただ、ストーカー騒ぎ以来、僕が久しぶりに鬼怒川先輩と行動を別にしたという点が頭の隅で引っかかっていた。

一ヶ月間校内・自宅以外は全ての行動を共にしてきた僕としては、隣に鬼怒川先輩ではなく茅ヶ崎がいるという事が多少違和感にはなっていた。

今も校内にいるわけだが、現在壬生高校は学園祭中である。

一般人が参加しているこの学園祭に、ストーカーが紛れ込んでいるという可能性を否定する事ができないのだ。

その意味では教師に生徒指導されていた方が、まだ安心できる。

.....

杞憂であれば良いのだが。

「ではお兄さん、行きましょつか」

先ほどまで推理していた茅ヶ崎が、またしても突然言い出した。

「お、おい。待てよ。行くなって事は、ここは間違いだったってことか？」

「そうです。私としたことが失敗しました」

そういう茅ヶ崎は大して悔しそうではない。

寧ろ、当然というような雰囲気だ。

「『大海を知らず』を読み違えました。あの蛙はここで大会が行われることは知っていたんです」

「………どういことだ？」

茅ヶ崎は黙って南側の校舎を指差した。

当たり前だが、この中庭は校舎に囲まれている。

北側の校舎には教室は無く、実験室や実習室、講義室などがいくつもある。

東と西の館には主に階段、通路、トイレなどがある。

南側には生徒達の教室がある造りをしている。

茅ヶ崎が指差したのはその教室の中でも特に

「 さっきのお化け屋敷が」

「 その通りです。さすが発酵食品」

「 ついに二つの名みたいな感じになったな」

一方通行とか超電磁砲とかのあれである。

せめてもう少し自分で名乗っても恥ずかしくない字あひなにして欲しかったな……。

ねえ。

発酵食品って知ってる？

「 お化け屋敷の教室からは 当然どの教室からなのですが  
この中庭を一望出来ます。つまりその教室にいる蛙は、ここで何らかの大会が行われる事を知る事が出来るのです」



「そうか！ そうすると蛙が知らない大会は……」

「体育館のライブで決まりでしょう」

……まったく。

この短時間でこの中学生に何回感心させられるのだろうか。

本当に、最初から答えを知っていたかのようだ。

「そうと決まれば早く行かなきゃな」

中庭に来た事で、大分タイムロスをしている筈だ。

もしかしたら既に次のヒントに辿りついた人もいるかもしれない。

「んー。お兄さんはそんなに豪華景品が欲しいんですか？」

「いや別に景品には興味ないよ。寧ろそんな事今まで忘れていたくらいだし」

「じゃあ何でそんなに急ぐんです？」

「そりやお前、折角茅ヶ崎が超推理を見せてくれたから勝たないと勿体無いだろ」

「ふーん。それじゃ景品を手に入れた暁には私が貰っても良いんですか？」

「良いも何も僕は何もやってないからな。それに豪華といっても高校生が用意できる景品なんてたかが知れて」

突然だが、あの『体は子供、頭脳は大人の名探偵』の漫画には頭に電気が走るといふ描写が頻出する。

それを体験してしまった。

と言っても分かり難いのだろうか。

しかし、それほどまでに衝撃的な閃きがあった。

まるで僕の頭を電流が駆け巡ったような感覚。

大富豪というトランプゲームでクーデターを起こしたような快感である。

「お兄さん…….?」

茅ヶ崎が怪訝そうに僕の方を見ている。

しかし、今は現状を冷静に分析する事の方が先決である。

ああ！

何故こんな事が思い付けなかったんだらうか。

なにせあの話をしたのは二ヶ月前の事だ。

だが忘れていたとしても仕方が無いとは言えない。

「お兄さん、一体何を」

「茅ヶ崎さん！」

緊張しすぎてつい、敬語になってしまった。

「……………何ですか……………」

「絶対に景品を手に入れるぞ！」

「どうしたんですか、いきなり……………」

「景品を他人に渡してはいけない！　まだお前なら弁論の余地はある！」

「は、はあ……………」

もっと早くに気付くべきだった！

鬼怒川先輩の景品。

恐らく、それはあの高等技術によって作成された手作りのものだろう。

更に言えばそれは電子機器。

景品が複数用意してあれば尚更だ。

景品は十中八九、エロゲーである！

そんなものが男子生徒ならまだしも、女子生徒や校外の人間に見つかれば鬼怒川先輩の馬鹿さが露見してしまう。

強いて言えば、この愚行の結果の先にリコールも待ち受ける可能性もある。

何やってんだ、あの人は！

リコールされた元会長という肩書きで、大学進学に支障をきたさない訳が無い。

まるで自身の地位を賭けた人生ゲームだ。

「茅ヶ崎行くぞ！ あの会長の人生が懸かっている！」

「ええ！？ 会長さんのですか！？」

話が突然飛躍してるわけだから、茅ヶ崎が驚くのも仕方がない。

馬鹿みたいな博打をした鬼怒川先輩が悪いのか、それとも気付くのが遅れた僕が悪いのか。

論じる暇も無く自明である。

とは言ったものの、焦っては元も子もない。

そういうわけで僕達はゆっくりお喋りをしながら体育館に向かって  
いた。

「ところで茅ヶ崎」

「何でしょう、お兄さん。結婚とか婚約と言う単語ワードが出た時点でお兄さんのその趣味の悪いカツラを宇宙の彼方にふっ飛ばしますので、宜しく御願ひしますね」

「先回りした拳句、根拠の無いガセ情報を読者に植え付けるだど？」

カツラと言う嘘だけじゃ飽きたらず、『趣味の悪い』というオプシヨンまで付けられた。

「そうですね。その緑だか青だか判別付かないような色のパーマは、ただ見る人に目を逸らさせるだけの視覚的シールドです」

「やめろやめろやめろ！ 僕はそんな色のカツラはつけていない！」

そもそもカツラなんて付けてねえよ！

話し掛けるだけで奇怪な色のカツラを付けている事にされるなんて正気の沙汰じゃない。

精神的<sup>トラウマ</sup>外傷になりそうだ。

………ならないけど。

「ところで何のようです？」

「ん？結婚だっけ？」

「約束通りカツラをふっ飛ばします。え、あれ、カツラじゃない？」

地毛！？ その緑か青の不快な色のパーマは地毛！？」

「何一人で三文芝居してるんだよ！」

今日の茅ヶ崎は積極的に僕を陥れてくるな……。

悲しいような嬉しいような……。

気持ち良いと言う感情も拭い去れない。

「話せば話すほど変態ですよね、お兄さんは。主人公をやっている事に心は痛まないんですか？」

「まあ、はっきり言えば、痛むな」

え。 と茅ヶ崎が目を見開いた。

「心を痛めているのに、何で生きてるんですか？」

「どうしてやたらと死を強要するんだよ！」

お前ら女子中学生の中では、自殺を勧めるのが日常茶飯事なのか？

「そうですね」

「嘘でしょ!？」

冗談のつもりで言ったんだけど!？」

「今じゃ挨拶のように使っています。おはよう、こんにちは、ごきげんよう、死んでください」

「どこの死地だ、そこは!」

恐ろしい風潮である。

「それで、自分が主人公であることをどう思っているんですか？」

「どちらかと言えば疑問を持っているって感じかな」

疑問、ですか。

偉そうな事をおっしゃるのですね。

茅ヶ崎は僕の言葉を吐き捨てた。

真意も聞かずに。



いや、きつと真意と言うような大そうなものは聞く必要も無いと判断したのかもしれない。

本当に今日の茅ヶ崎は毒舌だ。誰かのがうつったのかな。

しかし、僕は話さずにはいられない。

「僕は主人公だけど、魅力というものが存在しないと思うんだ」

「皆無ですね」

「そう、皆無。虚無と言っても良い。虚しく何も無い。これまでの話の中で僕が意味があることをしたとすれば、茅ヶ崎、お前の両親に生意気な口を利いただけだ」

いや、それも不要だったのかもしれない。

「麻香の誕生日にプレゼントを渡したじゃないですか」

「そんなもの毎年やっていただけの事だ。友達のいない妹に同情、  
・・・違うな。その部分だけでは妹に勝っていることを誇示したいが為に祝ってる振りをしたただけだ。そして結局、その日はカツアゲされて、妹のお膳立てで不良を倒し、最終的にはお前らに一日遊ばれただけ。僕の魅力なんてものは微塵も感じられない」

そう。

愛も勇気も、友達どころか知り合いでもない。

エキストラも良いところ。

「僕は他の主人公が持っているものを何一つとして持ち合わせていない」

例えば。

カリスマ性とか。

「大丈夫ですよ」

茅ヶ崎は打って変わって優しい口調で僕に言った。

「勝利への情熱も、恐怖に対する勇敢さも、特別な能力もお兄さんは持っていませんが」

内容は全然優しくなかった。

辛口である。中辛ぐらい。

「お兄さんには何も備わってないのが魅力なんですよ」

「普通の人じゃねえか」

「そうです。ステータスでいえば一般人です。しかし、お兄さんがこうして私達の物語を語っているということは、お兄さんが主人公である理由があるんですよ。何も無いわけではありません。この物語の主人公が麻香ではなく、お兄さんである確たる理由が存在するはずなのです」

そこで。

その茅ヶ崎は言う。

いつの間にか体育館の入り口に到着していたが、少し立ち止まって言った。

「次作辺り、お兄さんのエピソードがもしれませんか」

「伏線かいつ！」

明らかに次回予告じゃねーか。

ん、待てよ。

僕のエピソードが次と言うことはこの小説は最終回が近いと言っているか………？

「ま、そんなことはどうでもいいのです」

そう言いながら茅ヶ崎は体育館の中に入っていく。

「………ばっさりだな」

切り捨てやがった。

体育館の中は圧倒されるような熱気に包まれていた。

人数は百人を超えるかどうか分からない程度だが、勢いでそれは数倍の人数にも見えた。

閉め切った体育館はそれだけで暑いのに、ステージの前に群がる人々の熱と湿度でサウナ状態だ。

大音量の演奏と観客の盛り上がりで、外とはまるで別世界のようである。

「近付きたくないですね……」

「確かに、あの汗だくの大衆の中に埋もれたくはないよな……」

「それにしても下手くそなバンドですね」

「ん？ お前聞いてて分かるのか？」

今、演奏してるのは確か三年生のバンドである。

三年間も軽音部に入っていれば、上手くなると思っているのだがどうなんだろつか。

「分かりますよ。私バンド組んでますもん」

「はあ!? 初耳の耳初だぞ!」

何だそのカミングアウト!

驚いて少し跳んじゃったじゃないか。

「言ってますでしたっけ? 私はベースで麻香がドラム、会長さんがギターボーカルです」

「ええええええええええええええええええ」

麻香は兎も角、鬼怒川先輩までメンバーだと!?

お前らいつの間にそんな仲良くなってんの!?

「バンド名はThe fool brotherです」

「そんなところで僕を馬鹿にしてんじゃないやねえよ!」

その三人で兄がいるの麻香だけじゃねえか!

「因みにバンド名を決めたのは私よ」

「お前しかいないだろ……うわっ!？」

目の前に立って失礼な告白したのは僕の妹だった。

ステージの方からやって来たのだろうか、突然過ぎて驚きを隠せない。

まさにそこから湧き出たように麻香は現れたのだ。

「何よ。人を見て、お化けや蛙が飛び出してきたかのように驚くなんて」

「驚くだろ、普通。つか今まで何処にいたんだ？」

「私が何処にしようとか兄貴には関係ないでしょ。学園祭だから兄貴に会いに来なきゃいけないかった？」

「別にそういうことじゃねえよ。てっきり茅ヶ崎を探しているのかと……」

あれ。

何かの仕事をしてたんだっけか。

そういえば茅ヶ崎自身も頼まれ事があるようなことを言っていた気

がする。

「何を言ってるんですか、お兄さん。私のやるべき事は既に完遂していますよ」

「そつだよ、兄貴。栄はしっかりと私からの仕事を終わらせてるよ。お疲れ様、栄。本当に疲れたでしょ？」

「そつでもないよ」

「お前ら何を言ってるんだ？」

毎回そつだが、蚊帳の外って言うのは辛いもんなんだぜ？

「いづれ分かるよ。それより兄貴さ、私が何処にいたんだって聞いたよね？」

「おつ」

「家庭科室にいたんだよ」

「………は？」

あれ？

兄貴は日本語が伝わらないのかな？ と麻香は首を傾げた。



「高校生になっても実習ぐらいするでしょう?」

「んなことは分かってる!」

問題は何故お前がその特別教室にいたのかって話だ。

今日家庭科室では何の出し物もしていないはずである。

「何故って……悪者退治?」

「悪者退治!?!」

何を言ってるらっしやるんだこの妹は!?!

「具体的に言うと、鬼怒川会長のストーカーが家庭科室を爆破しようとしてたから私が止めてきたの」

「雨が降ってきそうだな。洗濯物をしまってこなきゃ」

「お兄さん、いくら脳のキャパシティの限度を超えたとしても現実逃避はやめて下さい」

「仕方ないよ、栄。兄貴の脳の容量は500ギガバイトが良いところ……」

「家庭用パソコンと同じじゃねえか！」

やかましいわ！

1テラ無いんかい！

増設が必須じゃねえの！？

.....。

いや、そんなことより。

「麻香、それは本当か！？」

「うるさいな、本当だよ。そして沈んで」

「どこの海底に！？」

付け加えられた余計な一言が怖すぎて、本題に集中出来ないんだけど。

「仕方ないなあ。詳しく話してあげるよ」

「た、頼む.....」

一時間前。

カラカラツ、と静かに家庭科室のドアが開いた。

そして忍び込むように足音を隠し、一人の男が教室の中に入った。

身に着けているのは何の特徴も無い地味なＴシャツと、これまた普通のジーンズである。

学園祭といえど、生徒に普段着の着用は許していない。

九分九厘、校外から来た一般人だろう。

彼は教室の電気は付けず、机のガスコンロの部分に近づこうとする。

その瞬間、家庭科室の電灯が点いた。

「こんにちは。利根越人さん」

先ほど彼が侵入したドアの所から、今度は女性の声が掛かった。

電気もついて、逃げ場であるドアに人がいることが分かってか、彼、利根越人は自分に話しかけてきた女性、麻香にたいじ対峙した。

「よく俺のことが分かったな」

「当然よ。私は何でも知っているもの」

「へえ。じゃあ俺の歳は？」

「18」

「身長」

「174cm」

「住所」

「鬼怒川邸正面のアパート『水無月』202号室」

麻香は利根が話す質問に間髪入れずに答えた。

利根は口角を上げ、感心して見せた。

「はっ。よく調べてきてるじゃねえか。つーことは今から俺がしようとしていることも」

「知っているからここに来ただけど？」

麻香は表情を変えず答える。

「それで、止めに来たど？」

「まさか。良い事を教えに来たのよ」

「あん？」

「あなたはガスの元栓を全開にして、ガスが教室に蔓延した所で爆破する予定だろうけど」

「ここでようやく麻香は表情を変えた。

それは相手を嘲る<sup>こら</sup>笑み、まさに嘲笑を浮かべていた。

「それ、ガスなんて出ないよ？」

「？」

「そもそも学校の設備が目に見えているものが全てなわけがない。そこからガスを出すには事務室にある元栓を開いてこなきやいけなわけ。この部屋の鍵は盗めたみたいだけど、ガスの元栓を事務員に気付かれずにいじるのは私でも至難の業だと思うよ」

「つまりこの計画自体が破綻するってことか？」

「その通り。極小サイズの脳みそにしては理解が早いじゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ところでストーカーさん。私の兄貴のボディガードはどうだった？」

「・・・・・・・・・・ボディガード。あの男はお前の兄か」

利根は急に態度を豹変させた。

さつきとは打って変わって敵意をむき出しにしている。

「完璧にマークさせてたでしょ。私も会長さんを一人にするなって、きつく言っておいたからね」

「なかなか危ないことさせるんだな。家の中まで付いて行ったら殺さなきやいけないところだったぜ」

「人間の屑ごときがでかい口きいてんじゃねえよ。そんなことしようとするれば私がお前の肢体を分断するっての」

これを聞いて利根は数秒声を失ったが、すぐに声を上げて笑い出した。

「君さ、大胆だよな。肝が据わってるって言うか。この状況分かって喋ってるの？」

利根は簡単に教室を見渡し、フツと笑う。

「そもそも北館一階のこのフロアは進入禁止なんだぜ？ それに加えて本来閉まつてるはずの家庭科室。俺がここでお前をどうしようと誰も気付いて助けになんか来てくれない……」

「逆を言えば、私があなたをここでぶちのめしても学園祭の進行には子細しさい無いという事だけだ」

パキポキと、麻香は指を鳴らしながら言った。

「気付いてるかな？」

その場の空気が。

一瞬にして凍り付く。

利根の顔からは笑みが消えていた。

「よく知らんけど俺は格闘技をそれなりに嗜<sup>たしな</sup>んでるぞ？」

「それがどうしたの？ 弱い犬ほどよく吠えるってあれ、本当なんだね」

「いい加減頭にくる」

「人間弱い部分にくるらしいよ」

ザツと。

利根が動いた。

地を蹴り、驚異的なスプリングで麻香に飛び込む。

左の腕を後ろに引き下げ、右腕で麻香の顔にストレートを打ち入れた。

「躊躇なく女子の顔を殴ろうなんて」

麻香はその右腕を掴んで軌道をずらし、足を払って中へ浮かせた。



「異常だね。あの人が拒絶するのも分かる」

利根のスピードを利用して、麻香は廊下の方へ投げ捨てた。

「俺の拳を冷静に受け流すのも十分に異常だがな」

利根は受身を取って着地し、再度標準を麻香に合わせた。

そこから瞬時に飛び出す。

「驕らないでよ、魚雷。その遅いスピードで私に対抗できると思うなんて愚考としか思えない」

麻香は、今度は受け流すことなく体をくねらせ、利根のリアアットを避け、脇腹に正拳突きを加えた。

続き鳩尾みぞおちに肘ひじを埋め、利根を床に叩き付ける。

最後に利根の右腕を踏みつけた。

「本来私に喧嘩を売れば骨の二、三本は覚悟してもらうつところだけど、今回はここが学校ということで勘弁してあげるわ」

「づぐぐ……」

「・・・・・・・・一本で」

「!？」

家庭科室のある北館一階のフロアに苦痛に悶える悲鳴が響いた。

しかし、それを聞く者は一人の女子中学生だけだった。

「うおいー!」

「何？ 折角私が態々（わざわざ）（わざわざ）回想を語ってあげたというのに」

「何？、じゃねーよ！ お前はヤクザか!？」

制裁が、恐ろしいどろろの騒ぎじゃねえ。

戦い方も急所的に的確に狙っているという面で、普通に恐怖だが、そ

んなことはこの際関係ない。

「あれ？ 中学で喧嘩を売られたら骨を折り返しなさいって教えられたのに」

「その教訓を教えた教師の名前を言え。今からぶっ殺してくるから」

「その発想の方が恐ろしいですよ」

「まあ、さっきの話、結構盛ったけどね」

「盛ったんかい!？」

本気でびびったわ！

兄をあまりドキドキさせるんじゃないやありません！

「まあ良いじゃん。ストーカーを退治してきたわけなんだから」

「ここでお前を許したら何か大切なものを失うと思うのは僕だけか？」

この予感の色濃いのだが……。

杞憂であってくれ。

「それじゃあ閑話休題。会長主催の暗号ゲームに戻るつか」

「まるでお前がさつきまで参加してたみたいに言うな。……あれ、お前も参加してたの？」

「当然。兄貴たちが中庭いるところを横目に見ながら暗号を解き回ってたよ」

「嫌な奴だ！」

言うてくれれば良いじゃないか……。

おかげで茅ヶ崎と一緒にいられたのだけけど。

「……それで？ 今回の暗号も瞬殺だったんだろ？」

「誰に口を利いているのかしら？」

「普通に答えるよ」

「家庭科室に行きたいの？」

「何で喧嘩腰なんだよ!？」

兄と喋るときくらい落ち着いているや。

「話を戻すけど、たぶん次が最後だよ。場所は生徒昇降口正面。あそこは出店も無いから行けば何があるか分かんと思う」

「ふうん。それじゃあ行くか」

「兄貴が何で仕切ってるの？ 家庭科室に」

「その台詞流ってるのか!？」

靴を履き替え、外に出ると厚い雲のせいで少し薄暗かった。

しかし人の数は減ることなく、来校客は未だ後を絶えない。

天気予報で雨は夜からと言っていたからなのか、傘を持つ人は目に付かなかった。

目の前に出店が一つあるが、時間も時間な為に売り切れの看板を出している。

何を売っていたのかは不明だが。

「それで、麻香。ゴールは何処なんだ？」

「お兄さん。さっき麻香が言ったことをもう忘れてるんですか？」

「仕方ないよ、栄。一日一膳を一日一食は和食を食べることだと勘違いしていた兄貴に、記憶能力を期待することこそが間違いだよ」

「一膳を箸の数え方だと思っただんですか、お兄さん？」

「ええい、うるさい！ 麻香だって器用な勘違いだっけ寝てただろっが」

「別に寝めたわけじゃないんだけど……」

「あれ、そうなの？」

はあ、と。

二人のため息が重なった。

「それに兄貴、生徒会でしょ？ 昇降口正面に出店を出店させてはいけないことぐらい知ってるはずでしょ？」

「あ」

売り切れと書かれた看板。

それはこの出店がそこにあってもおかしくないというカモフラージュ。

そもそも売り切れるわけが無いのだ。

何も売ってないのだから。

「そう。ここがこのリアルRPGゲームの終着点」

麻香を先頭に、僕らは孤立したそのテントに近づいた。

「チェックメイトだよ。会長さん」

「正解！」

突然、セツトされた長机の下から鬼怒川会長が飛び出した。

「思ったより遅かったじゃないか、君！ 麻香ちゃんや栄ちゃんが一緒ならもつと早く終わると思ってたんだけどね」

鬼怒川先輩はそう言いながら、後ろからカードを何枚か取り出してそのまま机に並べた。

それぞれ同じ書体で『挑戦権』と書いてある。

「まあでも、君が一番にやってきてくれると信じていたよ。よく頑張ってきてくれた。ここで商品を贈呈するのも良いのだが、それじゃあ面白くないだろう？　そこで最終問題だ！」

「まだやるんですか？」

「当然！　つとその前にやることがあったな」

そういつて鬼怒川先輩は机の下から校内放送用のポータブルマイクを取り出した。



生徒会室にあるものを持ち出してきたのだろう。

鬼怒川会長は咳払いをしてマイクの電源をオンにした。

たちまち会長の言葉は全校に聞こえる仕様となった。

『本日は校外より御越し下さり真にありがとうございます。皆様にお知らせします。先ほど開催された宝探しゲームですが、暗号を解き明かしゴールした方が現れましたので、終了させて頂きます。参加して頂いた方々には厚く感謝申し上げます。ですが、優勝者にそのまま賞品を贈呈するのは面白くありません。今から十五分後に生徒昇降口正面にてラストクイズを行います。これを挑戦者が正解すれば、賞品を贈呈しますが、もし間違えた場合、ギャラリーの中から抽選でプレゼントいたします。皆様、お時間あれば昇降口前にお集まりください』

鬼怒川先輩は言い終えてマイクの電源を切った。

「なかなかえぐい事しますね、先輩」

「何を言うか。素晴らしいエンターテイメントじゃないか！ こうなる事は全て予想していたよ。完璧に予定通りだ」

「兄貴にはこの素晴らしさが分からないの？」

「まったくです。欠望けつぼうしましたよ、お兄さん」

「そこまで言われる筋合いがあるのか!？」

いつかのプールでの会話に似てるな。

既視感デジャヴなんて曖昧なものではなく、はっきり記憶に残っている。

「では君。人が集まるまで待っていてくれ」

「……………分かりました」

ピピピピッ。

そこで見計らったように電子音が鳴った。

「悪いな。電話だ」

僕もこの音は知っていた。

鬼怒川先輩の携帯の呼び出し音である。

鬼怒川先輩なら着メロも凝ったようなものにしていそうなのだが、彼女にしてみれば興味が無いらしく、意外と無機質な電子音で統一しているらしい。

先輩が携帯を取り出し、呼び出しに応じたところで、僅かだが表情を強張らせた。

鬼怒川先輩は少し耳を澄まして話を聞いた後、受話口を手で押さえ、僕たちを小声で呼んだ。

「君」

「……………どうしたんですか？」

「例のストーカーだ」

「！？ 利根ですか？」

「……………なんでその名前を知っているのかは後で教えてもらうとして、一緒に話を聞いてくれ」

家庭科室のことを話すのを忘れていたことに後悔しつつ、僕は携帯の反対側から耳を近づけた。

『……………りに話そうとしてるんだ。黙ってるなんてよせよ』

恐らく利根越人であろう声が聞こえてきた。

そして今度は鬼怒川先輩がそれに対応した。

「いまさら何の用かな。私には関わるなと言ったはずだが」

『そう冷たく言うなよ。お前と俺は結ばれる運命なんだから』

「そんな運命、真つ平ごめんだ」

『夜見世はいつになったら俺にデレてくれるんだい？』

「貴様などツンの対象ですらない」

いや、お前ら。

なんか緊張感が無いんだけど！

話す内容が軽いつつの。

『いい加減俺と付き合えよ』

「断る」

『付き合ったほうが良いぜ？』

「私のメリットがまったく無い」

『知ってんだろ？俺は短気なんだ。早くしないとお前の大切なもんをぶち壊しちまうぜ？』

「・・・・・・・・・・？」

『十分後にまた電話する。それがラストチャンスだ。良いな？』

ブチッと。

電話は一方的に切られた。

「大切なものつて一体・・・・・・・・・・」

「ふん。何かと思ったたらあんなはったりを言い電話してきたのか。君、無視しよう」

「ですが先輩・・・・・・・・・・」

「構わん。あいつが何をするのか知らんが、電源は切っておく」

鬼怒川先輩はそういつて携帯をポケットに仕舞った。

「さて、それよりも何故君があいつの名前を知っているのかという話をしようか？」

「ああ、それは・・・・・・・・・・」

「寧ろ会長さんが話すべきですよ」

ついに黙っていた麻香が口を開いた。

このタイミングでの麻香の切り込みは、まさにこの話は佳境に入るところということだ。

「……………何を話せばいいんだい？ 麻香ちゃん」

「鬼怒川先輩がそのストーカーの名前を知っている理由を、です」

「理由って……………」

「つまり旧知ということですよ。会長さんとストーカー、利根越人は」

「……………」

「ストーカーは恋愛感情とそれ以外の好意、もしくはそれが満たされなかったことに対する怨恨えんこんによって付きまとう人間のことを言います。ですが、被害者がストーカーのことを知っているか知らないかで対処の仕方が大きく違ってきます。特に知らない場合、ストーカーの一方的な感情の移入で被害者には非が無いことが多い」

「では……………！」

「そう結論を急がなくてください。別に会長さんに非があったといっているではありません。解決、対処にはどうしても何故こうなった、という事情を知らなくてはならないのです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙ってしまった鬼怒川会長に麻香は問い掛ける。

「話していただけますね？」

数秒の沈黙の後、鬼怒川先輩は口を開いた。

「あの男、利根越人は去年までこの学校の生徒会にいた人だ」

「壬生高の卒業生だったんですか？」

「卒業じゃない。中退したのだ」

「・・・・・・・・何故」

「ある意味、私のせいだ。去年の生徒会長選挙で私が立候補する前、利根が先に立候補していた。あの時のあの男は自信に満ちていた。来年三年である自分が、その年に入学してきた女子生徒に負けるはずが無いと思っていたのだろう。そうやって常識というサンクチュアリに胡坐ひんがしをかいていた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

鬼怒川先輩は言う。

「私は自分の不利さを認識していた。そこで特にクラスメイトに協力を仰いで尽力した。幸い私のクラスメイトたちはそれぞれ別の部活に所属していた。おかげで後輩から先輩、先輩から同輩へと迅速に私の名前を伝達させることができた。ロコミという力を侮ってはいけない。私はそのとき実感したよ」

先輩はまるでるか昔を思い出すように、遠くを眺めていた。

「私は敢えて表立って選挙活動はしなかった。下手に利根を触発して本気を出されてしまったのは、太刀打ちできないからな。私はあらゆる手を使って、水面下で生徒の私への認知を広めていった」

あくまで名前を知る程度に。

鬼怒川先輩は着々と下準備を進めた。

そしてあくる選挙投票日、最初で最後の選挙演説を迎えたそうだ。

「体育館に全校生徒を集め、演説が始まった。先に話すのは、先に立候補の届けを出した利根だった。利根は言うところの普通の演説だった。あいさつが何だとかボランティアがどうか……」

「中学校と変わりませんね」



茅ヶ崎のいうことには同感だ。

僕も中学校のころの役員の方の公約に魅力的なものはまったく無かった記憶がある。

「その引立てもあつてか私の常識を真つ向から覆す演説は大盛況だった」

「……何を言つたんですか？」

「秘密だ」

そう言つて鬼怒川先輩はフツツと笑つた。

「結果、支持率93%で私は当選した。みんな私を知っていたのだ。不快感を抱かずとも投票できたのだらう」

「確かに名前も知らない一年生に学校を任せようとは思いませんね」

と、麻香が頷いた。

「しかし、ここからが問題なのだ」

鬼怒川先輩はそれまでの軽い空気を引き締めるように、表情を変えた。

「壬生高校は代々生徒会長が副会長、並びに他の役員を指名するというシステムをとっている。例年は会長選に落ちた候補生を副会長にするという風潮が定着していたようだが、私は利根を役員にする気など微塵も無かった。立候補する頃には私の理想の生徒会役員は決まっていたのだ。君もいれてな」

先輩は続ける。

「私が発表した役員に利根は噛み付いた。一年生に会長の座を奪われただけでも憐れなのに、役員にまで選ばれなかったとすればどれだけ無様か。想像に難くないだろう？」

一人一人の反応を確かめながら、鬼怒川先輩は続ける。

まるで過去の過ちを悔いているかのように、悔しそうな顔だった。

「当时空席だった庶務の席について言及もしてきた。私は君を入れる予定で空けておいたのだが、まさか来年入学してくる人間の為とは言えず、聞き流していた。そうしたらリコールを企て始めた」

「役員を決めないからですね」

「その通り、会則に会長は当選後早急に役員を定めることが決まっている。しかし、利根はリコールを実行できなかった」

そこでようやく僕は、この場所に人が集まってきたことに気づいた。集客は成功したようである。さらにそれと同時に少し風が吹いてきたことにも気づく事ができた。

「署名が集まらなかったのだ。リコールに必要なのは全校生徒の四分の一。私の演説は本当に上手くいっていたらしい。私の信頼に利根は打ち勝つ事が出来なかったのだ」

「利根が恋愛感情を強要してきたのはいつでしょうか？」

「昨年度の終わり、二月頃だったと思う。ある日突然メールが送られてきたと思えば、毎日何通ものメールが送られてきた。何度も拒絶したのだが、あいつはしつこく私に付きまとう。そして私は強行手段に出た」

天性の才能なのか、鬼怒川先輩の話にどんどん飲み込まれていく自分がいた。

口を挟むことなんて出来ない。

彼女の説得力は、人の上に立つものには必要不可欠なものに違いないとすら感じさせた。

それだけの興味を誘うことが出来た。

「私は利根の執拗しつような行動を教師に暴露した」

選挙演説の時もこんな話し方をしたのだろう。

これなら他人指向の日本人を動かすのは容易たやすく出来たに違いない。

「すぐに職員会議が開かれ、すぐに利根は召喚されて審問された。

利根は否定したそうだが、私の提出した携帯のメールと、何より私の信用によって奴の言い分は棄却された。そして

「利根は退学処分となった」

「その通りだ。もつとも、その前に謹慎処分がワンクッションあったがな」

先輩は麻香を指差して大きく頷いた。

「何故退学処分になったんですか？」

「謹慎中も私にメールを送ってきたからだよ。その時は既に脅迫めいた文面になっていたがな」

またしても数秒の空白が僕らの中にできた。

話を聞く限り、鬼怒川先輩に非なんてまったく無い。

麻香はどうしてこの話を持ち出したのか。

知る由も無いが、やはり気になってしまう。

麻香の目には一体何が映っているのだろうか。

「……………さて、そろそろ約束のラストゲームの時間だ。君が利根を知っていた理由は後で聞くとしよう。さあ、三人とも準備はいいかい？」

「準備も何も先輩の話をずっと聞いてたじゃないですか」

「まあまあ、そうは言っても君が一番頑張らないとならないよ？」

「……………どうしてですか？」

そりゃあ。

君に出す問題は君しか分からないだろうからね。

と、鬼怒川先輩は腑抜けた空気を一蹴して言った。

予想外だ！

まさかこんな演出をするとは！

隣を見ると茅ヶ崎が青い顔をしている。

「お、おい、大丈夫か？」

「お兄さんこそ足が震えていますよ」

そして茅ヶ崎を挟んで隣には、涼しい顔をした麻香がモデル立ちをしていた。

「お前は緊張とかしないのか？」

「は？ 緊張って何？ 殺虫剤？」

「絶対にそのボケは拾わないからな！」

拾ってやるものか！

低レベルなボケしやがって！

どうせ、『今の兄貴じゃこれを通つ込むのも精一杯だろう』という  
魂胆こんたんだろうがそうはいかない。

「それではお集まりの皆さん！ 大変お待たせしました！ 果たしてチャレンジはこのラストゲームに勝利し、賞品を手にするこ  
とが出来るのか！ はたまた観客の皆さんの贅にえとなるのか！」

司会進行の鬼怒川会長がどういわけかたくさん集まったギャラリ  
ーを沸かしている。  
それにしても贅にえって……。

「最終試練、ラストクイズに挑戦するのはこの三人！ ご登場して  
くれ！」

テントの後ろに隠れていた僕たちは、この司会と観客の熱気に隠れ  
続けることは拒まれた。

「これが今回最終試練にチャレンジする三人だ！」

ワアアアア！

と、観客は異常な盛り上がりを見せた。

「これが学園祭特有の異常テンションですか、お兄さん」

その余りのうるささに隣の茅ヶ崎の声も聞き取れない。

「そ、そうだな。あいつらはきっと騒げれば何でも良いと思ってる」

それを利用するなんて脅威過ぎる。

改めて鬼怒川先輩のことが恐ろしく思えてならない。

「さあ、私がこれ以上しゃべる必要も無いだろう！ 早速が出題形式を発表しよう！ これからそれぞれ一人ずつに問題を出題する！ 解答権は指名された一人だけ！ 制限時間はそれぞれ一分！ 一問でも解答できなかったり誤答してしまうと、賞品は皆の物だ！」

イエエエエエ！

始まる前に、『三人で挑戦するわけだから、多少不利なルールにするからな』と鬼怒川先輩が言っていたが、ことういことが。

これなら観客の不信感を払拭はらいつくし、公平感を与えることが出来る。



確かに理に適ったルールだが、大きな障害が出現してしまった。

「だ、大丈夫ですか、お兄さん……」

「正直やばい。ここまで来れたのも二人のおかげだったわけだし、僕はそもそもこういうイベントに慣れてない」

最悪だ。

自分で言うのも情けないが、僕はこのチームには致命的な急所である。

本当に怖いのは有能な敵より無能な味方、と言うが、まさにそれだ。

「それでは第一問！ 解答者は……」

僕はごくりと唾を飲み込んだ。

「体は小さくとも頭脳明晰！ 栄！」

ワアアアア！

当然だが観客のテンションは下がる気配が無い。寧ろ上がる一方だ。

僕はそつと胸を撫で下ろす。

それにしても鬼怒川先輩がマイク以外を持っていないということは、暗号解読を口頭でやらせるつもりなのだろうか……？

問題プレートを出してもらっても解けるかどうか分からないのに危う過ぎる。

「問題！ 『食パンの袋を閉じる四角いあれの名前は何でしょう？』

雑学だとおおおおおお！？」

これまでは閃きを大切にした暗号パズルだったのに！

問題もなかなかの難問だし！

因みに僕は雑学も苦手です。

浅学なんです。

「クロージャー」

即答だとおおおおおお！？」

やばい。

混乱してきた。

こんなレベルの高い場所にいる自分が信じられない。

別次元としか言いようが無いじゃないか！

「正解です！」

ウオオオオオオオ！

観客たちは一瞬、鬼怒川先輩が答えられない問題を出したと思って静かになったが、茅ヶ崎が悩む間もなく答えたことで、反動も加わり直前以上の盛り上がりを見せた。

「第二問！ 解答者は……………」

僕はもう飲み込む唾も無く、乾いた唇を舐めていた。

「可憐な天才少女！ 麻香！」

ヒョオオオオオオ！

恐らく僕の心拍数は既に通常の三倍速は超えている。

「問題！ 『ウルドゥー文学の最初の用語となった言語は何？』」

問題の意味すら分かんねええええええ！？

ウルドゥー文学って何！？

何処の国の話！？

「ダキニー語」

またも即答だが、これは麻香が答えたので驚きはしなかった。

しかし、麻香の正体を知らないギャラリーの盛り上がりは最高潮に達しようとしていた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！

「正解！ 難問も難なく解いていきます。何者なんだろうか、この中学生達は！」

さて。

「これで最後の解答者！ 庶務『君』！」

そこで観客からは笑いに溢れた。

「ただの役職じゃねえか」とか「名前呼んでやれよー」といった掛け声も飛んできた。

「では問題！ 『私、鬼怒川夜見世がこの一ヶ月間で一番多く発した言葉とは何でしょう？』 この一ヶ月、私に密着していた君なら答えられるはずだぞ」

はあああ！？

先輩が一番多く話した単語！？

そんなの分かるわけが無い。

いくら一緒にいた所で数えない限り、知る由も無いことだ。

僕は当てずっぽうで答えようとしたが、茅ヶ崎にそれを止められた。

「お兄さん、考えてください。鬼怒川先輩は何も私たちに無謀な出

題をしてるわけではありません。ちゃんと答えられる問題を選んで  
います。その人ならば答えられるだろう問題が出題されているんで  
す。この問題もきつとお兄さんなら答えが導けるんですよ」「  
「そんなことを言ってもなあ……………」

うーん。

もしかしてこれはなぞなぞか？

頓知とんちをきかせた問題なのか……………？

僕は今までの鬼怒川先輩との会話を思い出してみた。

学園祭が近いといってもそこまで話題にしてるわけじゃない。

そもそも学園祭は柘祭と言い換える時もあったわけだから、候補か  
らは外れる。

先輩との会話のほとんどは統一性の無いジャンルの無駄話ばかりだ。

全てに共通して出てくる言葉なんて存在しないはずだ。

僕が必死に頭をフル回転しているのに、観客の間からはカウントダ  
ウンが始まった。

1 5 . . . 1 4 . . . 1 3 . . . 1 2 . . .

くそっ。

カウントダウンってのはこんなにも集中力を低下させる魔力を持っていたのか！

焦りで冷静な思考も出来なくなってきた。

1 1 . . . 1 0 . . . 9 . . . 8 . . . 7 . . .

「どうした、君！ 残り七秒だぞ！」

そんな事言われても . . . . . ん？

6 . . . 5 . . .

今の鬼怒川先輩の台詞が頭に引つかかった。

あれ？ 何で僕は先輩の言葉に反応したのだろう . . . . .

4 . . . 3 . . .

その瞬間、フラッシュバックする。彼女と初めて会って自己紹介したときの事を。

2 . . .

間違いない！

鬼怒川先輩は  
！

1 . . .

僕は柄でもないが叫んだ。

「『君』！」

ざわっ、と観衆がざわめいた。

「鬼怒川会長が一ヶ月で一番多く話した言葉！ 答えは『君』だ！」

その場はさっと静かになった。誰もが鬼怒川先輩の言葉を待っていた。

「 . . . . . 正解」



歓声は爆音となってこの場に轟いた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

全員が賞品会得のチャンスを失ったというのに、ギャラリーはあたかも自分が優勝したように歓声を上げた。

「よく分かったよな」

鬼怒川先輩は僕の近くに来て言った。

「最後のヒントのおかげですよ」

「ヒント？ 何のことかな」

そういつて肩をすくめ、商品を持ってくると言っていてテントの方へ行ってしまった。

「ね、言った通りだったでしょう?」

「そうだな。助かったよ、茅ヶ崎」

「愚兄の兄貴にしては良くやったわ」

「普通に褒めることが出来ないのか、お前は!？」

冷静に愚かって言うなよ。

こいつ、ツンデレじゃないってことは、ただの性格の悪い女だという事に気づいていないのか。

「クーデレかもしんじゃないじゃん」

「デレが無いだろうが!」

僕の記憶に妹のデレは確認できていないのだが。

.....。

もしかして今からなのか!？

「それでは優勝賞品の贈呈です!」

鬼怒川先輩はなにやら大きな紙袋を持って戻って来た。

ちよっと待てよ。

結構前にエロゲーじゃないかって疑惑を生んでいた奴じゃねーのか、あれ!?

「まずは栄さん。賞品として3DSとそのソフトを進呈します」

あぶねえ。

ソフトということとで誤魔化しやがった。

「次に麻香さん。賞品としてPSPとそのソフトを進呈します」

それにしても豪華だな。

大盤振る舞いじゃないか。

観客も賞品の内容を知って、とても残念がってるし。

この様子じゃあ僕の貰える物も、エロゲーが露見することも心配せず、期待できるかもしれない。

「次に君。賞品として花火セットを進呈します」

「わーい。ねずみ花火も入ってる本格的な花火セットだー……」

別に良いけどさ！

薄々感じてましたよ！

せめて慣れないノリツコツミなんてさせないで下さいよ！

鬼怒川先輩は観客の大爆笑に満足したようで、僕に話しかけてきた。

「よし、それじゃあ。ファイナーだ。君、ここが何の場所か覚えているかい？」

「え、何ですか、急に」

「良いから良いから。思い出してみてくれ」

「えつと……………あつ。そういえば全校制作の巨大垂れ幕の……………」

「その通り。壬生高校の協力作品。団結の象徴である垂れ幕は、このタイミングで降ろそうと思っていたのだ。屋上に副会長を待機させ……………」

僕と一緒に屋上を見上げた鬼怒川先輩の言葉は最後まで続かなかった。

正しくは続けなかった。

鬼怒川先輩はすぐに携帯を取り出し、ある人間に電話を掛けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！ 何でお前が屋上にいる！？」

『何で？ 偶然屋上に行こうとする奴を見つけたんで付けて行ったら、面白い物を見つけたんだよ』

屋上で顔を出していたのも、鬼怒川先輩が電話を掛けた相手も、かつての壬生高生徒・利根越人だった。

『あ、副会長ならそこで寝てるから安心して良いよ』

「貴様・・・・・・・・！！」

『大丈夫、大丈夫。怪我もしてない程度に抑えてあるから。それよりさ、この垂れ幕下ろした方が良いのかな？』

「やめろ！ それに触るな！ その垂れ幕は全校生徒の気持ちが進められてるんだ！」

『あれ。触るところか踏んじやってるけど、これ』

「利根！・・・・・・・・許されると思っなよ！」

『そう怒るなよ、夜見世ちゃん。良いか？ 今なら許してやるよ。俺と付き合っちゃいな』

急に周りが静かになった。

騒いでいた観客がこの緊迫した空気に気付いた様だった。

鬼怒川先輩の視線を追い、誰もが屋上に注目した。

「お前の彼女になるくらいなら死んだ方がマシだ」

『……………そうかよ』

そう言って電話は切られ、数秒後垂れ幕が下りてきた。

それは。

その垂れ幕は僕ら生徒会が縫い合わせた時とは、まったくの別物に  
なっていた。

真っ赤な。

まるで血を連想させるような紅のペンキで。

垂れ幕には大きく『x』が書かれていた。

垂れ幕が下りきつたのと同時に、鬼怒川夜見世は膝から崩れ落ちた。生気が抜け落ちたように。

人形と化したように。

しかし、目には大粒の涙を浮かべ、その場に座り込んだ。

「き、鬼怒川先輩………！」

「お兄さん！ この人のことは私に任せて、麻香と一緒に利根を追って下さい」

「！ 分かった！」

僕が駆け出す頃には、麻香は既に校舎の中に入っていくところだった。

それを見てすぐに僕は脚のリミッターを外した。

僕が全速力を出すのは、ゆうに中学校の体力測定以来である。

そうは言っても麻香に追いつけることは適わないが、それほどまでに僕に本気を出させるには十分の状況だった。

「麻香！ この校舎には階段が二ヶ所ある！ 何処から降りてくるか分かるか！？」

「あいつは降りてこないよ！ もう逃げるのは諦めてる！ 人が集まったところで飛び降りる気なんだよ！」

飛び降り！？

一体何なんだ、あいつは！

「っ。冗談じゃねえ！ 麻香、エレベーターがあるぞ！」

「知ってる！ 早く来てよ！」

麻香はエレベーターを無視し、階段を駆け上って行った。

確かに、麻香の場合そっちのほうが早いかもしれない。

僕はというと、全力で最上階まで走る体力が無いので、エレベーターに乗り込んだ。

今は馬鹿にされたって構わない。

先のことを考えれば極めて冷静な判断であることが分かるだろう。

チンッ。



と、最上階到着の音が鳴り、扉が開いた。

僕はそこから飛び出て、そのまま屋上に向かった。

「麻香？」

そこでは麻香が精神統一をしているところだった。

フーッ。

深く静かに息を吐き出している。

例えば弓道で矢を射る時、彼らの胴体は軽く押したぐらいでは微動だにしないほど堅甲に直立している。

今の浅香はまるでそれだ。

「……………何やってんだ？ お前」

その場、その空間に縫い付けられたように麻香は動こうとしない。

僕さえいなければ、小鳥が麻香の肩に止まりそうだ。

僕は麻香を避け、屋上へと繋がる扉のドアノブを回した。

ん？

開かない？

外から鍵を掛けたのか？

何度ドアノブを回そうと、開く気配は無い。

麻香が背後で再度、フーツと息を吐いた。

まてよ。

このシーンはどこかで見たことがある。

具体的に言うなら、その道を究めた格闘家が目の前に積み上げられた瓦を今から叩き割る時のような……。

「ま、まさか、蹴破ろうと……！！？」

咄嗟の判断が功を奏した。

僕が素早くしゃがんだおかげで、麻香の空を切るハイキックは無事に扉に命中した。

グアンツッ！

きっと鉄パイプや金槌ではなく、車などが鉄板にぶつかって響く音だろう。

まして生身の人間が自分の身体からだだけでこの音を作るのは、僕の妹以外ないだろう。

途轍とてつもない音と共に扉は屋上のほうに吹っ飛んだ。

まさに人の所業ではない。

「お前！？ あれが僕に当たったらどうなってたと思ってる!？」

明らかにスクラップ確定である。

下手したら上半身が消し飛んでいたかもしれない。

利根どころの話ではない。

「結果オーライだよ、兄貴」

「日頃から命の天秤で僕を量ろうとするな!」

でも。

まあ、しかし。

屋上に来れた事は感謝せざるを得ないだろう。

僕のカじゃどうすることもできなかった。

麻香の行動は結果的には正解だったのかもしれない。

僕はそう考えながら屋上に出た。

「来ましたよ、利根先輩」

「蹴り破るなんて聞いてないぜ、おい。ん？ 家庭科室で会った中学生じゃねえか」

利根越人は麻香に臆することなく、そこに立っていた。

右腕は無事にその形状を保っている。

つまり、麻香の話は嘘だったということだ。

家庭科室で実際は何があったんだろうか。

「今回は見逃しちゃうくないわけ？」

「残念だけどそれは無理。何て言っても私の兄貴を怒らせちゃった訳だから」

「はっ。ちょうど良い。お前は死ぬ前に殴っておきたかったからな」

何の根拠があっただろうか。

まったく意味が分からない。

「どうした。俺を倒しに来たんだろ？」

利根が手招くが、不思議なことに僕はそんな挑発に対して怒りが沸いてこなかった。

勝手に歩が進む。

一歩一歩ゆっくりと、僕は屋上を利根に向かって歩いていった。

歩いていくうちに挑発への無関心の意味が分かった。

怒りは頂点に達していたのだ。

利根と僕が直接顔を合わせるのは今が初めて。

これまでに麻香の話に出てきたり、電話越しに声を聞いたりしていたが、それはあまりに間接的だった。

顔を合わせて、初めて実感する。

僕は利根の発する憎悪に真っ向から迎え撃った。

鬼怒川先輩を困らせ、拳句学園祭を最悪なものにしたこの男を、僕は許すという選択を思い浮かべることが出来なかった。

「言っておくけど、僕は妹とは違うから」

「戦闘に関しては素人なんだろう？ それとも何？ 妹と違って夜見世の為なら命張れますって言いてえの？」

「違う」

「ああ？」

「手加減できないって言う意味だ」

言い終わるか否か、右脚の爪先が利根のこめかみを捉えた。

「がっ!?!」

利根は受身を取って後退する。

僕はそれを肉食獣がうさぎを狩るように敵意をむき出しにして追った。

「くそっ!」

利根は急ぎ、腕を構える。

そして右腕を僕の顔に向かって突き出した。

僕は避けなかった。

本当は避けようとしても、格闘技を習っていた利根の右ストレートを僕なんかが避けれるはずが無い。

運動系の部活に所属していない僕にそんな反射神経が備わっているはずも無かった。

ガンツと左頬に重い衝撃を受けた。

しかし、今は痛みなど感じる暇は無い。

当然、痛みは感じた。

しかしそれを痛みと感じるまでのタイムラグが僕の次の反撃を手助けした。

それを反射神経が鈍いと言うかは人それぞれだが。

僕は攻撃して隙の出来た利根の首を狙って蹴りを放った。

渾身の。

今日は浅香におぶってもらって帰るのも良い、と思うぐらい自分の脚を、相手を致命傷に追いやる鈍器のように振るった。

僕が仰け反らなかった事が予想外らしく、利根は脚を受け止められずに吹っ飛ばされ、気絶した。

脚は腕の数倍の筋力を有する。

鍛えていない僕の腕なんかで殴ったところで大したダメージは期待できない。

それを考慮しての蹴りだった。

勝因はもう一つある。

はっきり言えば筋力がどうかなどという前者は、勝利の起因としては不十分である。

僕が始める前に言った言葉は嘘ではないということ。

僕は麻香と同じように相手の急所ばかりを狙ったが、ファイティングスタイル麻香の戦い方とは決定的な違いがある。

今回の場合に限るが、僕は手加減をしていなかった。

つまりは。

殺す気で戦ったということだ。



とは言っても、ひ弱な僕が素手で人を殺すなんてことは困難を究める。

しかし、それほどまでに。

今まで以上に僕は相手を倒そうと思った。

倒したいという願いでではなく。

倒そうという決意。

麻香の出番を必要としないほど僕が怒っていたなんてことは、きっと初めてのことである。

「兄貴、お疲れ」

「ああ」

「ほっぺ、凄い青くなってるよ」

「だろっな」

あの時は守るうとは思わなかったからな。

クリーンヒットだよ。

「少しかっこよかったよ」

「そうでもないさ」

「？」

「僕だって喧嘩で勝った余韻に浸ってるってわけじゃない。主人公として活躍できたとも思ってない。こんな方法でしか復讐出来なかった」

だって。

口を動かすと頬の痛みが増す。

「僕の負けだよ」

僕はフェンスを乗り越えて、下を覗き込んだ。

昇降口の前は数分前とは大違いで葬式のように静まり返っていた。

ここからでも鬼怒川先輩が抜け殻のようになってるのが良く見える。

僕は先輩の携帯に電話を掛けようとしたが。

ここで追い打ちをかけるように。

静かに雨が降り出した。

小粒の雨は、しだいに勢いを強くし、全てを濡らしていった。

雨足が強くなろうと、静かになった観客たちは動けない。

まるで鬼怒川先輩が皆をその場に縫い付けているかのようだった。

「・・・・・・・・・・天気も崩れたか」

振り向くと利根が目を覚まし、仰向けのまま雨を浴びていた。

「残念だったな。そのゴミに塗ったのはペンキだ。そう簡単には落ちない」

彼の目線の先にはペンキの缶があった。

「利根……！」

「兄貴」

麻香は僕の再沸する怒りを抑え、静かに言った。

「ペンキで書かれてしまえば、雨なんかじゃあの落書きは消せないよ」

「くそっ！」

僕はフェンスを殴りつける。

なんでこんなやつに……。

鬼怒川会長は何も間違っていないのに……。

「まあ」

「ペンキだったらね」

「？」

「もし私がそのペンキの缶の中身を私の『特性水落絵具』<sup>ペンキ</sup>に取り替えていたとしたら、そろそろじゃない？」

タイミングを見計らったように下のほうで歓声が上がった。

何が起きているのか、麻香の言葉で見るまでもない。

「私が態々（わざわざ）調合したんだから、完璧に落ちるわ。それこそ何も書かれていなかったように」

「麻香・・・・・・・・・・！」

「てめえ・・・・・・・・・・！」

「そうそう聞くのを忘れていたわ」

麻香は利根の近くに寄って、見下ろしながら言った。

「右腕と左腕、どちらが惜しい？」

鬼怒川夜見世。

彼女は自分の選択したものの全てが自分の中で最善だと思っていた。思った通りにすれば、楽しく生きていけると思っていた。

しかし。

それは間違いだった。

今までが上手く行き過ぎてしまったのだ。

時間と共に重なる歯車の歪みは、ついに彼女の唯一の生きがいに支障をきたしてしまった。

全ては運命の悪戯。

彼女が悪いわけでは決して無い。

なのに、残酷なほどに原因はそこにあった。

彼女、鬼怒川夜見世は正し過ぎた。

この現世に生きるには、その正しさは異端であった。

そして　　気付くのが遅過ぎたのだ。

人生を楽しむだけの生き方は、この世の中では不可能であることを。

高校生らしく、もっと悩んで良いことを。

自分が既に負けの烙印を押されていることに。

自分の選んだ道がハッピーエンドに繋がるということが勘違いであるということ、自覚すべきだったのだ。

勘違いは決して悪いことではない。

だが。

それは間違いであるということに、気付くことが大切なのだ。

麻香は利根越人を叩きのめすという簡易な解決法よりも、ペンキを摩り替えるという手の込んだことをした。

妹は鬼怒川夜見世に現実を気付かせたかった。

麻香は鬼怒川夜見世が自身で目を覚ますという手間を踏み潰したのだ。

おかげで。

彼女は 進化した。

この現実には 適応した。

鬼怒川夜見世は長い夢から目を覚ましたのだ。



学園祭の翌日。

昨日のお祭り騒ぎが嘘だったかのように、学校はいつもの日常を取り戻していた。

やはり片付けというものは大変で、大きな行事が終わった寂しさも相まって、あまり手は進まないでいた。

「君」

生徒会室の掃除をしている僕に声が掛かった。

当然、いつも通り自分は席に座っている鬼怒川先輩からである。

「何ですか？」

「頬は痛むのか？」

僕の左頬には、昨日の無茶によりできた青あざを隠す為に大きくガ  
ーゼが貼ってあった。

「心配していただけるのはありがたいですが、出来れば手伝ってくださいよ」

「分かった」

「だから遊んでないで……はあ!？」

今この人何て言った!？

素直に返事しなかったか!？

「そこまで驚かれるとは思わなかったぞ」

「いや、あの、どうしたんですか?」

余りの驚愕に舌が上手く回らない。

「ああ。いい加減君に甘えるのはようそつかと思ったのさ」

……。

言うておくがこれは大事件なんだぜ?

ある日地球の自転が逆回転になったくらいの大事件。

逆に言えばそこまで昨日の出来事はショックだったということ。

「そういえば、先輩」

「何かな？」

「僕の名前は聞いてすらくれないのに、麻香と栄の名前は覚えてましたよね。あれはどうしてですか？」

僕は少し前から気になっていたことを聞いてみる。

「ん、前に言わなかったか？ 私は気に入った人間にはあだ名を付けるんだよ」

「え、それじゃあ……」

先輩は麻香たちのことを……。

「ハハツ。言い方が悪かったかな。いや、彼女たちは例外。私のボキャブラリーに無かったんだよ。彼女たちにぴったりのあだ名が。なぜか思い付かなかったんだ。私があだ名を思い付けないなんてな。その時の私は異常だったよ」

「……そうですか」

鬼怒川先輩。

それは貴女が異常なわけではないと思いますよ。

きつと、あの二人から。

特に僕の妹に対して、その鋭い勘で異様さを感じとれたのだろう。

鬼怒川先輩自身とは違つ何かを。

「ところで君」

「何でしょう」

「次はどこを掃除すればいいんだ？」

「うわっ。話してる間に生徒会室が見違えるように綺麗になってる  
!?!」

滅茶苦茶手際いいじゃん。

何でこの人働かなかったの？

僕は小首を傾げる鬼怒川先輩を見て溜息をついた。

鬼怒川夜見世。

異常でも何でもない。

単に運が良かっただけ。

その豪運もそろそろ効力が薄くなってきてしまった。

それ故気付いた 勘違い。

驕り。

しかし僕は今でも彼女に非があつたなんて思っていない。

当然これからも、だ。

昨日までの先輩の生き方は確かにこの世の中では受け入れられないものだった。

だけど。

僕はそっちの方がおかしいと。

胸を張って言える。

鬼怒川夜見世にも。

言わせてみせる。

僕はきつと

この人がそんな世の中を創り変える、と。

そう思わざるを得ないのだ。

理想と現実とのギャップには、誰もが苦しめられます。しかし小説の中のように自分が思い描いたことがそのまま実現したら、この世界はすぐに色褪せてしまうでしょう。当然、出来ないことが面白いのではなく、不可能と想っていたことが出来たから私たちは自身の人生を謳歌できるのです。大きな困難ほど、乗り越えた時の快感は増大します。ですがここで重大な問題が浮かび上がります。乗り越えることが出来ない困難という存在に気付いてしまうからです。諦めないということは大切ですが、諦めるということもまた、同じくらい大切なことなのです。人間には理想ばかりを机上で妄想したとしても、時には失敗し、時には撤退する必要があります。かつての鬼怒川夜見世のように、全てを成功してしまう人がいるとしたら、なんて詰まらない人生を送っているんだろうと言いたくなってしまいます。それは私だけでしょうか。現実気付くことこそが人間の大きな成長なのではないでしょうか。

お久しぶりです。もしくは始めまして。王手です。読了ありがとうございます。ございました。

拙い文章を長々と書き連ねた小説ですが、何とか書き終える事が出来ました。今回はついに100ページを突破しました。書きに書き連ね、ついに三ケタ。どんなにくだらない話であっても、100ページ書いたことには違いありませんよね（笑）

更新は遅くなつてすいません。言い訳になりますが、後半数章の執筆は全て二回目です。本当の原稿は私の昔のパソコンと共に天に昇ってしまったのです。それから書き直して・・・、なのでプラス約

二か月という長い時間を費やしてしまいました。申し訳ありません。

このサイトにアップする前に毎回書いた小説を友人Tに読んでもらっているのですが、彼も茅ヶ崎栄のことがお気に入りだそうです。自分のキャラを好きと言ってもらえると、こんなに喜ばしいことはないって気持ちになります。今のところ新キャラ登場の予定はないので、既存のキャラを気に入って頂けることは本当に助かります。さて、作者である私なのですが、大学受験を来年に控えております。おそらくですが、進級してから高校を卒業するまでは一切更新できないと思います。なので次回あたりでこの『妹の暇潰し』を完結させようと思っています。それまで、私の拙文にお付き合いいただければとお願い申し上げる次第です。出来れば今年中には完成させてしまいたいと思います。これからまたお時間を頂く形となりますが、もし気が向いたら次も読んでやってください。御願い致します。ありがとうございます。またお会いできる事を切に願っております。

王手



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0474o/>

---

妹の暇潰し

2011年9月2日17時09分発行